

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 363 集

# 栗林遺跡発掘調査報告書

担い手育成基盤整備事業(真城地区)関連遺跡発掘調査

(財) 岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

くり ばやし  
栗林遺跡発掘調査報告書

担い手育成基盤整備事業(真城地区)<sup>しんじょう</sup>関連遺跡発掘調査

## 序

岩手県には、旧石器時代の遺跡を始めとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地域にあり、平成12年度の岩手県教育委員会のまとめでは10,000か所を超えております。先人が残したこれらの埋蔵文化財を保護し保存していくことは、私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因となりました担い手育成基盤整備事業真城地区を例に挙げるまでもなく、現代社会を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発もまた県民の切実な願いであることは言うまでもありません。

埋蔵文化財の保護・保存と地域開発事業という、相容れない要素を持つ事業の調和がとれた施策が今日的な課題となっており、財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場から、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す処置をとって参りました。

本書は、岩手県による担い手育成基盤整備事業真城地区に関連した、栗林遺跡の発掘調査結果をまとめたものであります。遺跡は北上川の右岸で、かつ北上川水系に属する胆沢川によって形成された扇状地の扇端部に立地し、平安時代及び近世のものと推定される溝跡遺構を始めとして、近世の掘立柱建物跡等、各種の遺構とそれらに伴う遺物が発見されています。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご協力とご援助を賜りました、水沢地方振興局水沢農村整備事務所や水沢市教育委員会及び前沢町教育委員会を始めとする多くの関係諸機関・関係各位に、衷心より感謝申し上げます。

平成13年1月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 千葉浩一

## 例 言

1. 本報告書は、岩手県水沢市真城字八反町39他に所在する栗林遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。
2. 本遺跡の岩手県遺跡登録台帳の遺跡番号と調査略号は次の通りである。  
栗林遺跡（遺跡番号：NE36-2315・調査略号：KB-99）
3. 本遺跡の調査は、担い手育成基盤整備事業真城地区に伴う緊急発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会事務局文化課の調整を経て、水沢地方振興局水沢農村整備事務所からの委託を受けた、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
4. 野外調査の期間と、調査面積・調査担当者は次の通りである。  
調査期間 平成11年4月8日～6月7日  
調査面積 1,600m<sup>2</sup>  
調査担当者 半澤武彦・菅原靖男
5. 室内整理作業は、平成11年11月1日～平成12年1月31日まで実施した。
6. 本報告書の原稿執筆・編集は、半澤武彦が行った。
7. 出土品の鑑定及び分析は、次の機関・個人に依頼した。（敬称略）  
石材鑑定 . . . . . 花崗岩研究会（会長：矢内桂三 岩手大学工学部教授）  
炭化物同定（肉眼鑑定） . . . 早坂松次郎（社団法人 岩手県木炭協会）  
羽口・鉾滓・金属分析 . . . 岩手県立博物館
8. 基準点の測量及び航空写真撮影は、次の機関に委託した。  
基準点の測量 . . . . . 株式会社 舟山コンサルタント  
航空写真撮影 . . . . . 株式会社 ハイマーテック
9. 発掘調査に於いて、次の機関の協力を得た。  
水沢市教育委員会・前沢町教育委員会・財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター・常滑市民俗資料館  
岩手県立博物館
10. 野外調査や整理・報告書の作成には、次の方々からのご協力とご指導を頂いた。（順不同・敬称略）  
藤澤良祐 青木修（財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター） 中野晴久（常滑市民俗資料館）  
赤沼英男 咲山まどか（岩手県立博物館）
11. 野外調査では水沢市真城地区を始めとする地元の方々と、室内整理に於いては当埋蔵文化財センター臨時職員の方々によるご協力を頂いた。
12. 本遺跡の調査に関わる記録、遺物等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

## 〈本文目次〉

序

例 言

I. 調査に至る経過	1
II. 遺跡の立地と環境	1
1. 遺跡の立地と地形及び地質	1
2. 遺跡の基本層序	4
3. 周辺の遺跡	4
III. 調査の方法と室内整理	7
1. 野外調査	7
2. 室内整理	9
IV. 検出された遺構と出土遺物	11
(1) 掘立柱建物跡・柱穴列	12
(2) 柱穴・柱穴状土坑	16
(3) 溝 跡	20
(4) 土 坑	29
(5) 井戸跡	30
(6) 水田跡 (近代の遺構)	30
V. まとめ	32
1. 調査対象範囲及び検出された遺構について	32
2. 出土遺物について	33
3. 所 感	33
VI. 分析・鑑定結果	45
栗林遺跡出土鉄関連遺物の金属考古学的調査結果	46
報告書抄録	76

## 〈図版目次〉

<p>第 1 図 遺跡の位置及び遺跡周辺地形図 . . . 2</p> <p>第 2 図 周辺地域地形分類図 . . . . . 3</p> <p>第 3 図 基本層序柱状図 . . . . . 4</p> <p>第 4 図 周辺の遺跡分布図 . . . . . 6</p> <p>第 5 図 グリッド及び遺構配置図 . . . . . 8</p> <p>第 6 図 実測図凡例 . . . . . 10</p> <p>第 7 図 掘立柱建物跡・柱穴列 (平面図及び断面図) . . . 15</p> <p>第 8 図 柱穴・柱穴状土坑群①(調査区北側) . . . 18</p> <p>第 9 図 柱穴・柱穴状土坑群②(調査区中央) . . . 19</p> <p>第 10 図 1・10号溝 (平面図及び断面図) . . . 21</p> <p>第 11 図 2～5号溝 (平面図及び断面図) . . . 23</p> <p>第 12 図 6号溝 (平面図及び断面図) . . . . . 24</p> <p>第 13 図 7～9・11～18号溝 (平面図及び断面図) . . . 28</p>	<p>第 14 図 1～4号土坑・井戸跡 (平面図及び断面図) . . . 31</p> <p>第 15 図 1・3号土坑出土遺物 . . . . . 34</p> <p>第 16 図 3号土坑出土遺物 . . . . . 35</p> <p>第 17 図 3号土坑出土遺物 . . . . . 36</p> <p>第 18 図 3・4号土坑出土遺物 . . . . . 37</p> <p>第 19 図 4号土坑・井戸跡出土遺物 . . . . . 38</p> <p>第 20 図 井戸跡・溝跡・柱穴状土坑 遺構外出土遺物 . . . 39</p> <p>第 21 図 遺構外出土遺物 . . . . . 40</p> <p>第 22 図 3号土坑・南端水田跡出土遺物 (土製品・鉄製品) . . . 41</p> <p>第 23 図 溝跡・遺構外出土遺物(陶磁器①) . . . 42</p> <p>第 24 図 遺構外出土遺物(陶磁器②) . . . . . 43</p>
---	--

## 〈写真図版目次〉

<p>写真図版 1 栗林遺跡出土遺物(陶磁器・漆器椀) 〔カラー写真頁〕 . . . . . 55</p> <p>写真図版 2 栗林遺跡全景 〔カラー写真頁〕 . . . . . 56</p> <p>写真図版 3 遺跡周辺における変化の様子 . . . 57</p> <p>写真図版 4 調査前風景・攪乱の状況 (中央～北側) . . . . . 58</p> <p>写真図版 5 1号掘立柱建物跡 . . . . . 59</p> <p>写真図版 6 2号掘立柱建物跡 . . . . . 60</p> <p>写真図版 7 1・10号溝 2・3号溝 (全景及び断面) . . . . . 61</p> <p>写真図版 8 4・5号溝(全景及び断面) 1～5・10号溝(完掘全景) . . . . . 62</p> <p>写真図版 9 6～9号溝(全景及び断面) . . . . . 63</p>	<p>写真図版 10 11～14号溝(全景及び断面) . . . 64</p> <p>写真図版 11 15～18号溝(全景及び断面) . . . 65</p> <p>写真図版 12 北端部溝跡群完掘全景・井戸跡 . . . 66</p> <p>写真図版 13 1～3号土坑 (全景及び断面・遺物出土状態) . . . 67</p> <p>写真図版 14 4号土坑(全景及び断面) . . . . . 68</p> <p>写真図版 15 検出作業・実測風景 柱穴状土坑群・調査区完掘全景 . . . 69</p> <p>写真図版 16 中央・南端部水田跡(近代) . . . 70</p> <p>写真図版 17 遺構内出土遺物(1) . . . . . 71</p> <p>写真図版 18 遺構内出土遺物(2) . . . . . 72</p> <p>写真図版 19 遺構内・外出土遺物(3) . . . . . 73</p> <p>写真図版 20 遺構内・外出土遺物(4) . . . . . 74</p> <p>写真図版 21 遺構内・外出土遺物(5)陶磁器 . . . 75</p>
--	---

## 〈表〉

第 1 表 周辺の遺跡一覧 . . . . . 4	第 2 表 柱穴・柱穴状土坑一覧 . . . . . 16
---------------------------	-------------------------------

# I. 調査に至る経過

栗林遺跡は、「担い手育成基盤整備事業真城地区」の施行に伴って、その事業区域に位置することから発掘調査することとなったものである。

「担い手育成基盤整備事業真城地区」は、水沢市真城及び前沢町古城地内の一部にまたがる受益面積266haの地区で、昭和32年頃10a区画に整理されたが、区画形状が小さく農道の幅員も狭いなど、大型機械化体系の導入に支障を来している。

また、小水路は土水路で用排水兼用となっているため、浅く、排水不良地帯が大部分を占めており、耕地の汎用化が困難な状況にある。

これらの阻害要因を除去し、効率的かつ安定的な経営体に農地を集積し、高生産性農業の確立を図り、併せて農村環境水準の向上を資すために、大区画圃場整備を実施するものとして、平成7年度新規採択された地区であり、平成10年度で4年目となる。

当事業の施行に係わる埋蔵文化財の取扱いについては、水沢地方振興局胆江土地改良事業所から平成7年6月5日付け胆土地第179号「県営圃場整備事業実施に伴う遺跡分布調査について（依頼）」の文書により、岩手県教育委員会に対して分布調査の依頼を行ったのが最初である。依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成7年7月17日～18日に分布調査を実施したが、その結果は平成7年8月25日付け教文第478号「県営圃場整備事業実施に伴う埋蔵文化財の分布調査について（回答）」に於いて、水沢地方振興局胆江土地改良事業所へ回答し、その際、工事施工範囲が栗林遺跡の範囲内でもあることが付記された。

回答を受けた水沢地方振興局胆江土地改良事業所では、栗林遺跡を含む面工事実施年度である、平成9年11月27日付け胆土地第387号「担い手育成基盤整備事業真城地区に係わる埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」の文書により、岩手県教育委員会に対して試掘調査を依頼した。依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成9年12月1日～10日に試掘調査を実施したが、その結果は平成10年1月14日付け教文第846号「担い手育成基盤整備事業真城地区に係わる埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」に於いて、水沢地方振興局胆江土地改良事業所へ回答し、その際に、栗林遺跡の発掘調査を必要とする旨が付記された。

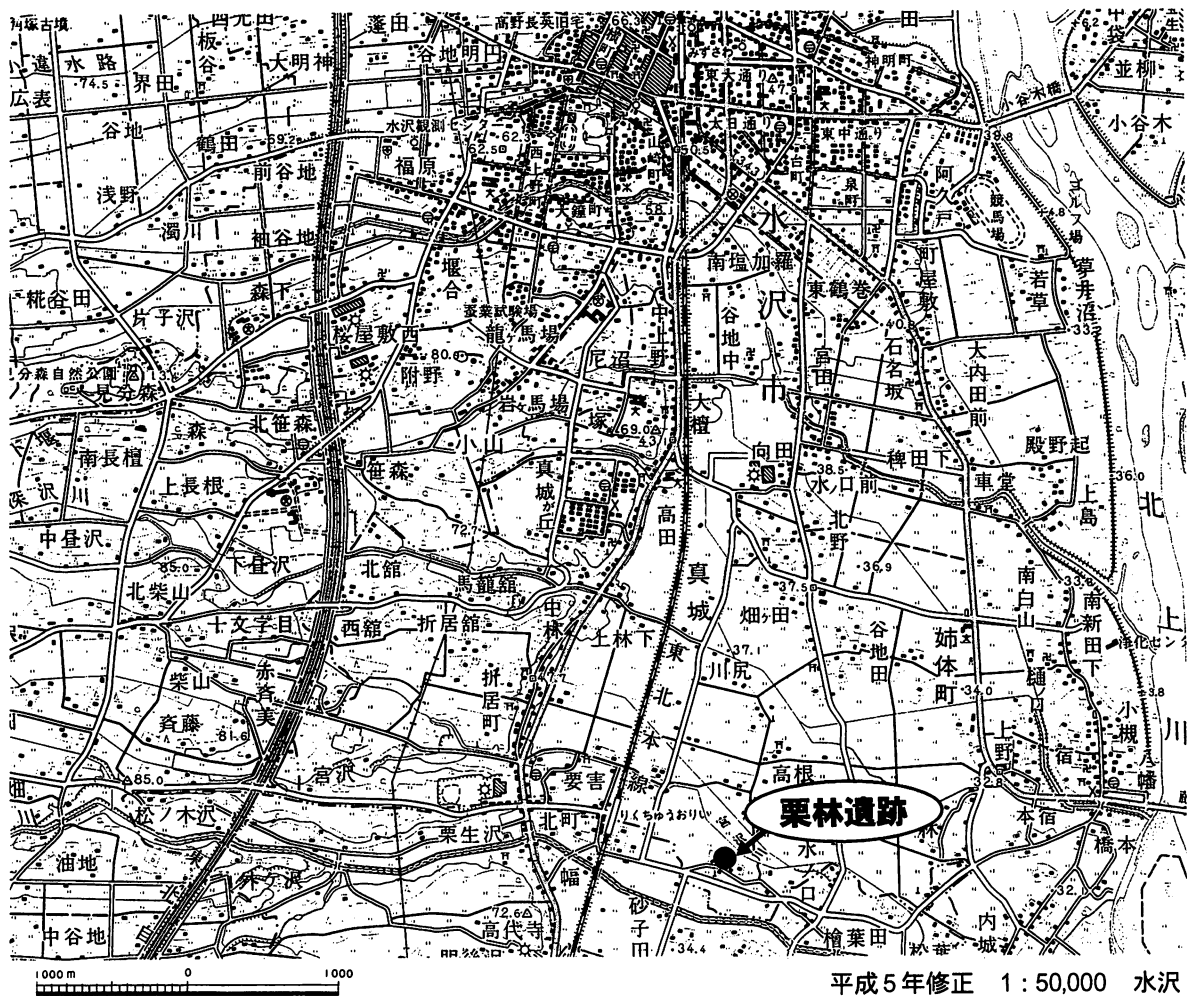
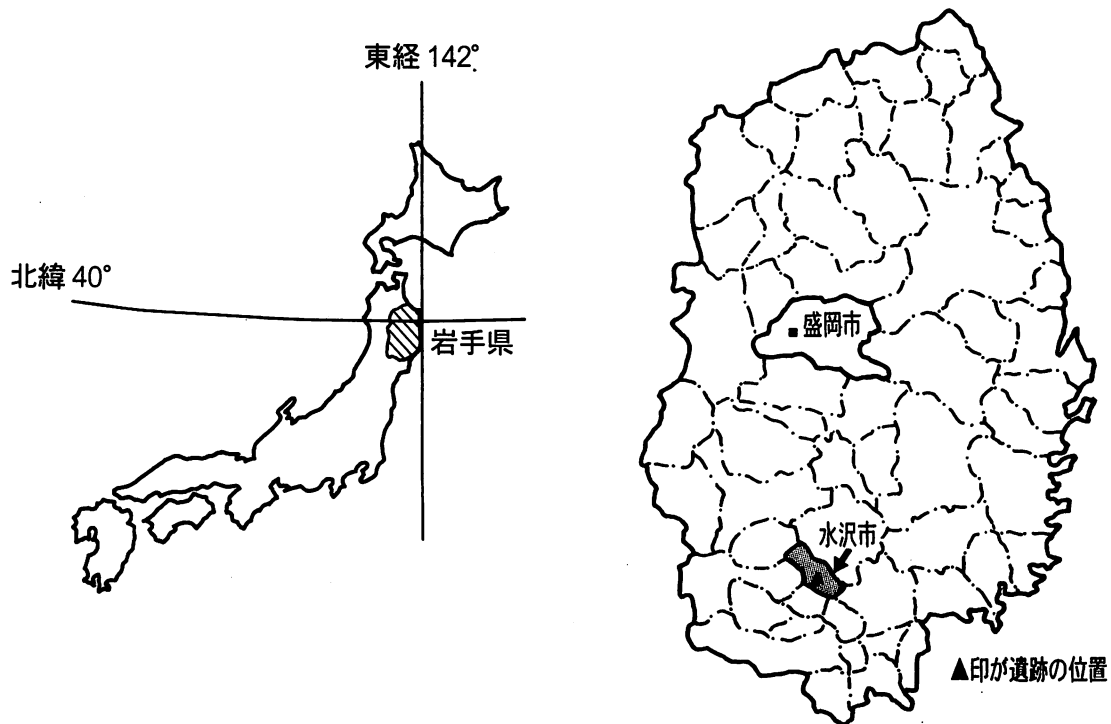
# II. 遺跡の立地と環境

## 1 遺跡の立地と地形及び地質

「栗林遺跡」が位置する水沢市は、西側の奥羽山脈と東側の北上山地に挟まれ、北上川が形成した沖積地と、北上川の支流である胆沢川が長年に渡って形成した扇状地上にその大部分が立地している。総面積は96km<sup>2</sup>、人口は約6万人で、行政区画上から見ると、北は金ヶ崎町、東は東山町、南は前沢町、西は胆沢町にそれぞれ接し、古くから伊達藩の武家屋敷が形成され、高野長英・齋藤實・後藤新平らの偉人を輩出している。

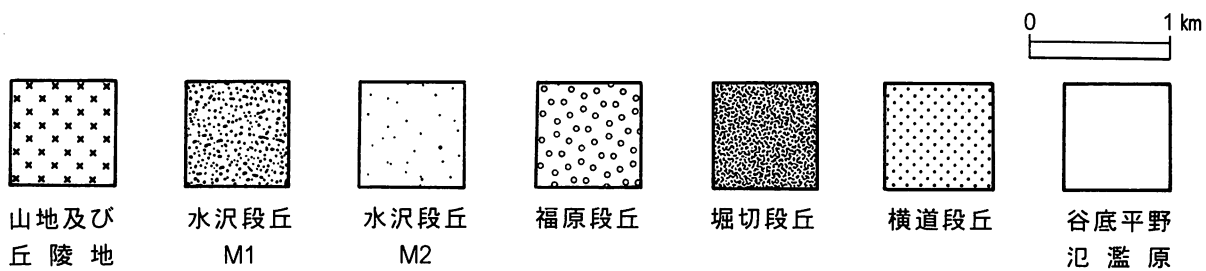
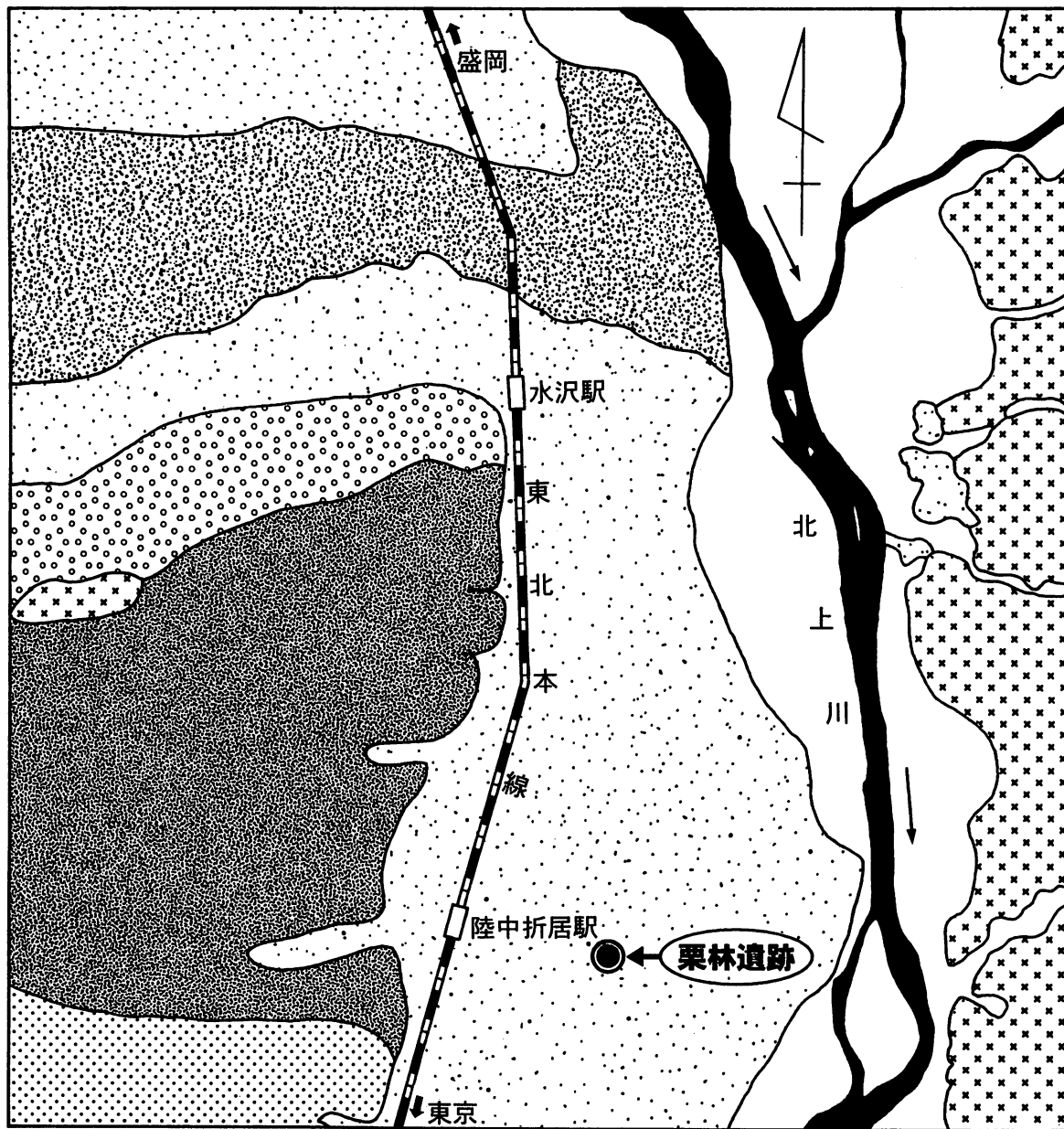
現在では商業・文化のまちとして発展するとともに、半導体工場を始めとする産業の集積や、郊外には大規模ショッピングセンターが開店するなど、県南の中核都市を担う役割を果たしている。

本遺跡は、JR東北本線陸中折居駅の東約700mに位置し、開析が進行した胆沢扇状地扇端東端部の、寿安中堰に潤される微高地上（図中：水沢段丘面M2）にあり、前沢町との境界線が、調査区南側付近を通っている。古来から胆沢扇状地の湧水に恵まれたところであり、遺跡の東約2.5kmには北上川が南流し標高は35m前後を示している。



第1図 遺跡の位置及び遺跡周辺地形図





第2図 周辺地域地形分類図

調査区一帯は、周辺部を含めて高低差がほとんど見られない平坦地であるが、調査区は若干の盛土が成されており、現況は休耕田またはそれを転用した畑地で、南端付近を水沢市と前沢町との境界線が通る。

また、調査区と接する西側には、中世末期から続いているとされる鈴木家の豪壮な屋敷地が広がっている。

## 2 基本層序

調査区のほぼ中央、水田跡付近で確認した基本層序は以下の通りであるが、全域に渡ってⅠ層とⅡ層が後年の圃場整備等による攪乱を受けているため、必ずしも調査区域全域の層序を表すものではない。

### ＜水田跡付近 調査区中央＞

Ⅰ層：10YR3/4・暗褐色・粘性あり・締まり中・シルト

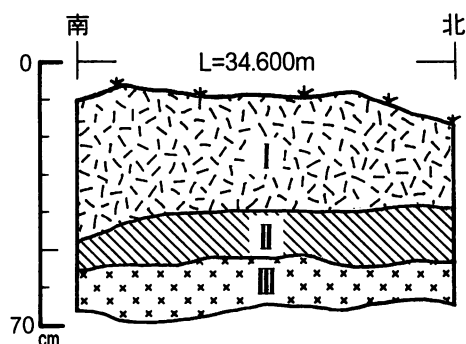
(酸化鉄を少量含んでいる・耕作土)

Ⅱ層：10YR3/2・黒褐色・粘性あり・締まりやや疎・砂質シルト

(酸化鉄を全体に多く含んでいる)

Ⅲ層：10YR5/6・黄褐色・粘性あり・締まり密・シルト

(地山層を形成している)



第3図 基本層序 柱状図

## 3 周辺の遺跡

調査を行った当該遺跡を始め、胆沢扇状地の扇端部周辺には、ほぼ同時代のものと思われる遺跡が数多く分布していることが、次に挙げる周辺の遺跡一覧表から読み取ることができる。この表は平成10年4月発行の「岩手県教育委員会遺跡台帳」をもとに、当該遺跡周辺に分布する遺跡の詳細をまとめたものである。

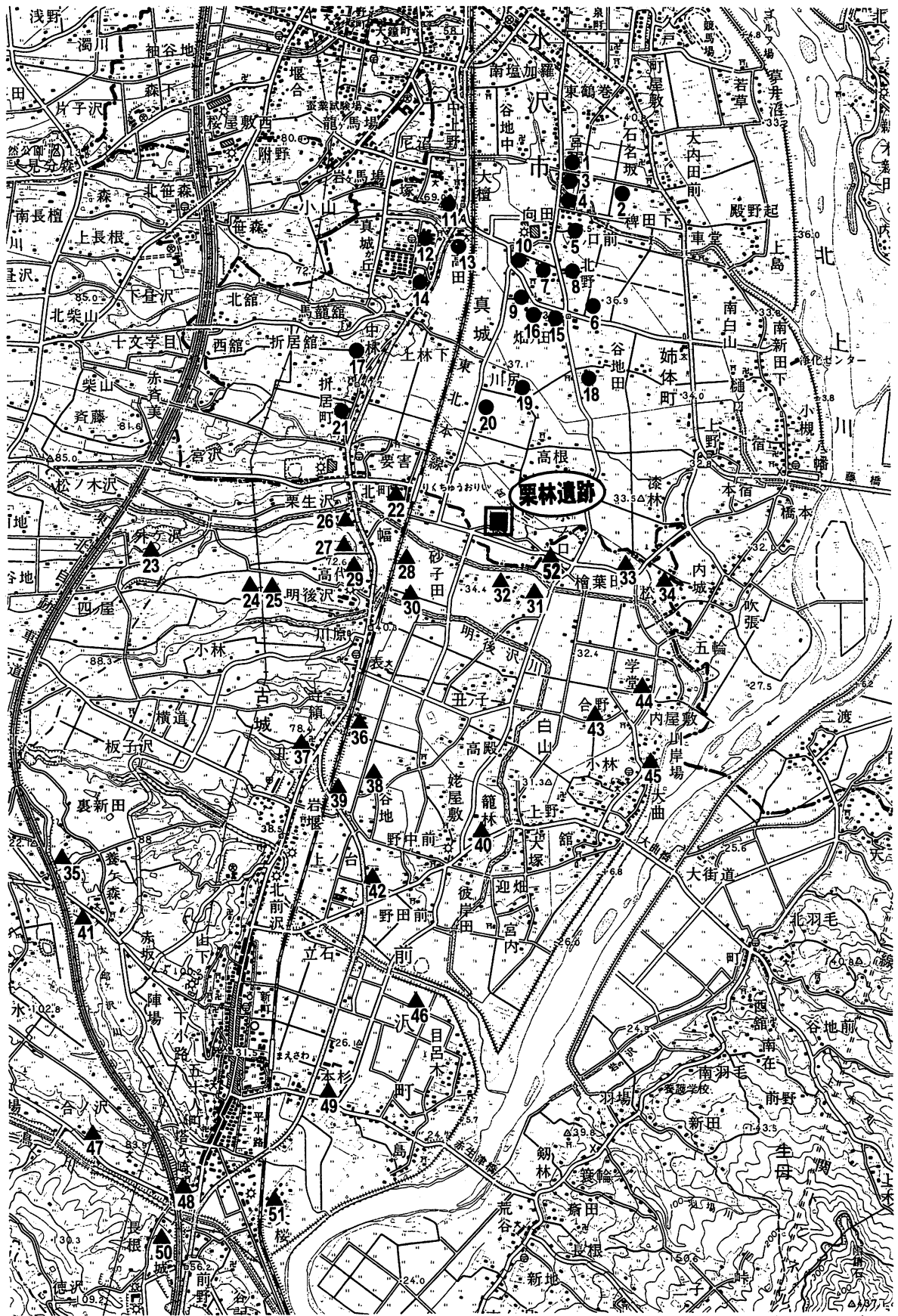
第1表 周辺の遺跡一覧（水沢市）

No.	遺跡名	所在地	種別	時代	遺物・遺構等
1	林前Ⅰ	水沢市姉体町林前	集落跡	平安	土師器・須恵器
2	林前Ⅱ	〃 真城林前	散布地	〃	土師器・須恵器
3	林前南館	〃 姉体町林前	館跡	〃	土師器（複合遺跡・縄文）
4	向田	〃 姉体町向田	散布地	〃	土師器
5	北野Ⅰ	〃 真城北野	〃	〃	土師器・須恵器
6	北野Ⅱ	〃 真城北野	集落跡	〃	土師器・須恵器
7	北野Ⅲ	〃 真城北野	〃	〃	土師器・須恵器
8	金田Ⅰ	〃 真城金田	〃	〃	土師器・須恵器
9	金田Ⅱ	〃 真城金田	散布地	〃	須恵器
10	東谷地	〃 真城東谷野	〃	〃	土師器
11	大壇	〃 真城大壇	集落跡	〃	土師器・須恵器
12	雷神Ⅰ	〃 真城雷神	〃	〃	土師器・須恵器
13	高田	〃 真城高田	〃	〃	土師器・須恵器
14	真城上野団地	〃 真城雷神	〃	〃	土師器・須恵器
15	畑田Ⅰ	〃 真城畑田	散布地	〃	土師器・須恵器

No.	遺跡名	所在地	種別	時代	遺物・遺構等
16	畑田Ⅱ	水沢市真城畑田	散布地	平安	土師器・須恵器
17	中林B	〃 真城中林	集落跡	〃	土師器・須恵器
18	寺ヶ前	〃 真城谷地田	散布地	〃	土師器
19	土手北	〃 真城土手	〃	〃	土師器・須恵器
20	二ノ淵	〃 真城二ノ淵	〃	〃	土師器・須恵器(複合遺跡・中世)
21	堤ヶ沢	〃 真城堤ヶ沢	集落跡	〃	土師器・須恵器

周辺の遺跡一覧(水沢市以外の周辺地域-前沢町)

No.	遺跡名	所在地	種別	時代	遺物・遺構等
22	北館	前沢町古城字北館	環壕屋敷跡・散布地	平安・中世	土師器
23	古城外ヶ沢	〃 古城外ヶ沢	〃	〃	縄文土器(中期)・土師器
24	鳥子沢	〃 古城字鳥子沢	〃・城館跡	平安・中世	土師器・堀跡
25	明後沢	〃 古城字明後沢	散布地	奈良	布目瓦・屋根瓦・鬼瓦
26	熊野	〃 古城字幅	瓦窯跡?	平安	瓦
27	幅	〃 古城字幅・雨沼・志人沢	散布地・瓦窯跡?	縄文・平安	縄文土器・土師器・焼土
28	砂子田	〃 古城字砂子田	〃	平安	土師器
29	八郎館	〃 古城字高代寺	〃・城館跡	平安・中世	土師器・須恵器・堀・郭
30	館合下	〃 古城字館合下	散布地	平安	土師器・須恵器
31	林Ⅰ	〃 古城字林後	〃	古代	土師器・須恵器
32	林Ⅱ	〃	〃	〃	土師器
33	檜葉田	〃 白山字檜葉田	〃	平安	土師器
34	松葉	〃 白山字松葉	〃	〃	土師器
35	養ヶ森	〃 字養ヶ森	集落跡	〃	土師器・須恵器
36	寺領沖	〃 古城字寺領沖	〃	古代	土師器
37	古城上野	〃 古城字丑沢	〃	〃	縄文土器(中期)・土師器・石器
38	要害	〃 古城字要害	〃	〃	土師器
39	亀田	〃 古城字亀田	環壕屋敷跡	平安	土師器・須恵器
40	田高Ⅱ	〃 白山字田高	散布地	縄文・平安	土師器・須恵器・石斧
41	上ノ原	〃 字養ヶ森	〃	〃	土師器・須恵器・石鏃・石匙
42	上ノ台	〃 古城字上ノ台	環壕屋敷跡	古代	土師器
43	合野	〃 白山字合野	集落跡	〃	土師器・石斧
44	内屋敷	〃 白山字内屋敷	散布地	平安	土師器
45	川岸場Ⅰ	〃 白山字川岸場	〃	縄文・古代	注口土器・甕・高坏・皿・瓶子
46	竹沢	〃 字北久保	〃	平安	須恵器
47	合ノ沢A	〃 字合ノ沢	〃	縄文・平安	縄文土器(中期)
48	泊ヶ崎	〃 字泊ヶ崎	〃	〃	縄文(中期・天王山)土師・須恵器
49	目呂木本杉	〃 字本杉	〃	古代	土師器・甕
50	新城	〃 字新城	集落・城館跡	縄文・平安	縄文土器・土師器・須恵器
51	大桜	〃 字大桜	散布地	平安	土師器・須恵器
52	水ノ口	〃 白山字水ノ口	集落跡	〃	土師器・須恵器



●印 水沢市分 ▲印 水沢市以外分 (前沢町)

1:50,000 水沢

第4図 周辺の遺跡分布図

### Ⅲ. 調査の方法と室内整理

#### 1 野外調査

##### (1) グリッドの設定

野外調査に於けるグリッドの設定にあたり、平面直角座標第X系を座標変換した調査座標を用いた。栗林地区の調査座標原点は、 $X = -101,110.000$ 、 $Y = +27,660.000$ である。この座標原点を基点として、遺跡全体を一辺50mの大グリッドに区画した。北西隅を基点に東方向へはアルファベットの大きい文字でA～B、南方向へはI～IIの数字を付して、これを組み合わせ1A、2B・・・と表示した。

小グリッドは、大グリッドを10等分して5m×5mに区画し、北西隅を基点に東方向へはa～j、南方向へは1～10を付して、1a、2b・・・と設定した。

##### (2) 粗掘りと遺構検出

本調査に先立ち、岩手県教育委員会文化課による試掘調査が実施されており、今回の調査対象区域の大部分について、遺構と遺物の状況がある程度把握されていた。調査にあたり、全域にわたって満遍なく2m×2m程度の試掘箇所を設定し、層の状況把握に努めた。この結果、調査区全域の層序が比較的単純で、しかも水平であることや、耕作土（I層）中には比較的遺物が些少であることなどから、粗掘りには重機（パワーショベル）を使用し、その後人力による遺構検出を順次実施した。

##### (3) 遺構の命名について

検出された遺構の命名については、下記の記号を用いて付記することとした。各種遺構の遺構番号については検出順に付しており、欠番になっているものについては、整理作業の過程で遺構としての認定から除外したものである。

土坑 RD	溝跡 RG	柱穴・柱穴状土坑 P
-------	-------	------------

検出されたその他の遺構については、上記の命名方法をとらず、遺構そのものの名称を付すこととした。

##### (4) 遺構の精査と実測・遺物の採り上げ

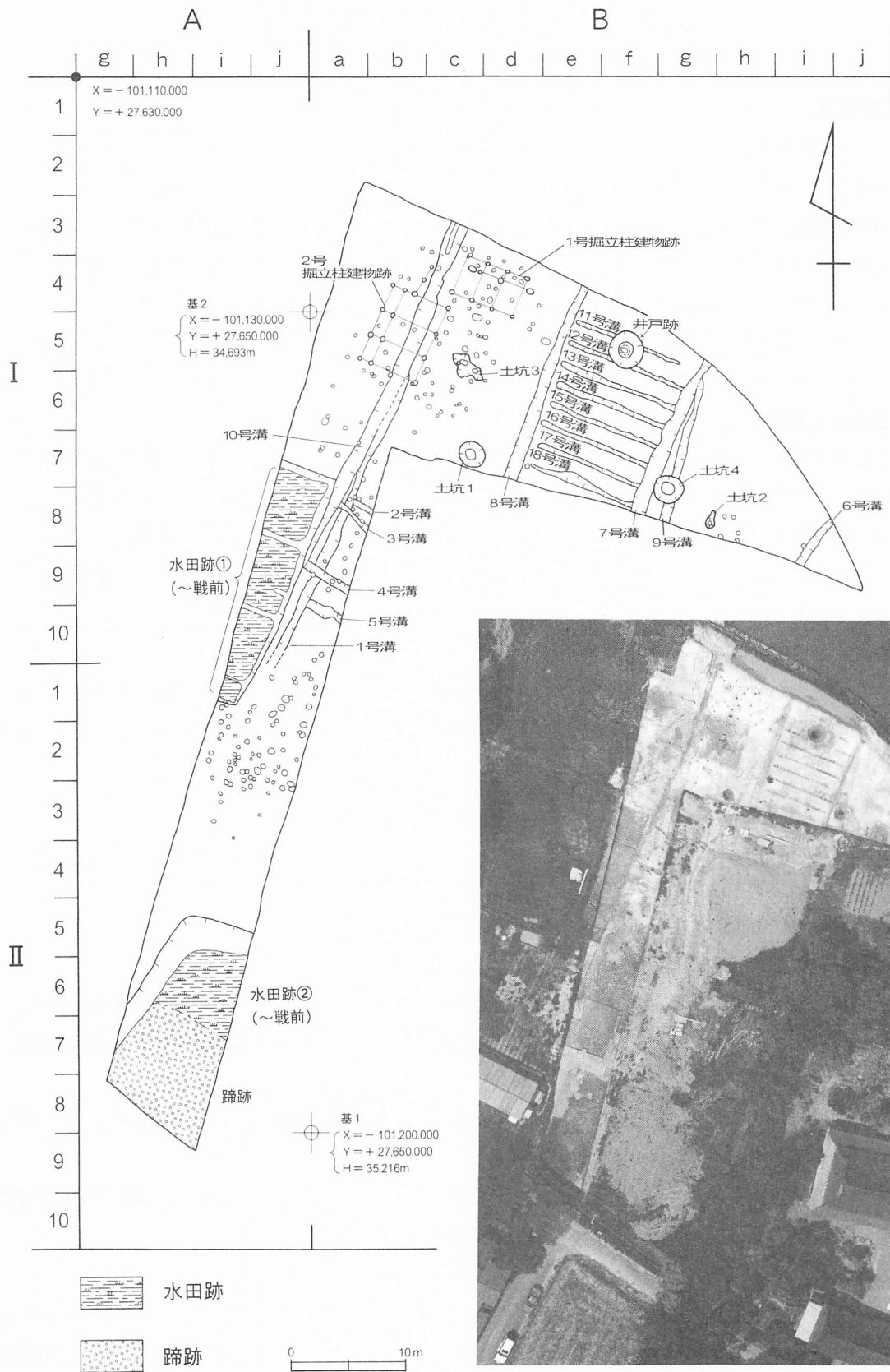
検出された遺構は、規模の大きな土坑は4分法、その他の土坑類や井戸跡等については2分法を原則として精査を行ったが、必要に応じてその他の方法も併用した。記録として必要な図面及び写真撮影は、精査の各段階に於いて、適宜これを行った。

溝跡については、平板測量を中心に行い、平面図を作成した。実測図の縮尺は1/20を基本とし、平面図と断面図を作成した。

遺構内出土の遺物については、埋土の場合、上位・中位・下位に分けて採り上げた。遺構外での出土遺物については、調査区毎あるいはグリッド毎に出土した層位を記して採り上げた。

##### (5) 写真撮影

野外調査での写真撮影は、6×7cm判カメラ（白黒）と35mm判カメラ（白黒・カラーリバーサルフィルム）を使用し、この他にポラロイドカメラ1台を、フィールドカード作成等のメモ的な用途に併用した。撮影にあたっては、撮影内容を記載した撮影カードを、対象物を撮影する前に撮影挿入し、整理の際の手間を削減した。また、調査終了前に、セスナ飛行機による航空撮影を実施した。



第5図 グリッド及び遺構配置図

## 2 室内整理

### (1) 作業内容

遺物の処理は、遺物の注記・接合・復元を優先させて行い、その次に、仕分け・登録・写真撮影・実測・トレース・拓本の作成を並行して進めた。その後、実測図の点検とトレースを行い、図版・写真図版の作成と順序立てて実施した。

### (2) 遺構

遺構配置図は、発掘調査時に行った平板測量による平面図に基づき、20分の1の縮尺図を作成した。

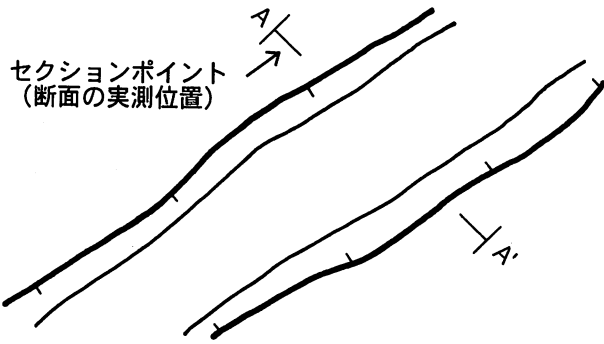
報告書図版中に於ける各遺構図面は、一部に縮尺を変更したものもあり、図面にはそれぞれスケールを付した。なお、平面図に於ける方位矢印は、座標北を示している。

### (3) 遺物

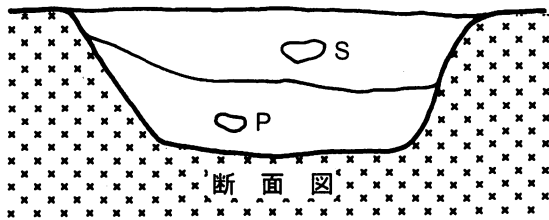
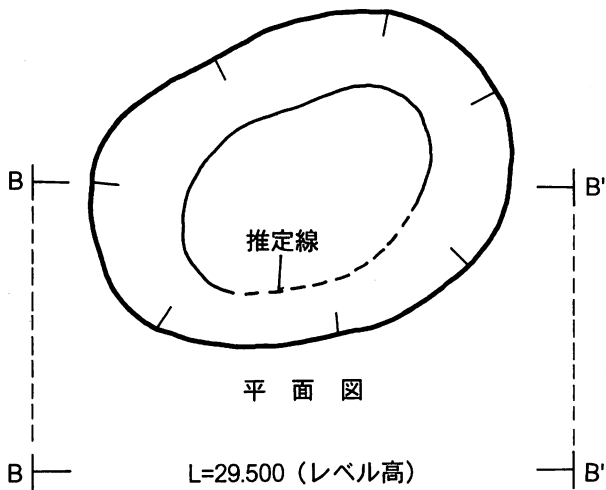
土器の実測図は原則として、反転実測が可能なものと、一部には破片実測も併せて掲載した。掲載遺物のスケールは報告書図版中にそれぞれ付しているが、原則として2分の1で掲載している。また、遺物写真の番号は、遺物図版の番号と一致させている。

### (4) 凡例

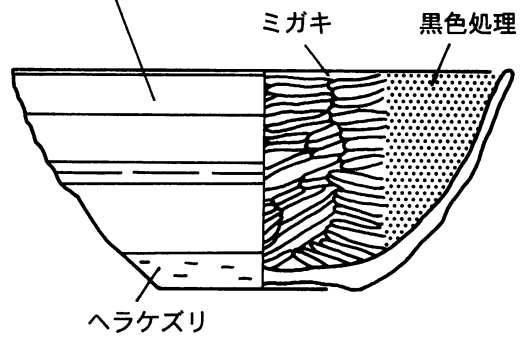
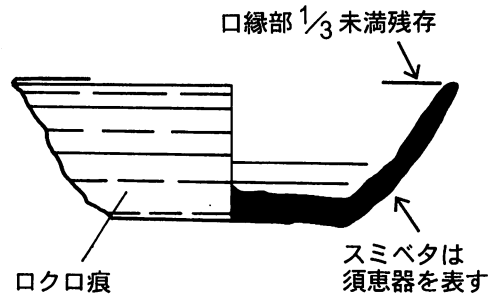
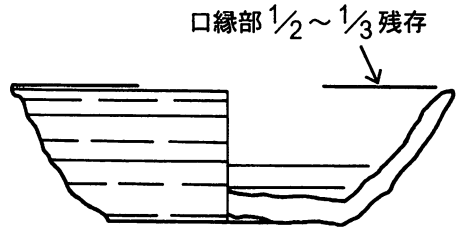
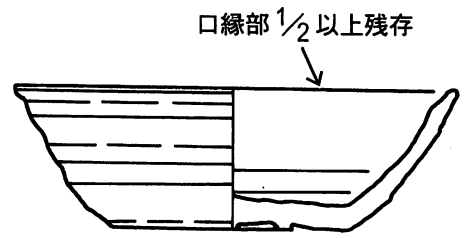
実測図版中の遺構平面図・断面図や土器の調整方法等については、別掲の実測凡例図を参照して頂きたい。



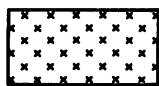
溝跡 (RG) 凡例



土坑 (RD) 凡例



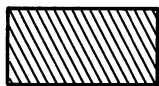
土器実測図 凡例



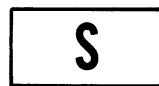
地山



攪乱



炭化物



礫



焼土



土器

第6図 実測図凡例



#### IV. 検出された遺構と出土遺物

## IV. 検出された遺構と出土遺物

検出された遺構は、掘立柱建物跡2棟、建物跡を形成した一部分とも推測される柱穴列が2列、柱穴及び柱穴状土坑213基（掘立柱建物跡・柱穴列の分も含む）、溝跡18条、土坑4基、井戸跡1基、及び近代の遺構である水田跡2箇所である。

### (1) 掘立柱建物跡・柱穴列

登録した掘立柱建物跡は2棟・柱穴列は2列である。以下に挙げる計測値は、実際に検出された柱穴をもとにして算出した値で示している。

#### 〔1号掘立柱建物跡〕（第7図・写真図版5）

〈位置〉 IB4c～IB5dグリッドに跨って位置する。

〈平面形式〉 軸方向：西北西－東南東〔西を基準に22°北偏する〕・桁行3軒の長方形プランである。

〈柱穴の形態〉 それぞれの柱穴に見られる平面形は、円～楕円形を呈しており、柱材等の痕跡は残っておらず、使用した柱穴は8基である。

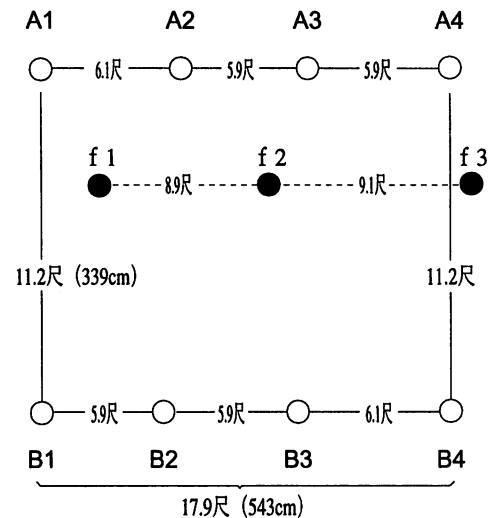
〈柱穴・柱間寸法〉 当該遺構における柱穴・柱間の各寸法は以下の通りである。

#### — 柱 穴 寸 法 —

柱穴No.	A 1	A 2	A 3	A 4
直径cm	28.0×24.0	27.0×26.5	34.5×30.0	50.5×33.5
深さcm	16.0	14.5	17.0	28.0

柱穴No.	B 1	B 2	B 3	B 4
直径cm	35.5×26.5	40.5×30.0	35.0×33.5	26.0×22.0
深さcm	13.5	16.0	20.0	21.5

#### — 1号掘立柱建物跡配置図 —



※上記 f 1～f 3は同時に検出された柱穴列である。

#### — 柱 間 寸 法 —

A 1→A 4へ順に、185 cm (6.1 尺) + 179 cm (5.9 尺) + 179 cm (5.9 尺)

B 1→B 4へ順に、179 cm (5.9 尺) + 179 cm (5.9 尺) + 185 cm (6.1 尺)

なお、A・B間の柱間寸法は339 cm (11.2 尺)で共通している。

〈出土遺物〉 柱穴A3から須恵器片（小型の甕の一部分）が1点出土している。

〈建物の性格・年代〉 建物の大きさから、付属小屋としての用途が考えられ、また、柱穴A3から須恵器片が出土しているものの、各柱穴の規模等から近世に造られたものと推定している。

〔2号掘立柱建物跡〕（第7図・写真図版6）

〈位置〉 IB4b～IB5aグリッドに跨がって位置する。

〈平面形式〉 軸方向：南南西－北北東〔南を基準に25°西偏する〕・桁行3軒の長方形プランである。

〈柱穴の形態〉 それぞれの柱穴に見られる平面形は、円～楕円形を呈しており、柱材等の痕跡は残っておらず、使用した柱穴は12基である。

〈柱穴・柱間寸法〉 当該遺構における柱穴・柱間の各寸法は以下の通りである。

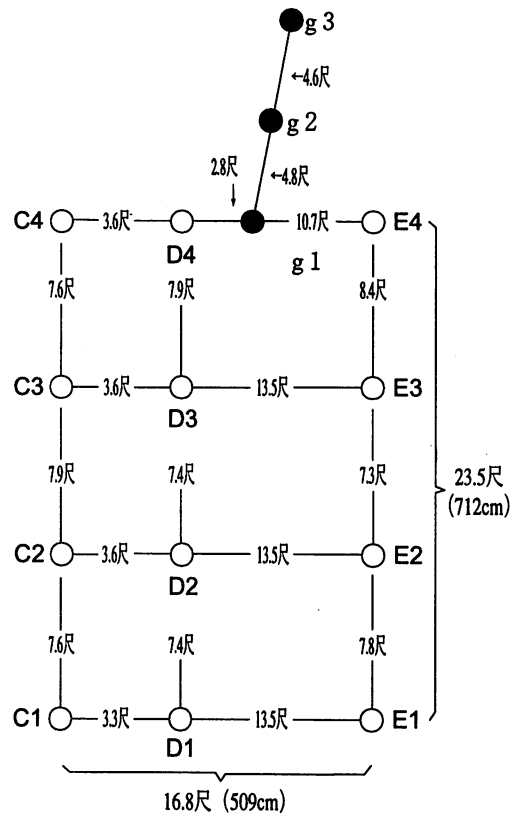
－柱穴寸法－

柱穴No.	C 1	C 2	C 3	C 4
直径cm	26.5×26.5	28.5×23.0	19.0×17.5	32.5×27.0
深さcm	12.0	17.5	18.0	25.5

柱穴No.	D 1	D 2	D 3	D 4
直径cm	38.5×30.0	35.0×29.5	35.0×25.5	31.5×27.5
深さcm	32.0	22.5	26.0	23.0

柱穴No.	E 1	E 2	E 3	E 4
直径cm	37.0×33.5	39.0×34.0	36.5×34.5	33.0×31.0
深さcm	23.5	28.0	23.5	21.0

－2号掘立柱建物跡配置図－



※上記のg1～g3は同時に検出された柱穴列である。

－柱間寸法－

C 1→C 4へ順に、230 cm (7.6 尺) + 239 cm (7.9 尺) + 230 cm (7.6 尺)  
 D 1→D 4へ順に、224 cm (7.4 尺) + 224 cm (7.4 尺) + 239 cm (7.9 尺)  
 E 1→E 4へ順に、236 cm (7.8 尺) + 221 cm (7.3 尺) + 255 cm (8.4 尺)  
 なお、C・D間の柱間寸法は99 cm～109 cm (3.3～3.6 尺)、D・E間は409 cm (13.5 尺) でほぼ共通した数値をそれぞれ示している。

〈出土遺物〉 柱穴D1・D4・E1から、それぞれ磨滅した土師器の小片が僅かに出土したのみである。

〈建物の性格・年代〉 張り出し部分を持つものの建物の大きさから、付属小屋としての用途が考えられ、また、柱穴数基から土師器片が出土しているが、各柱穴の規模等から近世に造られたものと推定している。

〔1号柱穴列〕（第7図）

＜位 置＞ I B 4 b～I B 4 dグリッドに位置する。

＜平面形式＞ 軸方向：西北西－東南東〔西を基準に22°北偏する〕

＜柱 穴＞ それぞれの平面形は円～長方形に近い楕円形を呈しているが、柱材等の痕跡は残っていない。

＜柱穴・柱間寸法＞ 当該遺構における柱穴・柱間の各寸法は以下の通りである。

－柱 穴 寸 法－

柱穴No.	f 1	f 2	f 3
直径cm	53.0×47.0	45.5×45.0	57.5×36.0
深さcm	12.5	18.0	5.0

－柱 間 寸 法－

f 1→f 3へ順に、 270cm (8.9尺) + 276cm (9.1尺)
--

＜出土遺物＞ 出土していない。

＜特徴・年代＞ 1号掘立柱建物跡に付随するような位置から検出され、主軸方向や角度はほぼ同一の数値を示してはいるものの、柱穴の配置や柱間寸法に若干のずれがあり、建物跡とは別個の遺構である「1号柱穴列」として登録した。出土した遺物はなく、1号掘立柱建物跡と前後するほぼ同じ時代（近世）に形成されたものと推定している。

〔2号柱穴列〕（第7図）

＜位 置＞ I B 5 c～I B 6 bグリッドに位置する。

＜平面形式＞ 軸方向：南南西－北北東〔南を基準に35°西偏する〕

＜柱 穴＞ それぞれの平面形は円～楕円形を呈しているが、柱材等の痕跡は残っていない。

＜柱穴・柱間寸法＞ 当該遺構における柱穴・柱間の各寸法は以下の通りである。

－柱 穴 寸 法－

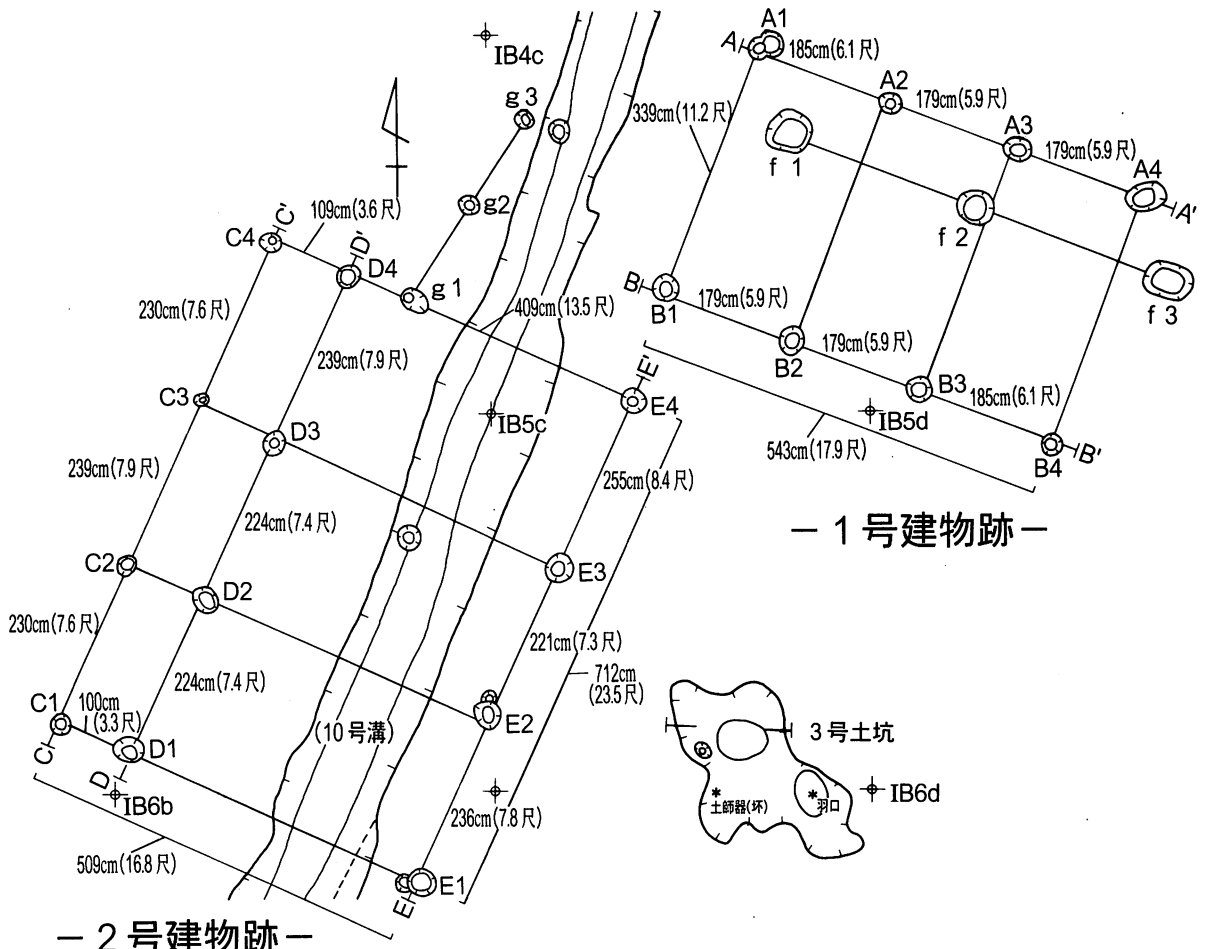
柱穴No.	g 1	g 2	g 3
直径cm	39.0×27.0	27.0×21.0	24.0×23.0
深さcm	27.0	24.5	7.5

－柱 間 寸 法－

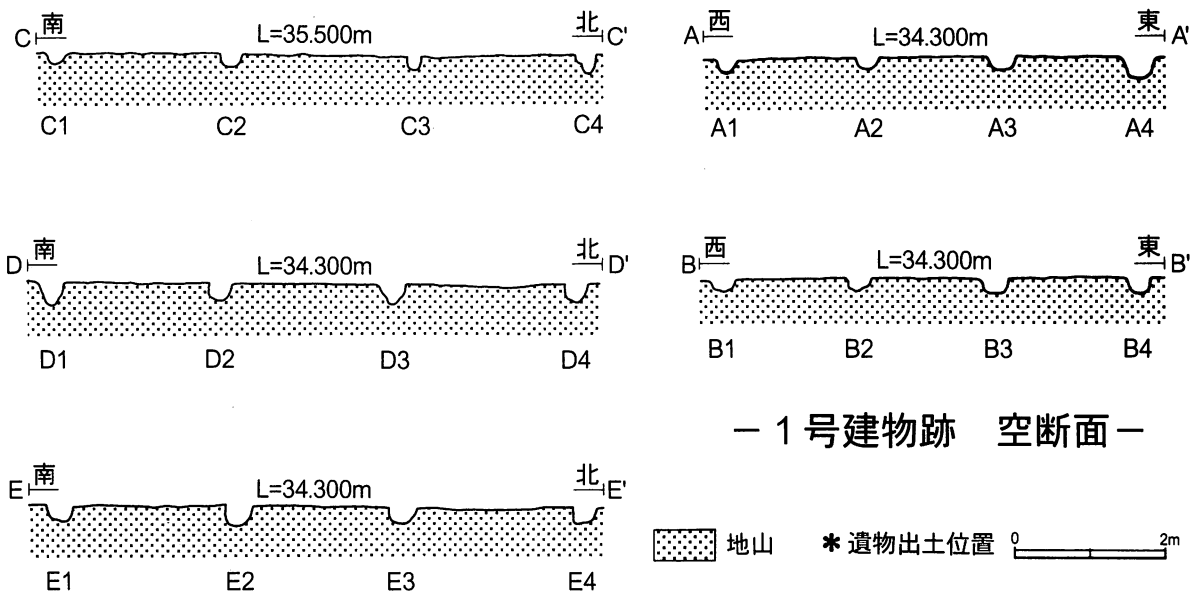
g 1→g 3へ順に、 270cm (8.9尺) + 276cm (9.1尺)
--

＜出土遺物＞ 出土していない。

＜特徴・年代＞ 2号掘立柱建物跡に付随するような位置から検出されたが、主軸方向や角度にずれがあり建物跡とは別個の遺構である「2号柱穴列」として登録した。出土した遺物はなく、2号掘立柱建物跡と前後するほぼ同じ時代（近世）に形成されたものと推定している。



掘立柱建物跡全景



第7図 掘立柱建物跡・柱穴列 (平面図及び断面図)

## (2) 柱穴・柱穴状土坑 (第8・9図・写真図版15)

柱穴・柱穴状土坑は、主に調査区北側及び中央部に於いて顕著に検出された。これらの一部は、前述した掘立柱建物跡2棟・柱穴列2列として容易に検出することができたものの、その他の柱穴状土坑群に於いては、規模や深さをもとに柱間寸法等を想定し、それぞれ対比させながら検討を行ったが、建て替えや後年の攪乱等による錯綜・重複があり、掘立柱建物跡や柱穴列を形成するような遺構は、上記の遺構以外に確認することはできなかった。

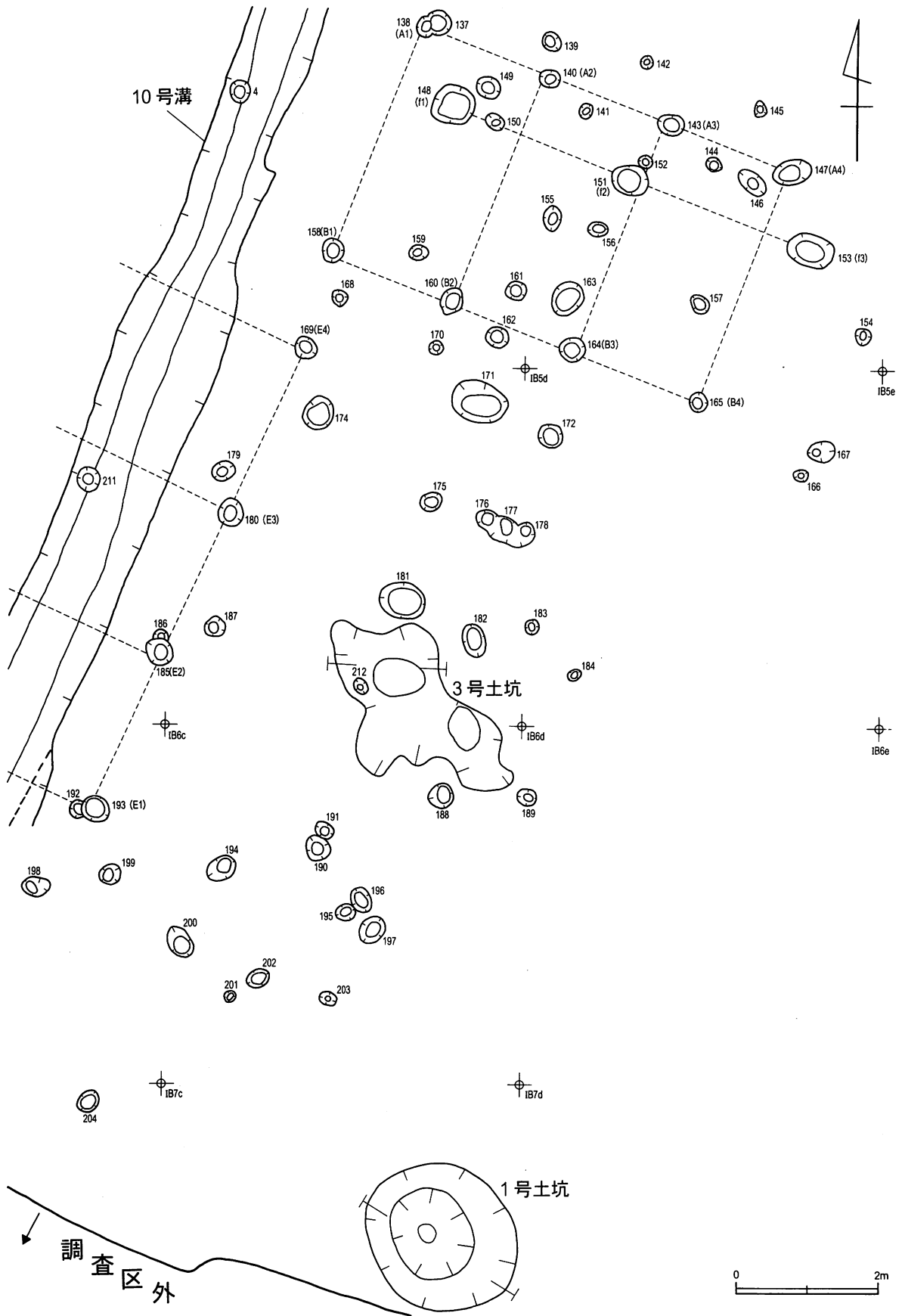
以下、柱穴・柱穴状土坑として登録した遺構の寸法を表にまとめ、当該遺構の平面図については、特に顕著な分布が見られた箇所のみ留めて掲載した。

第2表 柱穴・柱穴状土坑一覧

No.	口径 cm	深さcm	備考	No.	口径 cm	深さcm	備考	No.	口径 cm	深さcm	備考
1	24.0×24.0	12.5		32	30.5×20.5	21.5		63	29.0×25.0	11.0	
2	28.0×23.0	20.5		33	27.5×19.5	18.5		64	30.0×29.5	11.0	
3	24.0×23.0	7.5	柱穴列 g3	34	34.5×33.5	12.5		65	35.0×34.5	32.5	
4	31.0×26.5	8.5		35	33.0×32.5	11.0		66	26.5×23.5	15.0	
5	21.5×20.0	10.0		36	32.5×25.5	21.0		67	30.5×25.0	20.0	
6	17.0×15.0	10.5		37	27.0×24.0	14.0		68	47.5×38.0	18.5	
7	27.0×21.0	24.5	柱穴列 g2	38	40.5×32.5	21.0		69	35.0×35.0	20.5	
8	32.5×27.0	25.5	掘立柱 2C4	39	31.0×25.5	24.5		70	70.0×55.0	33.5	
9	31.5×27.5	23.0	掘立柱 2D4	40	37.5×31.0	12.0		71	60.5×57.0	21.0	
10	39.0×27.0	27.0	柱穴列 g1	41	34.0×27.0	16.5		72	58.0×50.5	37.5	
11	19.0×17.5	18.0	掘立柱 2C3	42	29.5×22.0	10.5		73	44.0×43.5	32.5	
12	35.0×25.5	26.0	掘立柱 2D3	43	26.5×26.5	16.0		74	50.5×47.5	18.5	
13	22.0×19.0	23.5		44	25.0×21.5	10.5		75	27.5×26.5	10.0	
14	13.0×12.0	26.5		45	24.5×20.5	12.0		76	31.0×27.0	15.5	
15	28.5×23.0	17.5	掘立柱 2C2	46	29.0×20.0	22.0		77	33.5×28.5	5.0	
16	35.0×29.5	22.5	掘立柱 2D2	47	27.0×19.0	13.0		78	31.5×26.5	17.0	
17	23.5×22.5	13.5		48	28.5×23.0	15.0		79	39.5×29.5	24.5	
18	31.5×27.5	20.5		49	29.5×22.5	32.0		80	47.0×36.0	11.0	
19	29.5×23.5	29.5		50	30.0×27.0	11.5		81	23.0×19.0	11.0	
20	26.5×26.5	12.0	掘立柱 2C1	51	35.0×33.5	40.0		82	30.0×26.5	14.5	
21	38.5×30.0	32.0	掘立柱 2D1	52	33.5×30.5	27.0		83	44.0×41.0	16.5	
22	33.0×31.5	25.5		53	44.0×34.5	27.5		84	41.5×31.5	25.0	
23	33.0×29.0	17.5		54	52.0×50.0	27.5		85	36.5×31.0	12.0	
24	28.5×27.5	22.0		55	41.0×31.5	12.5		86	33.0×25.5	12.5	
25	26.0×20.0	11.0		56	38.0×30.0	16.5		87	32.5×31.5	15.5	
26	22.5×15.5	17.0		57	29.0×28.0	14.0		88	33.5×25.0	19.5	
27	31.5×26.0	17.0		58	30.0×27.5	31.5		89	35.0×35.0	15.0	
28	51.0×30.5	13.0		59	23.0×19.5	6.0		90	38.0×37.5	23.0	
29	29.0×25.5	9.0		60	35.0×28.5	14.5		91	37.5×32.0	15.0	
30	21.0×17.0	9.5		61	35.0×30.5	8.5		92	28.5×27.0	20.0	
31	26.0×25.0	9.0		62	32.5×31.0	24.5		93	37.0×27.5	14.5	

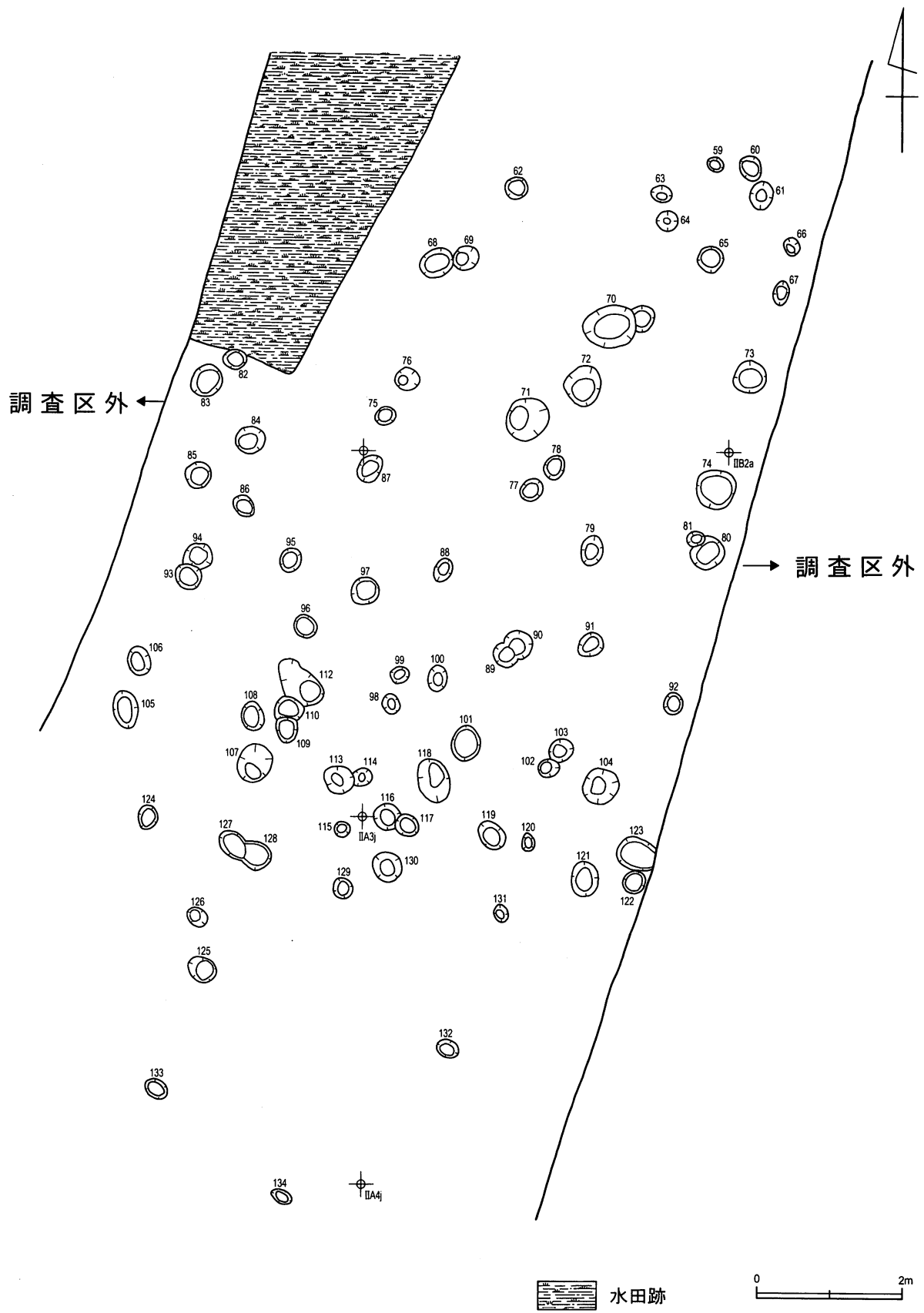
No.	口径 cm	深さcm	備考	No.	口径 cm	深さcm	備考	No.	口径 cm	深さcm	備考
94	40.0×36.5	14.0		134	29.5×18.5	9.0		174	45.0×40.5	20.0	
95	32.0×28.5	24.5		135	33.5×32.5	31.0		175	31.0×28.5	32.5	
96	31.0×30.0	30.0		136	24.0×20.5	10.5		176	29.0×29.0	13.5	
97	43.5×40.0	29.5		137	35.5×35.0	16.0		177	37.0×27.0	25.0	
98	26.5×24.5	14.0		138	28.0×24.0	36.0	掘立柱 1A1	178	39.0×29.0	20.0	
99	26.5×21.0	13.5		139	24.5×23.5	47.5		179	31.5×26.5	12.0	
100	34.0×26.5	13.0		140	27.0×26.5	14.5	掘立柱 1A2	180	36.5×34.5	23.5	掘立柱 2E3
101	47.5×39.0	10.0		141	21.5×16.0	37.0		181	62.0×58.5	37.0	
102	27.5×25.0	9.0		142	19.5×18.0	13.5		182	40.5×32.0	16.5	
103	32.0×31.0	8.5		143	34.5×30.0	17.0	掘立柱 1A3	183	21.5×19.5	9.5	
104	52.0×45.0	18.0		144	23.5×19.0	13.5		184	21.0×16.0	11.5	
105	49.5×34.5	14.5		145	20.0×19.5	15.5		185	39.0×34.0	28.0	掘立柱 2E2
106	35.0×32.5	7.5		146	40.0×26.0	53.0		186	22.0×17.5	19.0	
107	51.0×41.0	26.5		147	50.5×33.5	28.0	掘立柱 1A4	187	30.5×30.5	21.0	
108	37.0×29.5	14.5		148	53.0×47.0	12.5	柱穴列 f1	188	36.5×34.5	13.5	
109	33.0×31.0	21.0		149	31.5×29.5	47.0		189	27.5×27.5	16.0	
110	37.0×29.0	21.0		150	27.0×21.5	18.0		190	37.5×33.5	22.0	
111	45.0×41.0	23.0		151	45.5×45.0	18.0	柱穴列 f2	191	27.5×20.0	12.5	
112	35.0×33.5	25.5		152	18.5×18.0	17.0		192	24.0×24.0	15.0	
113	44.0×37.0	25.5		153	57.5×36.0	5.0	柱穴列 f3	193	37.0×33.5	23.5	掘立柱 2E1
114	25.5×23.5	10.0		154	23.0×19.5	13.0		194	43.5×30.5	35.0	
115	21.5×21.0	12.0		155	35.0×24.0	48.0		195	30.0×24.5	10.0	
116	36.0×34.5	11.0		156	27.0×23.0	18.0		196	38.5×29.0	15.0	
117	31.5×28.5	16.0		157	27.0×25.5	28.5		197	40.0×30.0	15.0	
118	61.5×43.5	31.0		158	35.5×26.5	13.5	掘立柱 1B1	198	41.5×28.0	20.5	
119	36.5×36.0	12.0		159	24.0×23.0	18.0		199	29.5×28.5	18.0	
120	22.0×20.0	4.0		160	40.5×30.0	16.0	掘立柱 1B2	200	44.0×33.5	18.0	
121	44.0×37.0	14.0		161	27.5×26.0	17.5		201	17.0×16.5	24.0	
122	34.0×34.0	11.5		162	32.5×32.0	44.5		202	33.0×24.5	10.5	
123	50.0×43.0	15.0		163	52.5×36.0	19.0		203	26.0×20.0	21.5	
124	36.0×25.0	15.5		164	35.0×33.5	20.0	掘立柱 1B3	204	31.5×27.5	19.0	
125	36.5×32.0	14.0		165	26.0×22.0	21.5	掘立柱 1B4	205	42.5×39.0	26.0	
126	29.0×22.5	27.0		166	20.0×16.5	13.0		206	33.5×25.5	42.5	
127	37.5×30.0	22.0		167	37.0×29.0	17.0		207	32.0×24.0	16.0	
128	37.5×36.0	23.0		168	22.5×21.5	15.0		208	25.0×22.5	16.5	
129	27.0×26.0	7.0		169	33.0×31.0	21.0	掘立柱 2E4	209	29.0×19.0	30.5	
130	40.5×38.0	7.0		170	22.5×19.0	10.0		210	26.0×22.0	11.5	
131	22.5×20.5	6.0		171	79.5×60.5	39.0		211	29.5×29.0	14.5	
132	30.5×25.0	6.5		172	33.5×32.5	35.0		212	23.5×17.5	35.5	
133	32.0×26.5	8.0		173	62.0×41.0	9.0		213	33.0×31.0	15.0	

(備考欄) 例：掘立柱 2 C 2 = 掘立柱建物跡「2号」の「C-2柱」であることを表す。



第8図 柱穴・柱穴状土坑群① (調査区北側)





第9図 柱穴・柱穴状土坑群②（調査区中央）

### (3) 溝 跡

調査区を南北方向へ貫くように検出された溝跡（1・6～10号溝）と東西方向に走る溝跡（2～5号溝）は、ほぼ同時期（平安時代以降）に形成されたもの、また調査区北東部分に位置する規則性をもった形態の溝跡群（11～18号溝）については、前述した1～10号溝までの溝跡と比較して、これらより後年に作られたもの（近世以降）と推定される。これは、溝跡内に堆積していた埋土の構成状況や出土遺物等から判断したものである。一方、当該調査区からほぼ真東へ約1kmの地点には、98年度、当埋蔵文化財センターが発掘調査を行った「水ノ口遺跡」があるが、その調査の際も11～18号溝とほぼ同様な形態をもった溝跡群が検出されている。

この付近は、地域一帯に広がる胆沢扇状地の扇端部（地下水面が高く、湧水等にめぐまれている）に位置しているため、古くから集落の立地が見られるとともに水田耕作も行われており、検出されたこれらの溝跡は、構築された年代は異なるものの、灌漑用水路としての役割を担うものであったと考えられる。

#### [1号溝－RG1]（第10図・写真図版7・8）

<位置・走行> 調査区中央部、I B 6 b～I A 10 j グリッドに位置し、南西方向へ伸びている。

<規 模> 全長22 m・幅0.6 m～1.1 m

<断面形> 全体に渡って底面は滑らかで、大部分はごく浅いU字状を呈している。

<埋 土> 暗褐色のシルトが主体を占める。

<遺 物> 埋土内から土師器の甕の一部（口縁部～頸部：遺物No.28）と須恵器の甕の一部（胴部：遺物No.29）及び埋土上位から中国産のものと思われる磁器片（器種・時代不明：遺物No.46）が出土している。

<特 徴> 1号溝は、調査区北端部から南北方向に伸びる10号溝から、I B 6 b グリッド付近で分岐し、ほぼ平行するように位置しているが、中央部に位置する近代の水田跡東側付近・I A 10 j グリッド付近において自然消滅している。1号溝と10号溝との関連、構築時期の相違については、調査区中央部において、10号溝に付属するものと思われる3号・4号溝によって東西方向に深く切られていることから、1号溝の方がより以前に構築・使用されていたものと推定される。

その一方で、3号・4号溝とほぼ同様な走行を示す2号・5号溝は、当該遺構と底面部分におけるレベルの値や、遺構同士の接続状況が自然であることから、ほぼ同時期に構築・使用されていたものと考えられ、出土遺物等から、平安時代以降に形成された遺構と推定している。

当該遺構も含めて付近の検出面には耕作機械による耕作痕が見られ、全体的に削平を受けていた。

#### [2号溝－RG2]（第11図・写真図版7・8）

<位置・走行> 調査区中央部、I B 8 b グリッドに位置し、南東方向へ伸びている。

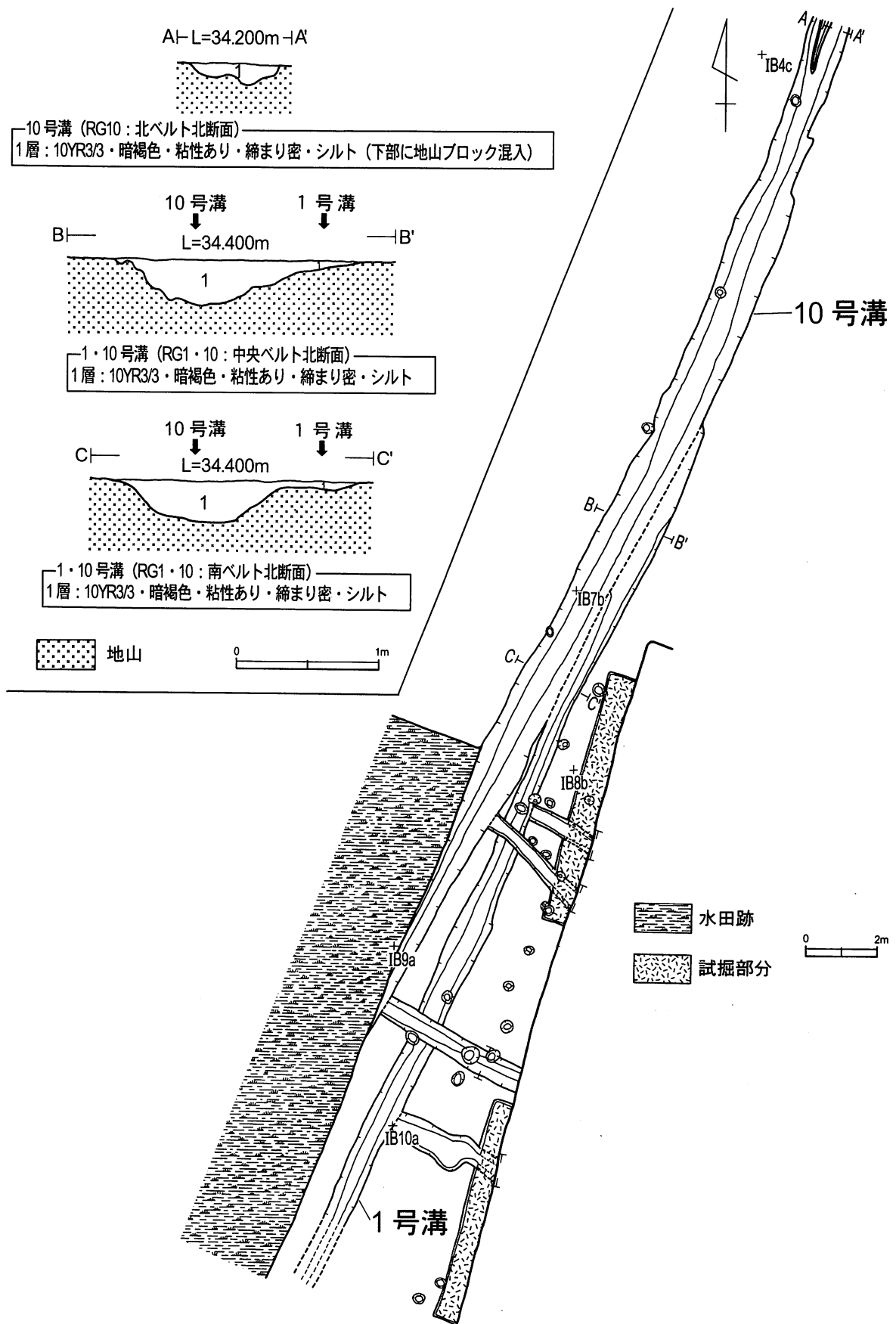
<規 模> 全長2 m・幅0.6 m

<断面形> ごく浅いU字状を呈している。

<埋 土> 灰黄褐色のシルトが主体を占める。

<遺 物> 出土していない。

<特 徴> 1号溝と西端で接続し、埋土の状況やレベルの値もほぼ同一のため、同じ時期の関連しあう遺構と推定される。



第10図 1・10号溝 (平面図及び断面図)

**〔3号溝－RG3〕（第11図・写真図版7・8）**

＜位置・走行＞ 調査区中央部、IB8bグリッドに位置し、南東方向へ伸びている。

＜規模＞ 全長3m・幅0.5m

＜断面形＞ ごく浅いU字状を呈している。

＜埋土＞ 黒褐色のシルトが主体を占める。

＜遺物＞ 出土していない。

＜特徴＞ 途中で1号溝を切り、西端で10号溝と接続している。検出状況等から、10号溝と関連する同時期の遺構と推定される。

**〔4号溝－RG4〕（第11図・写真図版8）**

＜位置・走行＞ 調査区中央部、IB9aグリッドに位置し、南東方向へ伸びている。

＜規模＞ 全長4.6m・幅0.6m

＜断面形＞ ごく浅いU字状を呈している。

＜埋土＞ にぶい黄褐色のシルトが主体を占める。

＜遺物＞ 埋土内から須恵器の甕の一部（胴部：遺物No.30）が出土している。

＜特徴＞ 当該遺構は出土遺物等から、平安時代以降に構築・使用されたもので、近隣の3号・10号溝はほぼ同じ切り合い・レベルの値を示しているため、これらも同時期の遺構と推定している。

**〔5号溝－RG5〕（第11図・写真図版8）**

＜位置・走行＞ 調査区中央部、IB10aグリッドに位置し、南東方向へ伸びている。

＜規模＞ 全長3.2m・幅0.4～0.8m

＜断面形＞ 浅い皿状を呈している。

＜埋土＞ 黒褐色のシルトが主体を占める。

＜遺物＞ 埋土内から須恵器の長頸壺の一部（底部：遺物No.31）が出土している。

＜特徴＞ 西端で1号溝と接続し、2号溝とほぼ同じ形態を示しており、出土遺物等から、平安時代以降に構築・使用された遺構と推定している。

**〔6号溝－RG6〕（第12図・写真図版9）**

＜位置・走行＞ 調査区北東端、IB8j～IB9iグリッドに位置し、南西方向へ伸びている。

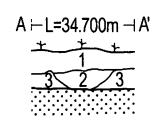
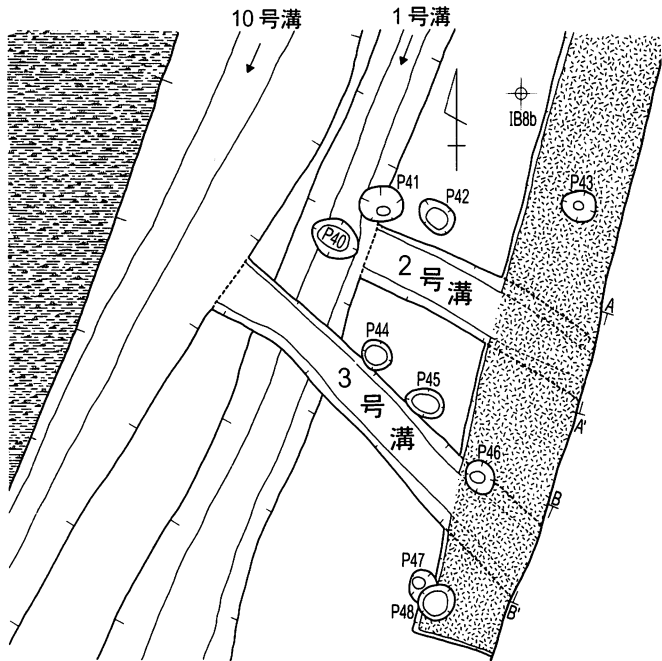
＜規模＞ 全長4.9m・幅0.7m

＜断面形＞ 他の溝跡と比較し、深いU字状を呈している。

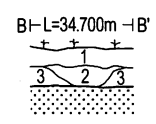
＜埋土＞ 灰黄褐色のシルトが主体を占める。

＜遺物＞ 埋土内から須恵器の甕の一部（胴部：遺物No.32）が出土している。

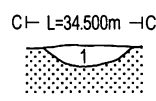
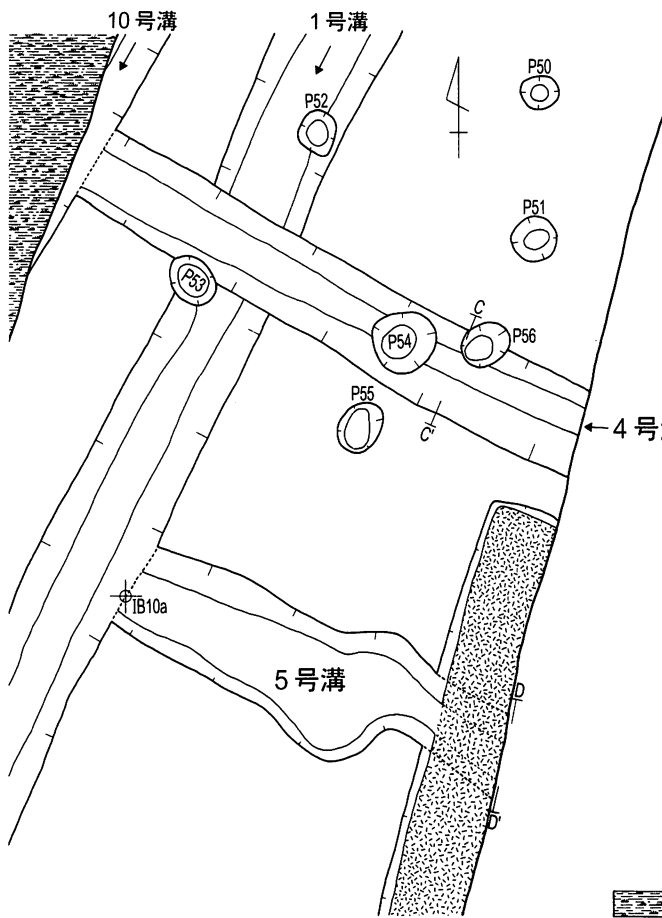
＜特徴＞ 検出された遺構のなかでは、最も深い形態を示しており、出土遺物等から、平安時代以降に構築・使用された遺構と推定している。当該遺構に接する北側は、圃場整備が既に終了した水田のため、遺構の先端部分は攪乱を受けていた。



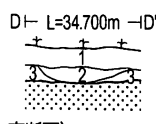
2号溝 (RG2: 東断面)  
 1層: 10YR4/3・にぶい黄褐色・粘性あり・締まり中・シルト (表土)  
 2層: 10YR4/2・灰黄褐色・粘性あり・締まり密・シルト (炭化物及び、地山ブロック混入)  
 3層: 地山 (3層はトレンチ部分のため、地山が露出している)



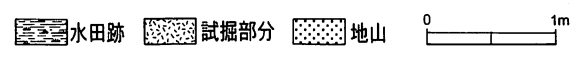
3号溝 (RG3: 東断面)  
 1層: 10YR4/3・にぶい黄褐色・粘性あり・締まり中・シルト (表土)  
 2層: 10YR3/2・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト (地山ブロック混入)  
 3層: 地山 (3層はトレンチ部分のため、地山が露出している)



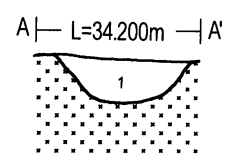
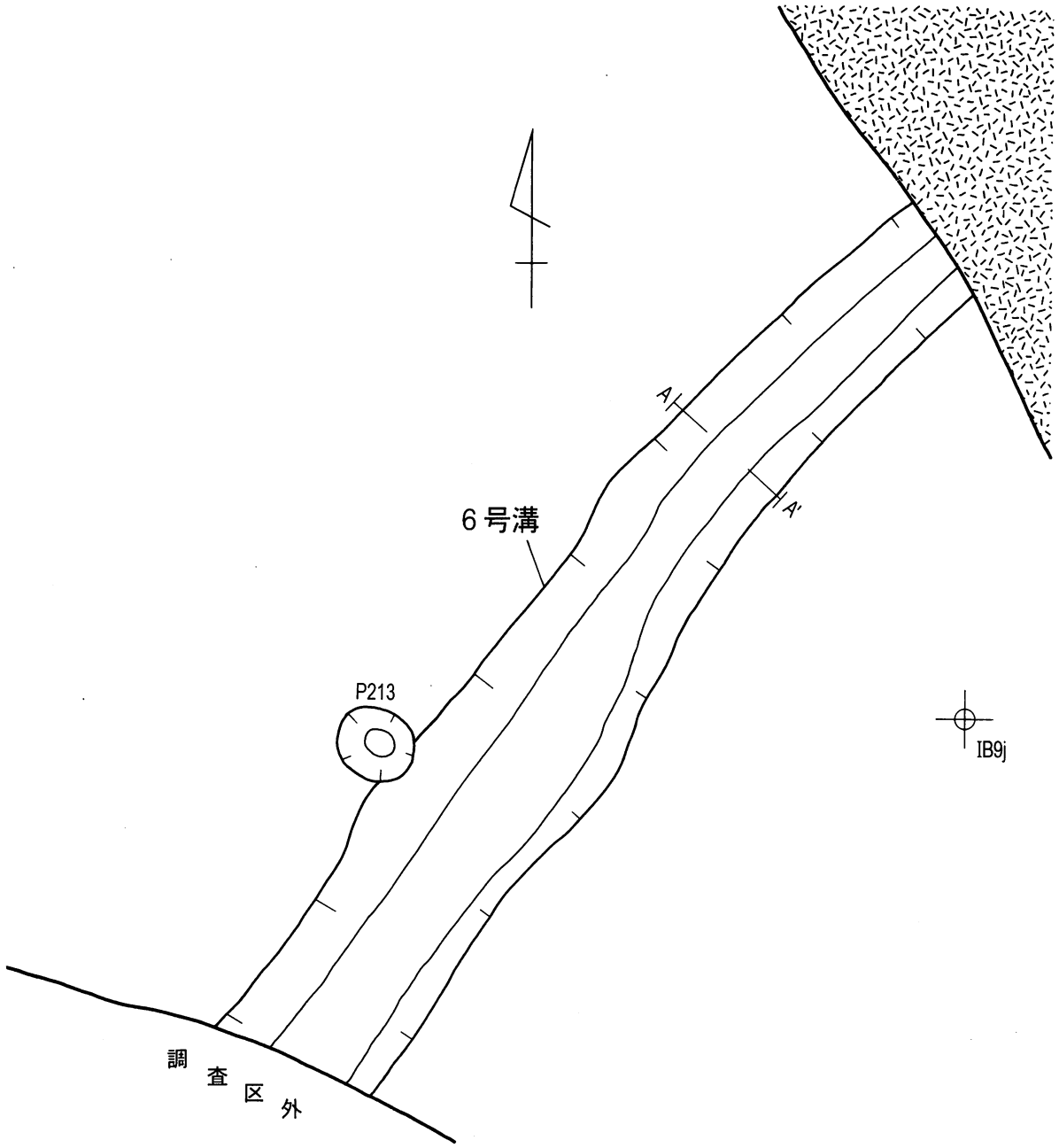
4号溝 (RG4: 東断面)  
 1層: 10YR4/3・にぶい黄褐色・粘性あり・締まり密・シルト



5号溝 (RG5: 東断面)  
 1層: 10YR4/3・にぶい黄褐色・粘性あり・締まり中・シルト (表土)  
 2層: 10YR3/2・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト (地山ブロック混入)  
 3層: 地山 (3層はトレンチ部分のため、地山が露出している)

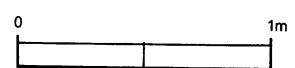


第11図 2～5号溝 (平面図及び断面図)



6号溝 (RG6 : 北東断面)  
 1層 : 10YR4/2 ・ 灰黄褐色 ・ 粘性あり ・ 締まり密 ・ シルト

攪乱部分 地山



第12図 6号溝 (平面図及び断面図)

**〔7号溝－R G 7〕（第13図・写真図版9）**

<位置・走行> 調査区北東部、I B 5 h～I B 8 fグリッドに位置し、南西方向へ伸びている。

<規模> 全長約14.3m・幅約0.6～1.4m

<断面形> 他の同様な遺構と比較して規模が大きく、やや深い皿状を呈し、北側へ向かうに従って浅く緩やかな断面形状を示す。

<埋土> 暗褐色のシルトが主体を占める。

<遺物> 出土していない。

<特徴> 全体的に、東西方向へ走る11～18号溝が当該遺構を切っているが、これらの遺構群との関連については、検出面に11～18号溝から伸びる溝跡の痕跡が僅かに残されていたことと埋土等の対比から、それらの遺構群との関連はなく、出土遺物はないものの埋土等の状況から、後述する9号溝と関連した比較的古い時代の遺構と推定している。

**〔8号溝－R G 8〕（第13図・写真図版9）**

<位置・走行> 調査区北部、I B 4 e～I B 7 dグリッドに位置し、南西方向へ伸びている。

<規模> 全長18m・幅0.6～1.2m

<断面形> 浅い皿状を呈している。

<埋土> にぶい黄褐色のシルトが主体を占める。

<遺物> 埋土内から須恵器の甕の一部（胴部：遺物No.33）が出土している。

<特徴> 全体的に浅い溝跡ではあるが、付近の検出面には農耕用トラクターのタイヤ跡や耕運機の爪跡が残されており（写真図版4を参照）、溝跡の大半は削平を受けたものと考えられる。当該遺構は出土遺物等から、平安時代以降に形成された遺構で、浅いものの幅が広いことから、削平を受ける以前は深く規模の大きなものであったと推定している。

**〔9号溝－R G 9〕（第13図・写真図版9）**

<位置・走行> 調査区北東端、I B 6 g～I B 8 gグリッドに位置し、南西方向へ伸びている。

<規模> 全長11m・幅0.8m

<断面形> ごく浅い皿状を呈している。

<埋土> 暗褐色のシルトが主体を占める。

<遺物> 出土していない。

<特徴> 調査区北端部・I B 6 gグリッド付近で7号溝と分岐しており、その形態は前述の1号溝・10号溝との関係と類似している。他の溝跡で見られる状況のように、付近の検出面で見られた耕作機械の跡から、全体的に上部が削平を受けたものと考えられる。当該遺構から出土遺物はないものの埋土等の状況から前述した7号溝と関連した比較的古い時代の遺構と推定している。

**〔10号溝－R G 10〕（第10図・写真図版7・8）**

<位置・走行> 調査区中央部、I B 3 c～I A 9 jグリッドに位置し、南西方向へ伸びている。

<規模> 全長32m・幅1m～1.6m

<断面形> 他の溝跡と比較し、深いU字状を呈している。

<埋 土> 暗褐色のシルトが主体を占める。

<遺 物> 出土していない。

<特 徴> 調査区中央部に位置する近代の水田跡によって当該遺構は切られており、I B 6 b グリッド付近では、寄り添うように平行しているごく浅い1号溝と合流している。切り合い・レベル値の状況から鑑みて、3号・4号溝と関連し、ほぼ同じ時代に構築・使用された遺構と推定される。付近の検出面で見られた耕作機械の痕跡（写真図版4を参照）から、全体的に上部が削平を受けたものと考えられる。

〔11号溝－R G 11〕（第13図・写真図版10）〔以下18号溝まで、埋土は同一の状況を示す〕

<位置・走行> 調査区北東部、I B 5 e～I B 5 g グリッドに位置し、南東方向へ伸びている。

<規 模> 全長9.7 m・幅約0.4 m

<断面形> U字状を呈している。

<埋 土> 暗褐色のシルトが主体を占める。

<遺 物> 出土していない。

<特 徴> 当該遺構のほぼ中央に井戸跡が検出されているが、井戸跡の埋土等から関連はないものと推定している。以下18号溝までほぼ等間隔に規則性をもって分布し、これらの溝跡群が構築・使用された時代は出土した遺物や埋土等から、近世～近代にかけてのものと推定している。東・西端部や検出面は耕作機械による攪乱を受け、残存状況はよくない。

〔12号溝－R G 12〕（第13図・写真図版10）

<位置・走行> 調査区北東部、I B 5 e～I B 5 g グリッドに位置し、南東方向へ伸びている。

<規 模> 全長10.8 m・幅約0.4 m

<断面形> U字状を呈している。

<埋 土> 暗褐色のシルトが主体を占める。

<遺 物> 検出面から19世紀中葉のものと思われる土瓶の一部（産地不明：遺物No.47）が出土している。

<特 徴> 11号溝同様、当該遺構のほぼ中央に井戸跡が検出されているが、井戸跡の埋土等から関連はないものと推定している。

〔13号溝－R G 13〕（第13図・写真図版10）

<位置・走行> 調査区北東部、I B 5 e～I B 6 g グリッドに位置し、南東方向へ伸びている。

<規 模> 全長10.6 m・幅約0.4 m

<断面形> U字状を呈している。

<埋 土> 暗褐色のシルトが主体を占める。

<遺 物> 出土していない。

<特 徴> 規模や性格は、11～18号溝とほぼ同規模・同形態を示している。

〔14号溝－R G 14〕（第13図・写真図版10）

<位置・走行> 調査区北東部、I B 6 e～I B 7 g グリッドに位置し、南東方向へ伸びている。

<規 模> 全長10 m・幅約0.4 m



- <断面形> U字状を呈している。
- <埋 土> 暗褐色のシルトが主体を占める。
- <遺 物> 出土していない。
- <特 徴> 規模や性格は、11～18号溝とほぼ同規模・同形態を示している。

**〔15号溝－R G 15〕（第13図・写真図版11）**

- <位置・走行> 調査区北東部、I B 6 e～I B 7 gグリッドに位置し、南東方向へ伸びている。
- <規 模> 全長9.8 m・幅約0.4 m
- <断面形> U字状を呈している。
- <埋 土> 暗褐色のシルトが主体を占める。
- <遺 物> 出土していない。
- <特 徴> 規模や性格は、11～18号溝とほぼ同規模・同形態を示している。

**〔16号溝－R G 16〕（第13図・写真図版11）**

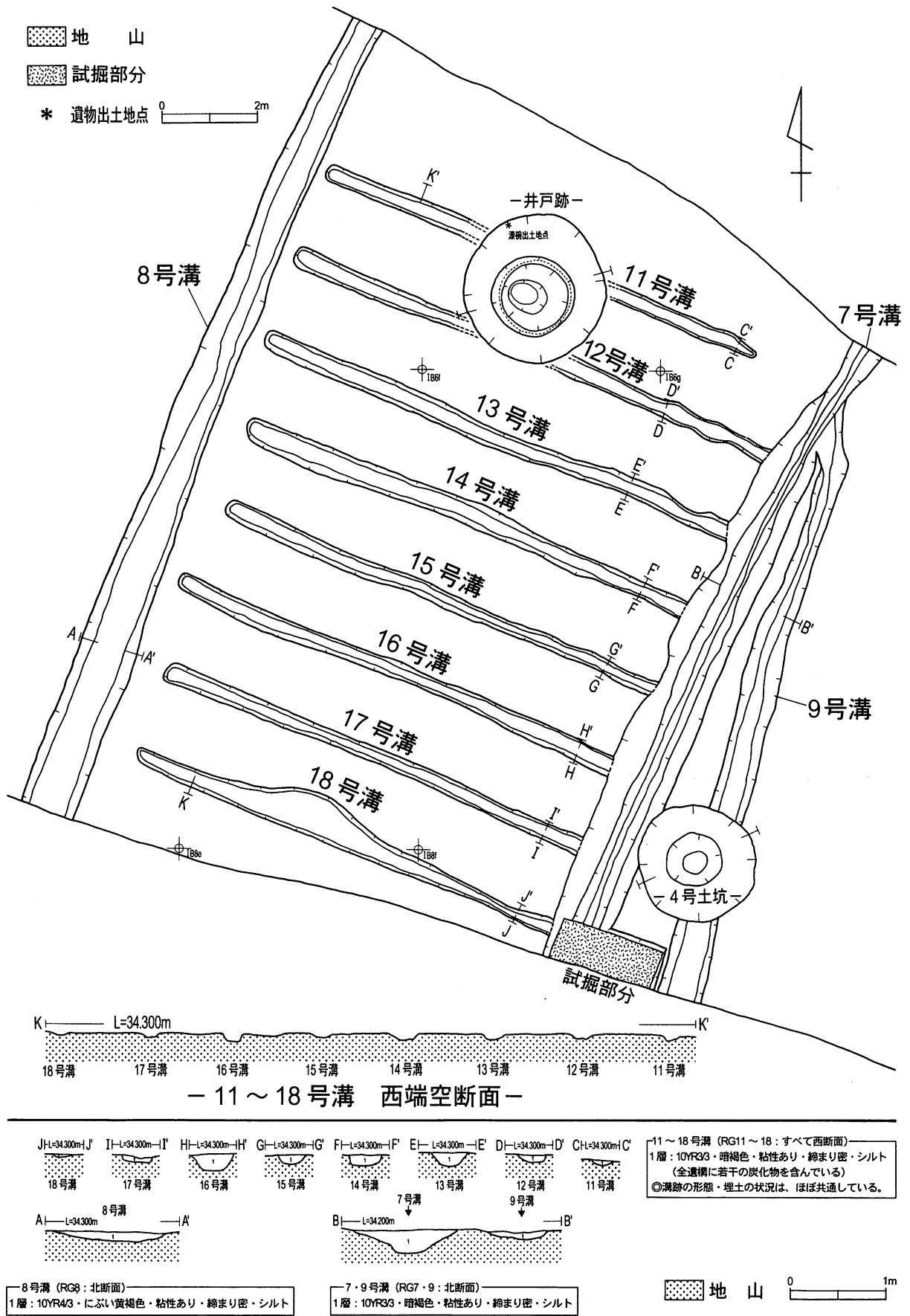
- <位置・走行> 調査区北東部、I B 6 e～I B 7 fグリッドに位置し、南東方向へ伸びている。
- <規 模> 全長9.8 m・幅約0.4 m
- <断面形> U字状を呈している。
- <埋 土> 暗褐色のシルトが主体を占める。
- <遺 物> 出土していない。
- <特 徴> 規模や性格は、11～18号溝とほぼ同規模・同形態を示している。

**〔17号溝－R G 17〕（第13図・写真図版11）**

- <位置・走行> 調査区北東部、I B 7 e～I B 7 fグリッドに位置し、南東方向へ伸びている。
- <規 模> 全長9.4 m・幅約0.4 m
- <断面形> U字状を呈している。
- <埋 土> 暗褐色のシルトが主体を占める。
- <遺 物> 出土していない。
- <特 徴> 規模や性格は、11～18号溝とほぼ同規模・同形態を示している。

**〔18号溝－R G 18〕（第13図・写真図版11）**

- <位置・走行> 調査区北東部、I B 7 d～I B 8 fグリッドに位置し、南東方向へ伸びている。
- <規 模> 全長9.4 m・幅約0.4 m（推定）
- <断面形> ごく浅いゆるやかな皿状を示している。
- <埋 土> 暗褐色のシルトが主体を占める。
- <遺 物> 出土していない。
- <特 徴> 規模や性格は、11～18号溝とほぼ同規模・同形態を示しているが、削平を随所で受けており、他の同様な遺構と比較して残存状況が良くない部分が見られる。



第13図 7～9・11～18号溝 (平面図及び断面図)

#### (4) 土 坑

柱穴・柱穴状土坑と比較して規模が大きいと思われるものは、土坑として登録した。土坑の分布状況は、主に調査区北側に集中し、この区域では、柱穴・柱穴状土坑の分布も顕著となっている。

遺物の出土は、3号・4号土坑からのものが大半を占めており、完形品に近い土師器の坏や、破片ではあるが須恵器の大甕の体部等が磨滅せずに出土した。

調査区北側の検出面では、後年の農耕機械による攪乱の痕跡があり、特に3号土坑の上部は削平を大きく受けたものと見られる。出土遺物がなく時代を特定できなかったものがあるものの、ほとんどの土坑は、遺物の出土状況や埋土等から平安時代以降に形成されたものと推定している。

##### [1号土坑－RD1] (第14図・写真図版13)

<位 置> 調査区北側、IB7c～IB7dグリッドに位置する。

<規 模> 長軸2.3m・短軸1.9m・深さ0.9m

<平面・断面形> 平面形はほぼ円形で、断面形はすり鉢状を呈する。

<埋 土> 上・中層は暗褐色のシルト、下層には黒・黄・灰黄褐色・灰褐色の粘土・シルトが分布する。

<遺 物> 埋土の上位から須恵器の甕の一部（胴部：遺物No.1）と土師器の甕の一部（底部：遺物No.2）が出土している。

<特 徴> 出土遺物等から平安時代以降のものと推定されるが、土坑自体の性格は不明である。

##### [2号土坑－RD2] (第14図・写真図版13)

<位 置> 調査区北東端、IB8g～IB8hグリッドに位置する。

<規 模> 長軸1.5m・短軸0.3m・深さ0.1～0.35m

<平面・断面形> 平面形は変形した楕円形で、断面形は浅い皿状とやや落ち込んだ部分をもつ複合した形状を呈する。

<埋 土> 黄褐色・灰黄褐色の砂質シルト・シルトが分布する。

<遺 物> 遺構中央部分から、風化の著しい鉄製品が出土している。

<特 徴> 出土遺物は上記の風化した鉄製品のみであったが、風化が著しく周囲の埋土との見分けがほとんどつかないような状態であったため、取り上げることは不可能であった。またこの遺物以外に、時代を特定できるような要素はなく、遺構の時代や性格は不明である。

##### [3号土坑－RD3] (第14図・写真図版13)

<位 置> 調査区北側、IB5c～IB6cグリッドに位置する。

<規 模> 長軸3.3m・短軸1.2m・深さ0.25m

<平面・断面形> 平面形はアメーバ状の不規則な形状で、断面形は全体的に浅い皿状を呈する。

<埋 土> 暗・黒褐色のシルトが主体を占める。

<遺 物> 検出された中で、最も出土遺物の多い遺構である。出土した遺物の出土位置は、埋土の中位から下位に集中し、特に埋土の下位からは、完形品に近い土師器の坏（遺物No.3・4）や、大型で厚みを持った大甕の胴部の破片が十数点見つかっており、土師器の出土が他の遺構と比較して多いのが特徴である。また、先端部が一部ガラス化した羽口片（遺物No.42）及び鉄鋳滓数点も併せて出土している。

<特徴> 検出面は後年の耕作機械による攪乱(写真図版4)を受けており、検出時は遺構全体のプランがつかみにくかったため、断面図の実測位置は中心より北側にずれたものとなっている。出土遺物は土坑の埋土内からいずれも見つかったものであるが、遺構の開口部は大きいものの深さは浅く、検出面の攪乱を受けるまでは規模の大きな土坑であったものと推定される。羽口片や鉄鋳滓が出土したことについて、埋土の上位から「スギ」の炭化物が採取されたもののごく僅かで、それ以外には遺構内部や周囲も含めて、焼土や炭化物、鍛造剥片等の分布は見られなかったことから、おそらく他の場所で使用されたものが投棄されたということも考えられる。遺構は埋土や出土遺物等から、平安時代以降のものとして推定されるが、その性格は不明である。

#### [4号土坑-RD4] (第14図・写真図版14)

<位置> 調査区北東部、IB7g～IB8gグリッドに位置する。

<規模> 長軸2.5m・短軸2.4m・深さ0.9m

<平面・断面形> 平面形はほぼ円形で、断面形はすり鉢状を呈する。

<埋土> 上～下層・壁面には黒褐色が主体のシルト、底部には炭化物の層が分布している。

<遺物> 須恵器の甕の一部が多く(遺物No.16～25)、埋土上位からの出土が主体となっている。

<特徴> 当該遺構の検出面を7号・9号溝が通っており、それよりも以前の遺構である。出土遺物等から当該遺構は平安時代以降に造られたものと推定している。底部には炭化物が集積していたが焼土等はなくその性格は不明である。

#### (5) 井戸跡 (第14図・写真図版12)

当初予定より広げられた調査範囲内(北端部)IB5fグリッド付近から検出された。

ほぼ円形をした形態をもち、長軸3.1m・短軸2.9m・深さ2.2mを示している。上・中層部は、黒褐色のシルト及び粘土が主体となっているが、下層以降はグライ化した粘土層が厚く分布する、井戸跡特有の様相を呈している。最下層の底部付近には径5cm程度の礫層がみられたが、堆積・分布状況から人為的なものではなく、自然堆積によるものと推定され、木杵等の遺物は出土していない。

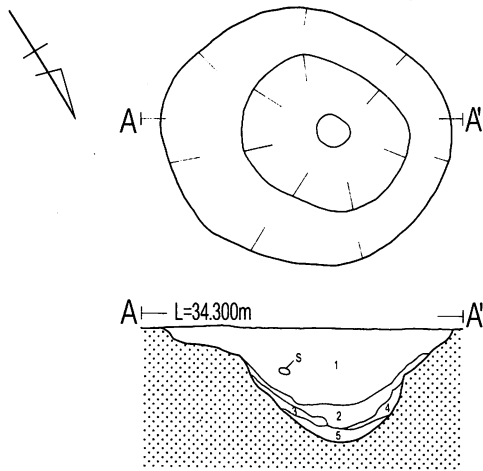
出土遺物は、埋土上位から須恵器の甕(遺物No.26・27)、井戸跡開口部付近から漆器の椀(遺物No.45:カラー頁参照)が出土している。漆器の椀の出土は耕作による攪乱を受けた表層部に近く、また漆部分以外はほとんど残っていないため実測作業は不可能と判断し、写真による記録保存のみに留めた。

当該遺構が造られた時代について、上記の遺物が出土しているものの量は些少であり、また出土位置が表層に近い埋土上位であったことから、時代を決定する材料には乏しく不明である。

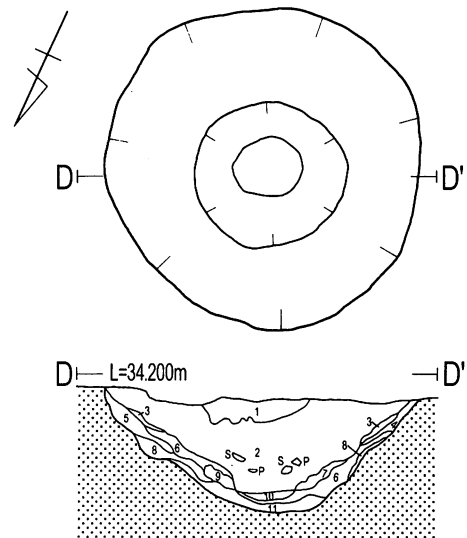
底部はグライ化した層が厚く堆積しており、崩落の危険が高いため、より深い位置の精査は断念した。

#### (6) 水田跡 (写真図版16)

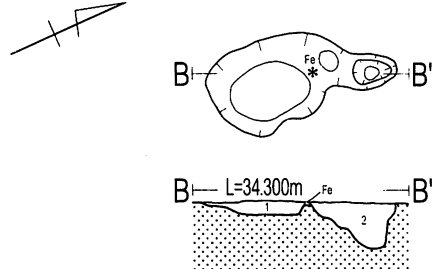
調査区の中央部及び南端部の2箇所において、水田跡が検出された。中央部の水田跡には、区画された畦のようなものと、また南端部の水田跡からは、夥しい蹄の跡と2つの蹄鉄が検出・出土した。埋土は攪乱を受けており、戦後間もなくまで耕作された水田であったということから、精査は行わず、出土した2つの蹄鉄と蹄の跡を、写真と実測図により記録保存するに留めた。



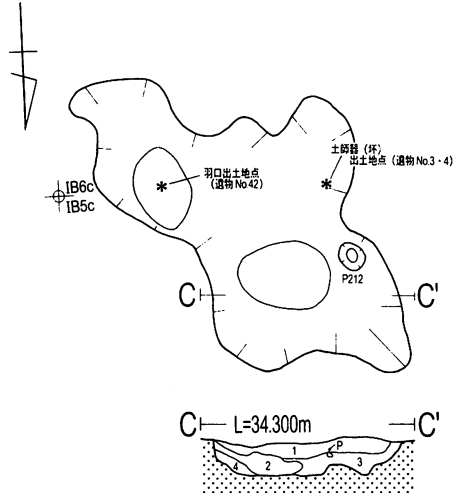
- 1号土坑 (RD1: 南断面)
- 1層: 10YR3/3・暗褐色・粘性あり・締まり密・シルト (地山ブロック少量混入)
  - 2層: 10YR3/2・黒褐色・粘性強・締まり中・粘土 (地山ブロック少量混入)
  - 3層: 10YR5/6・黄褐色・粘性あり・締まり密・シルト (地山)
  - 4層: 10YR4/2・灰黄褐色・粘性あり・締まり密・シルト (地山ブロック多い)
  - 5層: 10YR4/1・褐灰色・粘性強・締まり中・粘土 (グライ化している)



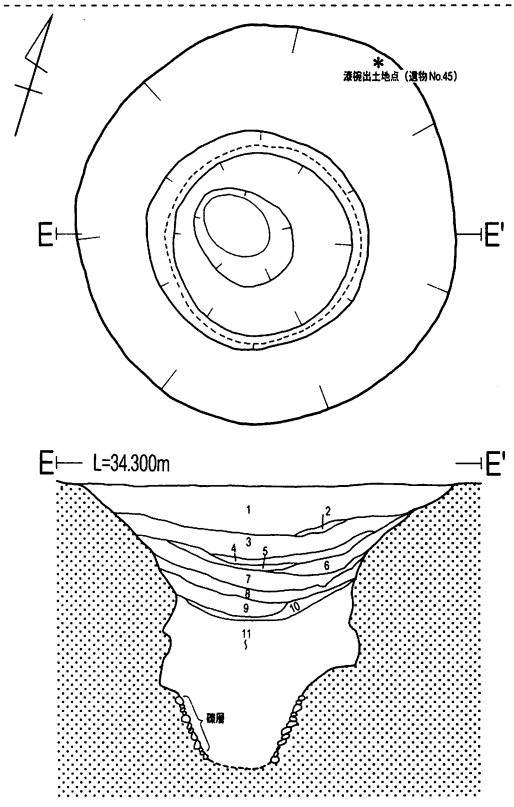
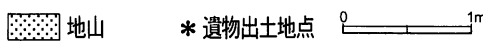
- 4号土坑 (RD4: 南断面)
- 1層: 10YR1/7/1・黒褐色・粘性なし・締まり密・シルト
  - 2層: 10YR3/2・黒褐色・粘性あり・締まり中・シルト (下部から、須恵器が多く出土)
  - 3層: 10YR3/2・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト (地山ブロックを多く含む)
  - 4層: 10YR5/2・灰黄褐色・粘性あり・締まり密・シルト (地山ブロックを含む)
  - 5層: 10YR6/6・明黄褐色・粘性なし・締まり密・シルト (6層を少量含む)
  - 6層: 10YR3/2・黒褐色・粘性なし・締まり密・シルト (地山ブロックを含む)
  - 7層: 10YR4/4・褐色・粘性あり・締まり密・シルト
  - 8層: 10YR4/3・にぶい黄褐色・粘性なし・締まり密・シルト (地山ブロックを含む)
  - 9層: 10YR2/2・黒褐色・粘性なし・締まりやや密・シルト (炭化物を含む)
  - 10層: 10YR1/7/1・炭化物
  - 11層: 10YR4/6・褐色・粘性あり・締まり密・シルト (地山)



- 2号土坑 (RD2: 西断面)
- 1層: 10YR5/6・黄褐色・粘性あり・締まり密・砂質シルト (10YR5/3・にぶい黄褐色土のブロックを含む)
  - 2層: 10YR4/2・灰黄褐色・粘性なし・締まり中・シルト (地山ブロック含む)



- 3号土坑 (RD3: 南断面)
- 1層: 10YR3/3・暗褐色・粘性なし・締まり密・シルト (地山ブロックを含む)
  - 2層: 10YR2/3・黒褐色・粘性あり・締まり中・シルト (地山ブロック及び炭化物を含む)
  - 3層: 10YR3/3・暗褐色・粘性なし・締まり密・シルト (地山ブロックを多く含む)
  - 4層: 10YR7/6・明黄褐色・粘性あり・締まり密・シルト (地山ブロックを多く含む)



- 井戸跡 (北西断面)
- 1層: 10YR3/3・暗褐色・粘性あり・締まり密・シルト
  - 2層: 10YR3/2・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト (地山ブロックを含む)
  - 3層: 10YR2/2・黒褐色・粘性強・締まり密・粘土
  - 4層: 10YR2/3・黒褐色・粘性あり・締まり密・シルト
  - 5層: 10YR2/2・黒褐色・粘性強・締まり中・粘土 (酸化鉄を多く含む)
  - 6層: 10YR3/2・黒褐色・粘性強・締まり密・粘土 (酸化鉄を少し含む)
  - 7層: 10YR3/2・黒褐色・粘性強・締まり密・シルト (酸化鉄を多く含む)
  - 8層: 10YR4/1・褐灰色・粘性強・締まり中・粘土 (酸化鉄を少し含む)
  - 9層: 10YR4/1・褐灰色・粘性強・締まり疎・粘土 (酸化鉄を多く含む)
  - 10層: 10YR5/1・褐灰色・粘性強・締まり疎・粘土 (酸化鉄を含む)
  - 11層: 5YR2/1・緑黒色・粘性強・締まり疎・粘土 (グライ化している)
- (12層以下の調査は崩落の危険があったため、要断面の記録のみにとどめた。下層の壁を巡っているのは、礫層である。井戸跡は検出・出土していない。)

第14図 1～4号土坑・井戸跡 (平面図及び断面図)

## V. ま と め

本遺跡は、担い手育成基盤整備事業に付随した、農地圃場整備に関連した用・排水路部分及び農道部分の建設工事に伴う遺跡の発掘調査である。調査範囲について、耕作地は一部分を除き盛土を行うため調査対象からは外され、深い部分まで掘り下げる必要がある前述の箇所限定された。

### 1. 調査対象範囲及び検出された遺構について

#### <遺跡が立地する区域の状況について>

当該遺跡を始めとする周辺一帯は、近隣の北上川水系に属する胆沢川が長年に渡って形成した、胆沢扇状地の扇端部分、及び北上川が形成した氾濫原とほぼ重複する。調査部分は、標高34m前後を示す平坦な地形で、圃場整備が進んだ周辺と比較し、現況は休耕田若しくは休耕田から転用した畑地となっていた。調査区西側に隣接して、中世末期から続くとされる豪壮な鈴木家の屋敷地が立地している。

#### <検出された遺構について>

調査区は、当初予定の調査範囲と後に追加された調査部分を含めると、アルファベットのPの文字に似た形となっている。当初予定された調査区からは、柱穴状土坑と南北に走る溝跡程度の検出に留まっていたが調査範囲が追加された北東部分から、掘立柱建物跡を始めとして、まとまって遺物が出土した3・4号土坑、井戸跡及び近世の溝跡など、500㎡ほどの狭い範囲から当該遺跡の主体となる遺構や遺物が現れた。

#### 〔掘立柱建物跡・井戸跡〕

柱穴状土坑が錯綜し、検出面も大部分が後年の耕作機械による削平・攪乱を受けていたが、2棟の掘立柱建物跡を確認した。ごく少数の土師器・須恵器片の出土が見られたものの、それぞれの柱穴の規模・柱間寸法等から、近世以降に付属小屋的な用途として構築された建物跡であることが考えられる。

1号掘立柱建物跡から約10m東の位置に井戸跡が検出されたが、出土遺物等から鑑みて井戸跡の方がより以前に構築されたものと考えられ、相互には時代的に関連しない遺構であると推定している。

#### 〔溝跡〕

##### (近世以前に構築・使用されたものと推定される溝跡)

調査区内を縦断するように南北へ走る溝跡(1・6～10号溝)と、それらに付属する形態で枝分かれする小規模な溝跡(2～5号溝)が存在するが、それぞれにわずかな差異はあるものの、出土遺物や埋土等から平安時代以降のほぼ同じ時期に構築・使用されたものと考えられる。

これらの溝跡は、断面形状が「皿状」もしくは深いものでは「U字状」を呈しているが、調査区の検出面が、ほぼ全域に渡って耕作機械による削平・攪乱を受けていたことを考慮すると、元来はより規模が大きく深いものであったのではないかと推定される。

##### (近世以降に構築・使用されたものと推定される溝跡)

調査区域が追加された北端部分から検出した、東西方向へ規則的に伸びる溝跡(11～18号溝)は、それぞれ溝の幅が0.5m前後、溝と溝との中心点間はほぼ1.8mという共通した特徴をもっている。埋土内からは19世紀中葉の土瓶片(12号溝・検出面より出土)や近代のごく新しい陶磁器片等が出土している。全体に渡って、後年の耕作機械による削平・攪乱を受けているものの、埋土内から出土した遺物の状況や他の遺構との切り合い等から、近世以降に構築・使用されたものと推定される。

##### (上述したそれぞれ時代が異なる溝跡の用途・性格)

近世以前及び近世以降のものとして推定されるこれらの溝跡は、構築・使用されていた時期に相違はあるが、灌漑水路としての用途が考えられる。特に、近世以降のものとして推定される調査区北端部の11～18号溝につ

いては、当該遺跡の東方約 800 m先に位置する前沢町水ノ口遺跡でも、ほぼ同じ形態を示す規則的な配置の溝跡遺構群が検出されており、時期や用途も同様のものと推定している。

当該遺跡は、北上川の氾濫原及び、胆沢川が形成した胆沢扇状地扇端部の複合した部分に位置しており、地形・地質構造上、農耕や日常生活を営む上で必要不可欠な要素である「水」が得やすく、その反面、氾濫原に位置するが故に耕地の排水性をも考慮しなければならなかったことから、これらの溝跡が日常生活と密接した灌漑用水路としての役割を担っていたのではないだろうか。

## 2. 出土遺物について

遺物は大型で厚みのある須恵器片が主体で、付随するように少量の土師器片と陶磁器片が出土した。

### 〔須恵器〕

調査区北側に位置する3・4号土坑から集中して出土している。特に大甕の体部の出土が多く、接合できるものは数点に留まった。接合しない破片が多いため、これらの須恵器片が出土した土坑は、捨て場としての性格が強かったのではないかと推察している。

### 〔土師器〕

当該遺跡から出土した土師器は破片が多いものの、3号土坑からは内面黒色処理が施されていない完形に近い土師器の坏 (Na3・Na4) が出土した。それぞれ口ク口成形、底部に回転糸切痕が残されている。これらの遺物が出土した直上部分では攪乱・削平を受けており、辛うじてその影響を免れたようである。

### 〔陶磁器〕

近世のものが多く、遺物の中には近代のものも多く含まれていた。これらの陶磁器片は、おそらく検出された掘立柱建物跡（近世以降）、及び西側に隣接する鈴木家との関連が深いものと思われる。

### 〔漆器碗〕

調査区北端部の井戸跡埋土上位から出土したものである。遺物は碗と推定されるが、漆の部分のみを残して木製の本体はほとんど残されておらず、残存状況が悪いため写真での記録保存に留めた。本体の漆塗り部分は朱色で、天頂部には僅かに白色の線を確認することができる。

### 〔羽 口〕

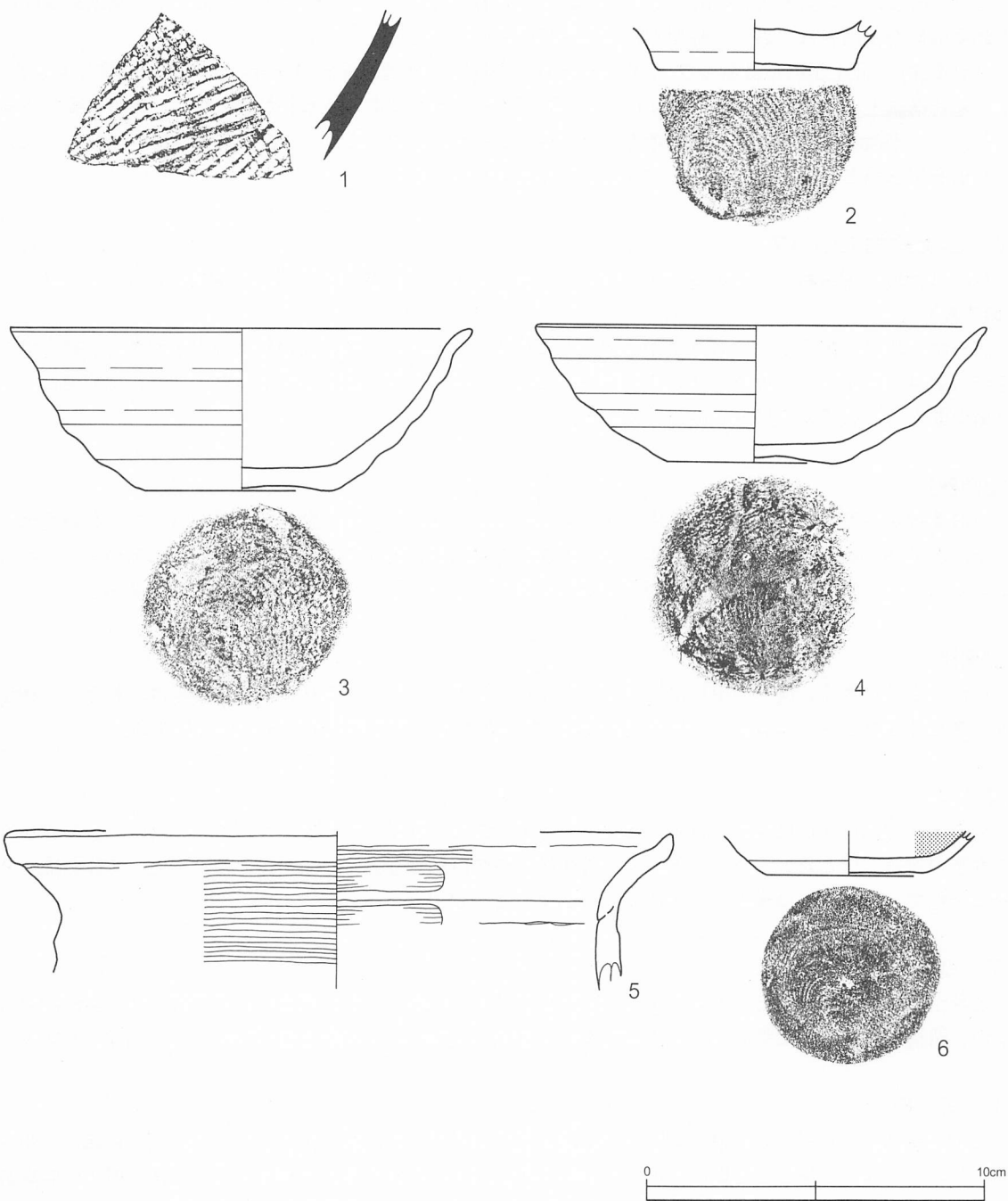
3号土坑下位から鉄滓とともに出土し、先端部分がガラス化するなど羽口として使用された跡が認められるが、遺構内及び付近に炉跡らしき痕跡はなく、出土した羽口片は遺構と直接関連しない可能性が高い。

## 3. 所 感

溝跡を主体とした種々の遺構・遺物等が検出・出土したが、これらの状況と地域の現況から鑑み、胆沢平野における「水」を軸とした現在に至るまでの生活の営みを垣間見ることができた。今後、周辺の発掘調査が進展することがあり得れば、当該地域に存在したとされる中世の「豪族屋敷・環濠屋敷」を中心とした集落の概要とともに、当該遺跡の位置付け及びこれらとの関連性も明確になってくるかもしれない。

### <参考文献>

- 山ノ内Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第249・250集 1996・1997  
台太郎遺跡第15次発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第309集 1999  
水ノ口遺跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第330集 2000  
掘立柱建物跡の間尺とその時代性—高橋與右衛門 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要Ⅸ 1989  
豪族屋敷と在家集落—池田雅美 地理学評論 (41—11) 1968  
近世民家の成立過程—草野和夫 中央公論美術出版 1995

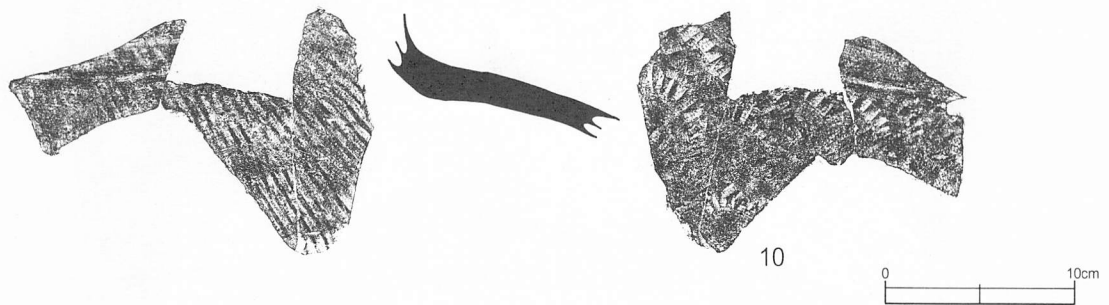
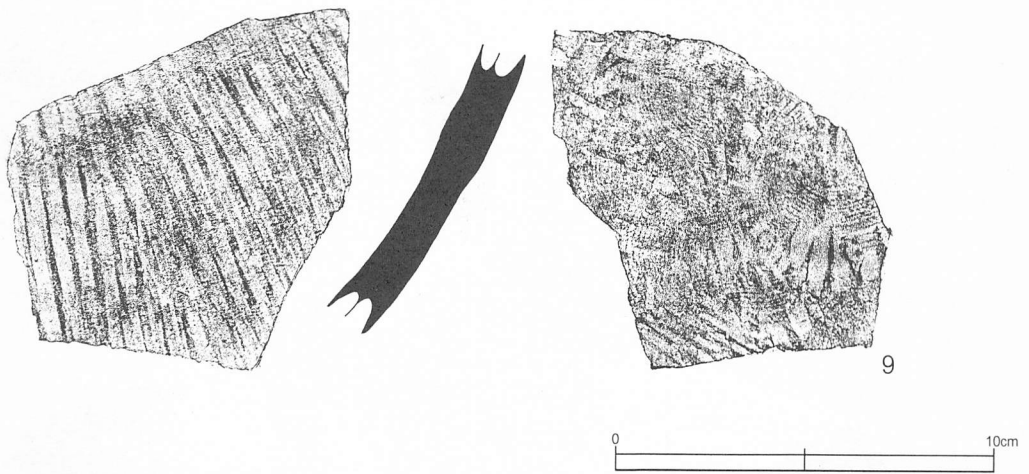
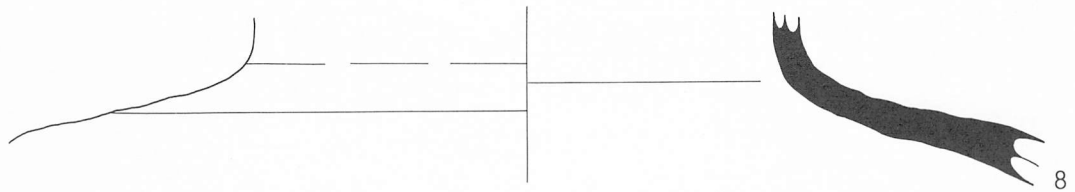
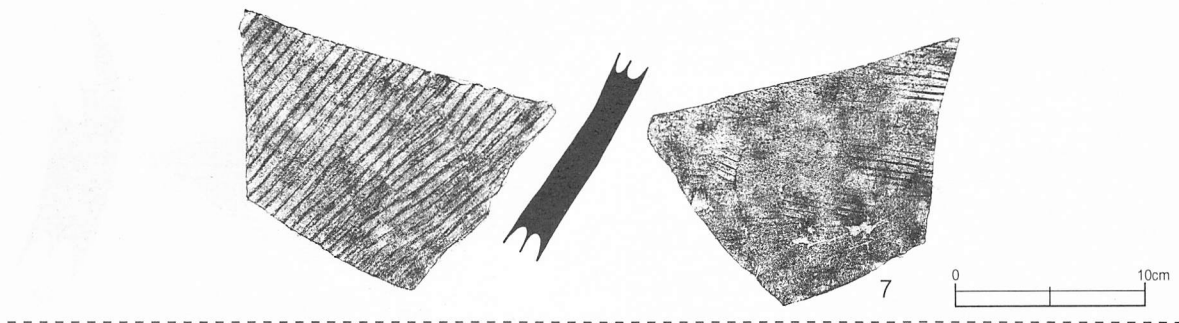


〈土器〉

No	出土地点	層位	種類	器種・部位	外面調整	内面調整	口径cm	底径cm	高さcm	備考
1	1号土坑	上位	須恵器	甕・胴部	タタキ					
2	〃	上位	土師器	甕・底部	ロクロナデ	ロクロナデ		(6.0)	(1.5)	底面に回転糸切痕があり、磨滅している。
3	3号土坑	下位	土師器	坏・ほぼ完形	ロクロナデ	ロクロナデ	(13.8)	5.6	4.8	底面に回転糸切痕がある。
4	〃	下位	土師器	坏・ほぼ完形	ロクロナデ	ロクロナデ	(13.5)	5.4	4.1	底面に回転糸切痕があり、胎土は粗い。
5	〃	下位	土師器	甕・口縁部～頸部	ロクロナデ	ロクロナデ	(20.0)		(4.6)	胎土は粗い。頸部に輪積み痕が残っている。
6	〃	下位	土師器	坏・底部	ロクロナデ	ミガキ		5.0	(1.3)	底面に回転糸切痕があり、器の内面に黒色処理が施されている。

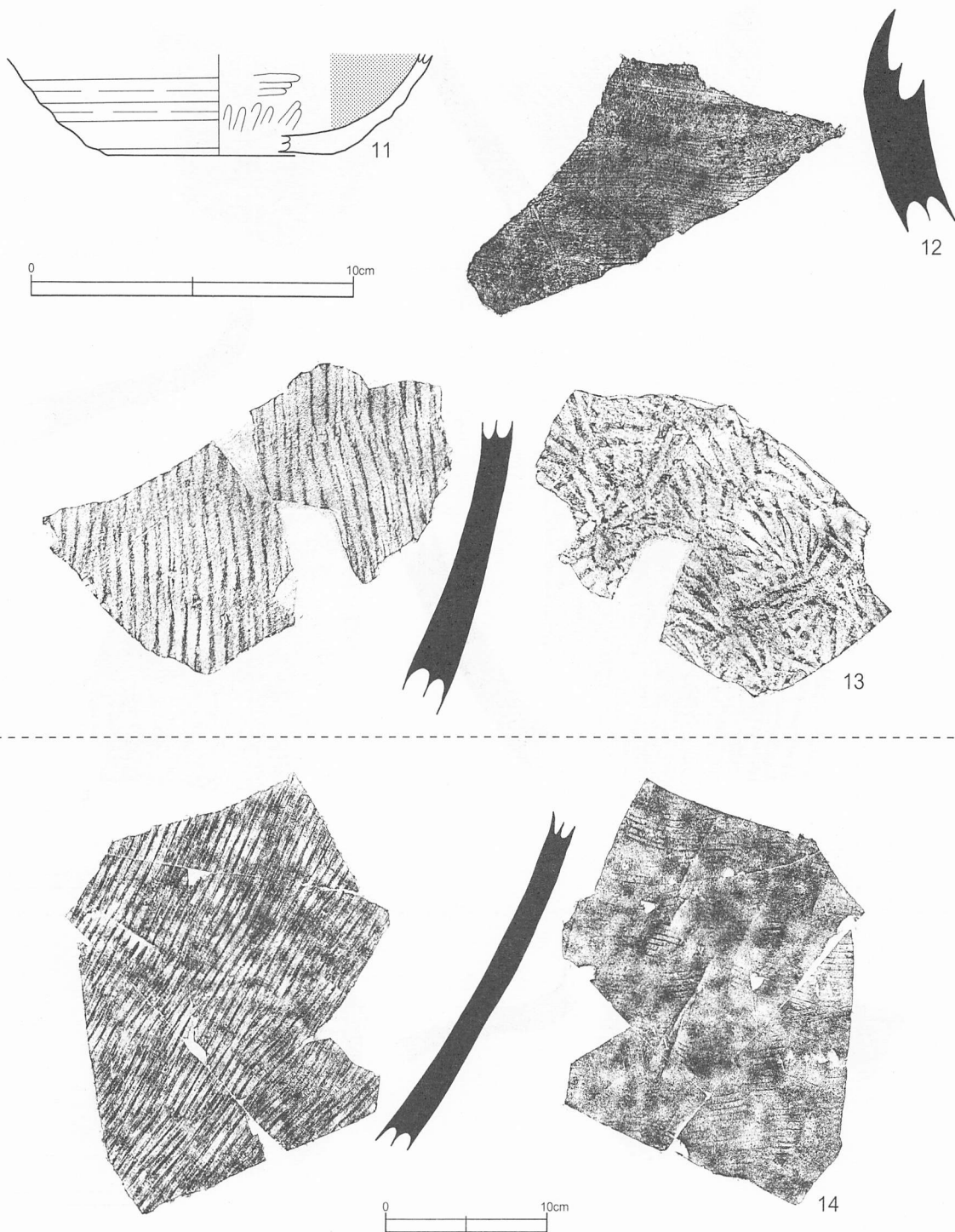
第15図 1・3号土坑出土遺物





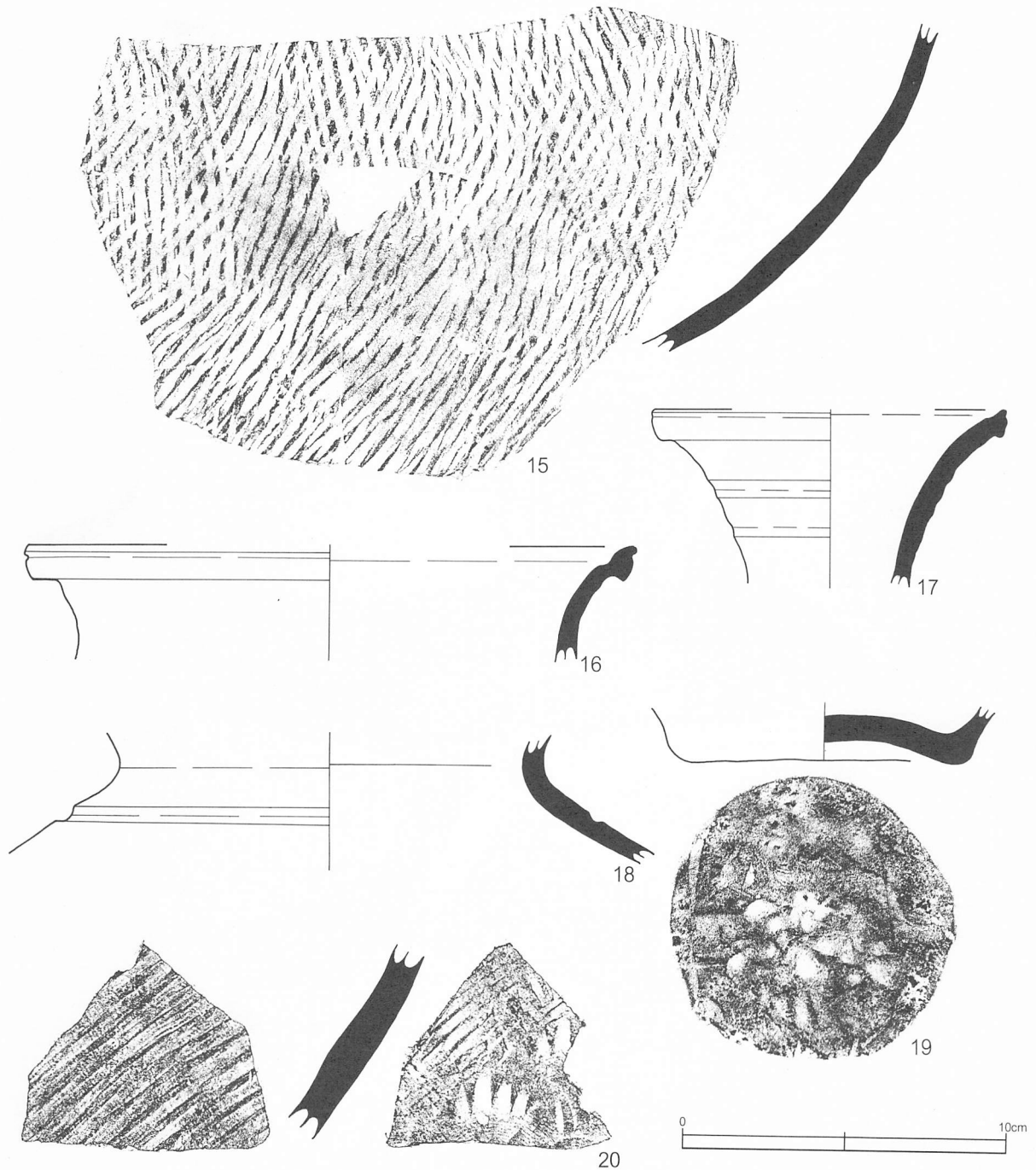
No	出土地点	層位	種類	器種・部位	外面調整	内面調整	口径cm	底径cm	高さcm	備考
7	3号土坑	下位	須恵器	大甕・胸部	平行タタキ	当て具痕				実測図は、縮尺1/4で掲載している。
8	〃	ベルト 中位	須恵器	甕・頸部～胸部上	タタキ・ ロクロナデ	ロクロナデ			(4.7)	
9	〃	ベルト 中位	須恵器	甕・胸部	タタキ	当て具痕				
10	〃	ベルト 中位	須恵器	大甕・頸部～胸部	タタキ・ ロクロナデ	当て具痕・ ロクロナデ				実測図は、縮尺1/4で掲載している。

第 16 図 3 号土坑出土遺物



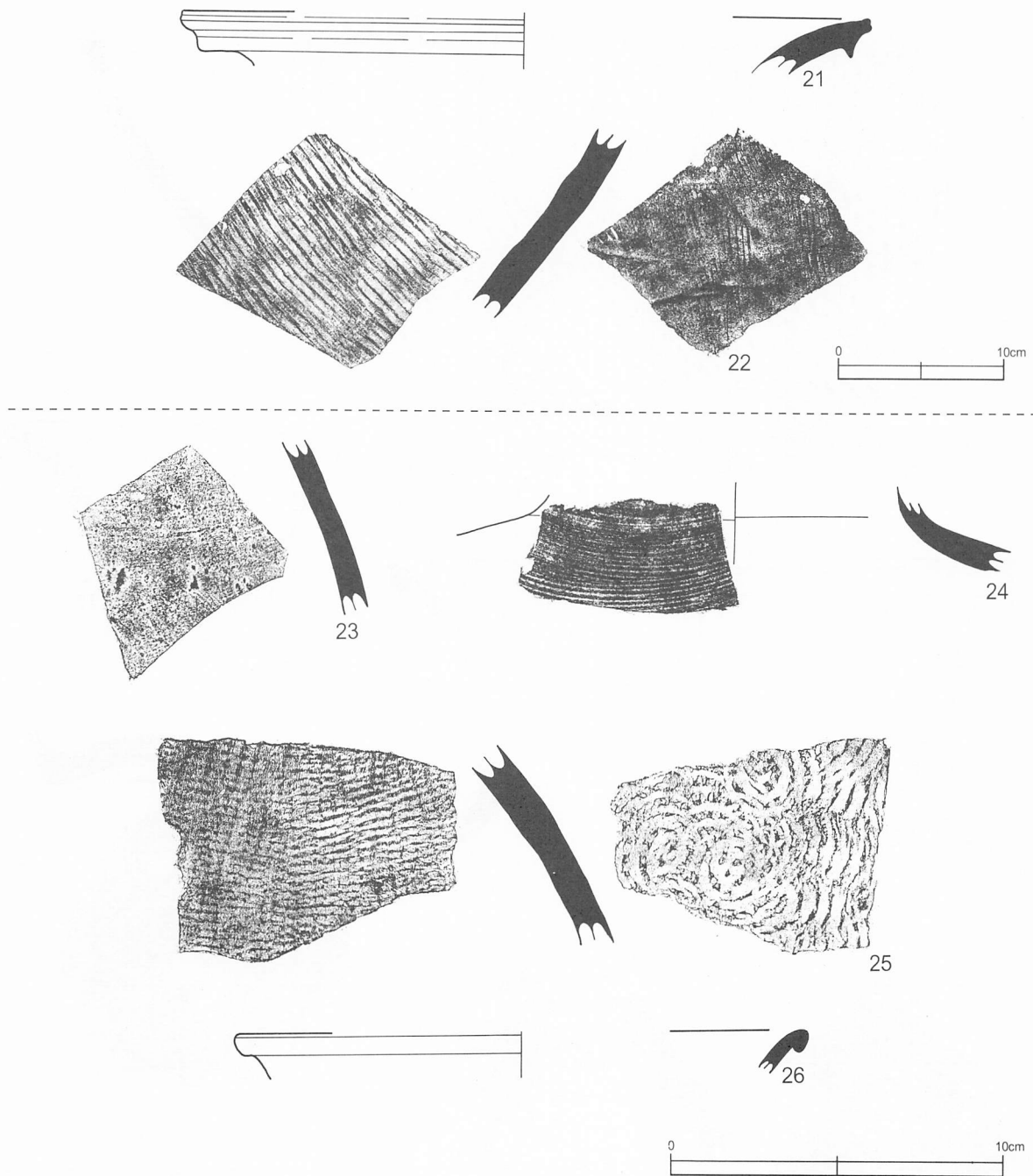
No	出土地点	層位	種類	器種・部位	外面調整	内面調整	口径cm	底径cm	高さcm	備考
11	3号土坑	ベルト下位	土師器	坏・胴部～底部	ロクロナデ	ミガキ		(7.0)	(3.1)	底面に回転糸切痕が僅かに残り、器の内面に黒色処理が施されている。
12	◇	ベルト下位	須恵器	大甕・頸部	ロクロナデ	ロクロナデ				
13	◇	ベルト下位	須恵器	甕・胴部	タタキ	当て具痕				焼成が甘く、内面と外面が剥離している。
14	◇	ベルト下位	須恵器	大甕・胴部	平行タタキ	当て具痕				実測図は、縮尺1/4で掲載している。

第17図 3号土坑出土遺物



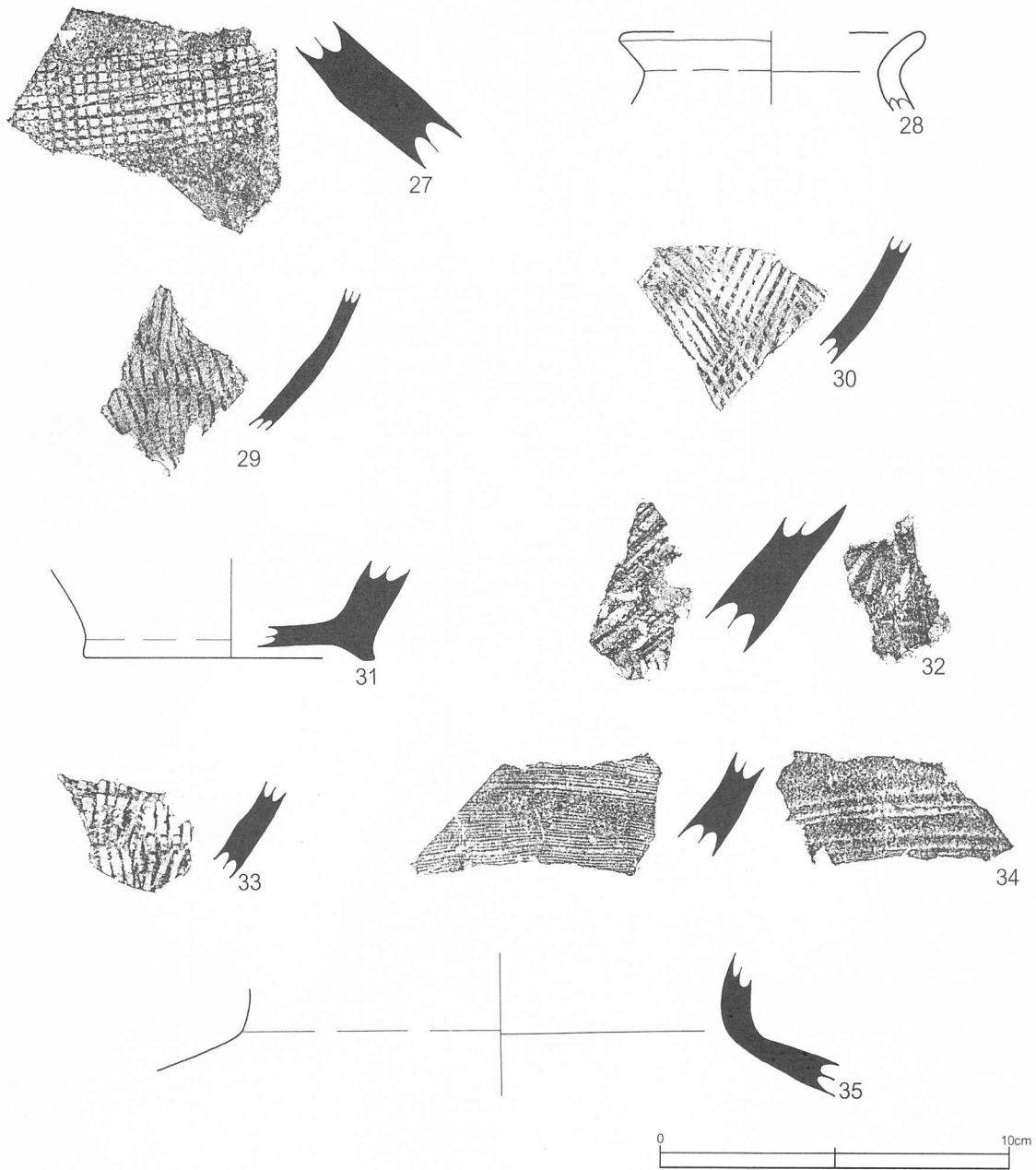
No	出土地点	層位	種類	器種・部位	外面調整	内面調整	口径cm	底径cm	高さcm	備考
15	3号土坑	ベルト下位	須恵器	甕・胴部	タタキ					焼成が甘く、内面と外面が剥離している。
16	4号土坑	上位	須恵器	甕・口縁部～頸部	ロクロナデ	ロクロナデ	(19.0)		(3.6)	
17	〃	上位	須恵器	壺・口縁部～頸部	ロクロナデ	ロクロナデ	(11.0)		(5.5)	
18	〃	上位	須恵器	甕・頸部～胴部上位	タタキ・ロクロナデ	ロクロナデ			(4.2)	
19	〃	上位	須恵器	甕・底部	ナデ	ナデ		(8.8)	(1.8)	
20	〃	上位	須恵器	甕・胴部	タタキ	当て具痕				

第18図 3・4号土坑出土遺物



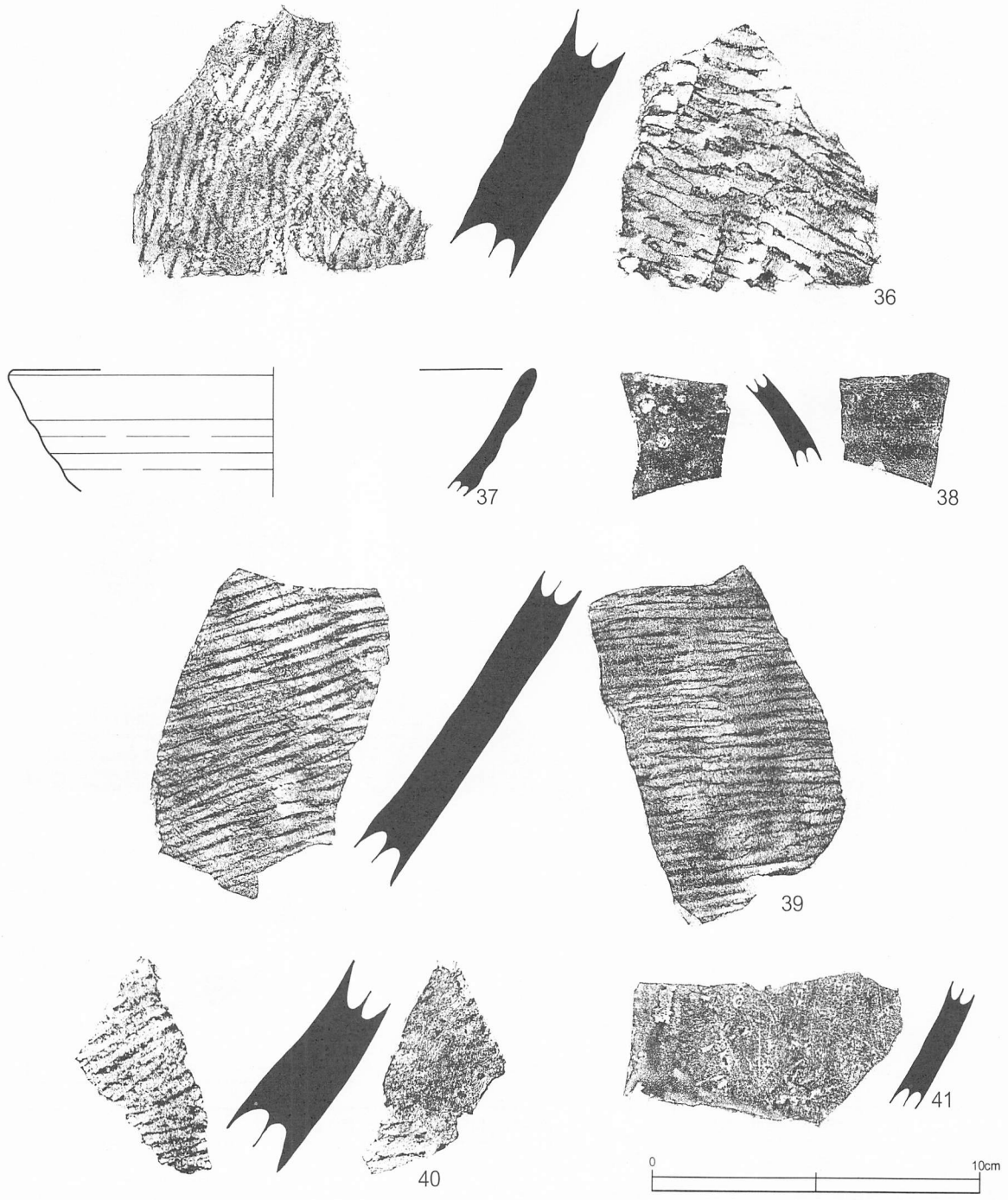
No	出土地点	層位	種類	器種・部位	外面調整	内面調整	口径cm	底径cm	高さcm	備考
21	4号土坑	上位	須恵器	大甕・口縁部	タタキ・ロクロナデ	ロクロナデ	(41.8)			実測図は、縮尺1/4で掲載している。
22	◇	上位	須恵器	大甕・胴部	平行タタキ	当て具痕				◇
23	◇	中位	須恵器	甕・胴部	ロクロナデ	ロクロナデ				
24	◇	中位	須恵器	甕・頸部～胴部上	ロクロナデ	ロクロナデ			(2.5)	
25	◇	下位	須恵器	甕・胴部	タタキ	当て具痕				
26	井戸跡	上位	須恵器	甕・口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	(17.2)		(1.4)	

第19図 4号土坑・井戸跡出土遺物



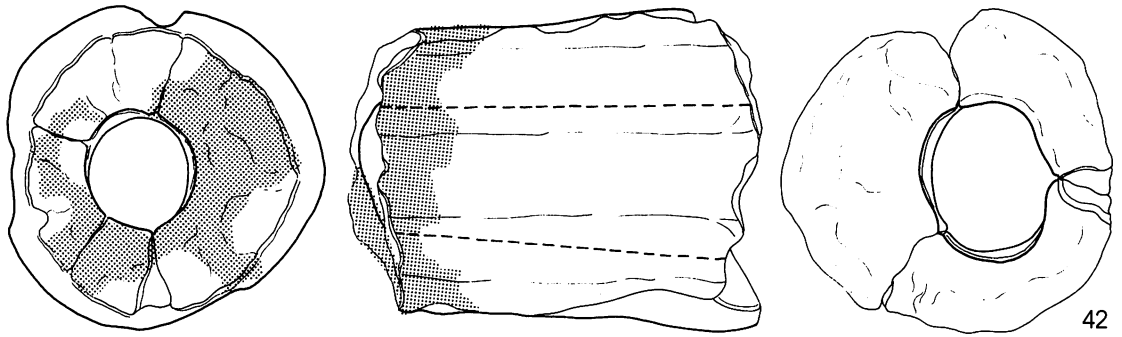
No	出土地点	層位	種類	器種・部位	外面調整	内面調整	口径cm	底径cm	高さcm	備考
27	井戸跡	上位	須恵器	甕・胴部上位	タタキ・ロクロナデ	ロクロナデ				
28	1号溝	埋土	土師器	甕・口縁部～頸部	ロクロナデ	ロクロナデ	(8.8)		(2.1)	
29	〃	埋土	須恵器	甕・胴部	タタキ					
30	4号溝	埋土	須恵器	甕・胴部	タタキ	タタキ				
31	5号溝	埋土	須恵器	長頸壺・底部	ロクロナデ			(8.4)	(3.8)	
32	6号溝	埋土	須恵器	甕・胴部	タタキ	当て具痕				
33	8号溝	埋土	須恵器	甕・胴部	タタキ					
34	柱穴状土坑P26	埋土	須恵器	甕・胴部	ロクロナデ	ロクロナデ				
35	北端試掘部分	埋土	須恵器	甕・頸部	ロクロナデ	ロクロナデ			(4.2)	

第20図 井戸跡・溝跡・柱穴状土坑・遺構外出土遺物

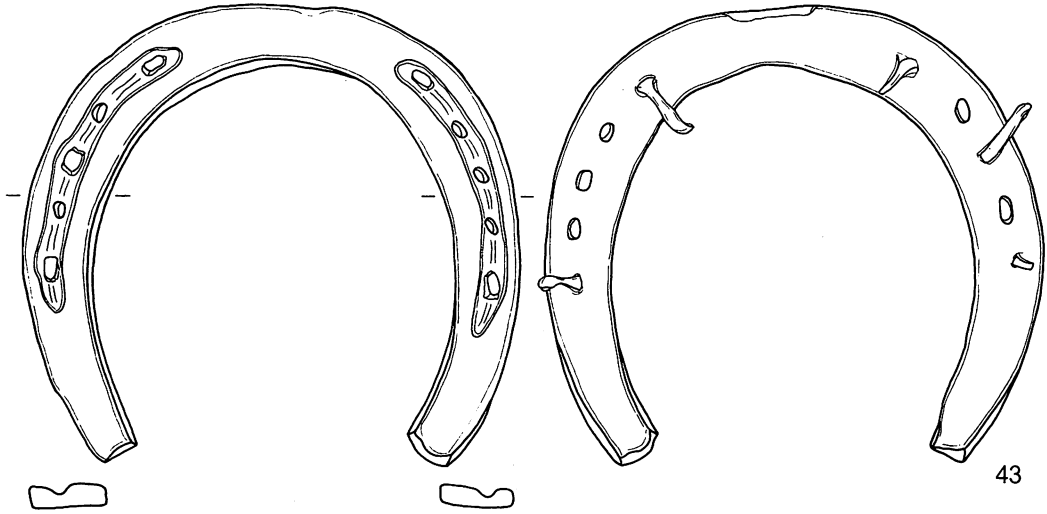


No	出土地点	層位	種類	器種・部位	外面調整	内面調整	口径cm	底径cm	高さcm	備考
36	北端 試掘部分	埋土	須恵器	大甕・胴部	タタキ	当て具痕				
37	中央 試掘部分	埋土	須恵器	坏・口縁部	ロクロナデ	ロクロナデ	(16.0)		(3.8)	
38	〃	埋土	須恵器	甗・胴部	ロクロナデ	ロクロナデ				器の外面に釉が付着している。
39	〃	埋土	須恵器	甗・胴部	タタキ	タタキ				焼成が甘い。
40	I B 7 e	埋土	須恵器	大甕・胴部	タタキ	当て具痕				
41	調査区 北側	表採	須恵器	甗・胴部中位～下位	ケズリナ	デ				器の外面に釉が付着している。

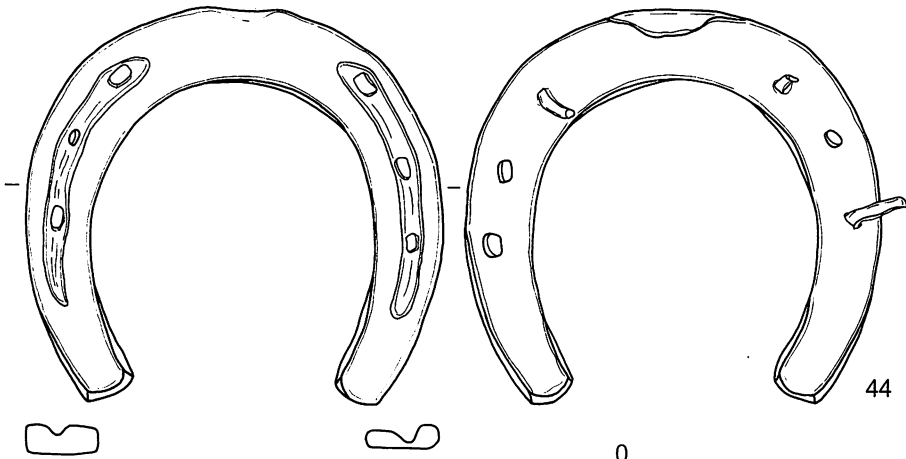
第21図 遺構外出土遺物



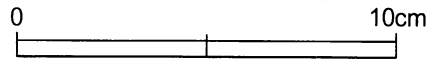
42



43



44



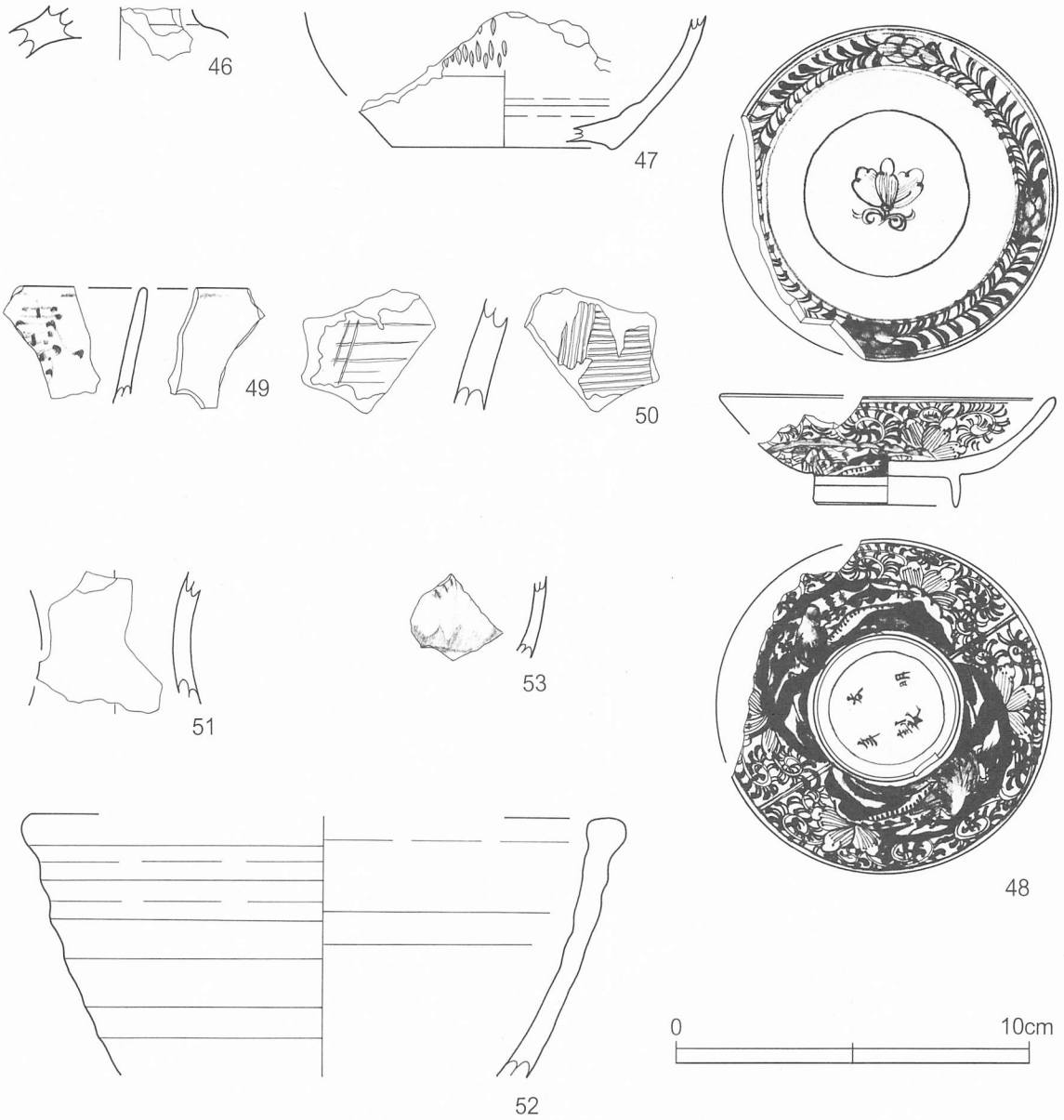
〈土製品－羽口〉

No	出土地点	層位	器種	残存部外径 cm	残存長 cm	駒内径 cm	駒外径 cm	外面調整	内面調整	残存部	備考
42	3号土坑	下位	羽口	7.0 ~ 8.7	11.1	4.0	3.0	ナデ	棒状工具痕	先端部	先端部は「ガラス化」して硬く、駒内調整の痕跡と駒が際立つ。駒内調整痕跡は側面

〈鉄製品－蹄鉄〉

No	出土地点	層位	種類	形態	縦 cm	横 cm	厚さ	備考
43	南端水田跡	底部	鉄製品	蹄鉄	12.0	13.0	0.6	南端部水田跡（戦後間もなくまで使用）のグライ化層下位より出土した。
44	南端水田跡	底部	鉄製品	蹄鉄	10.5	11.0	0.7	上記とほぼ同地点から出土した。前者と比較して小さく、子馬のものと思われる。

第22図 3号土坑・南端水田跡出土遺物（土製品・鉄製品）

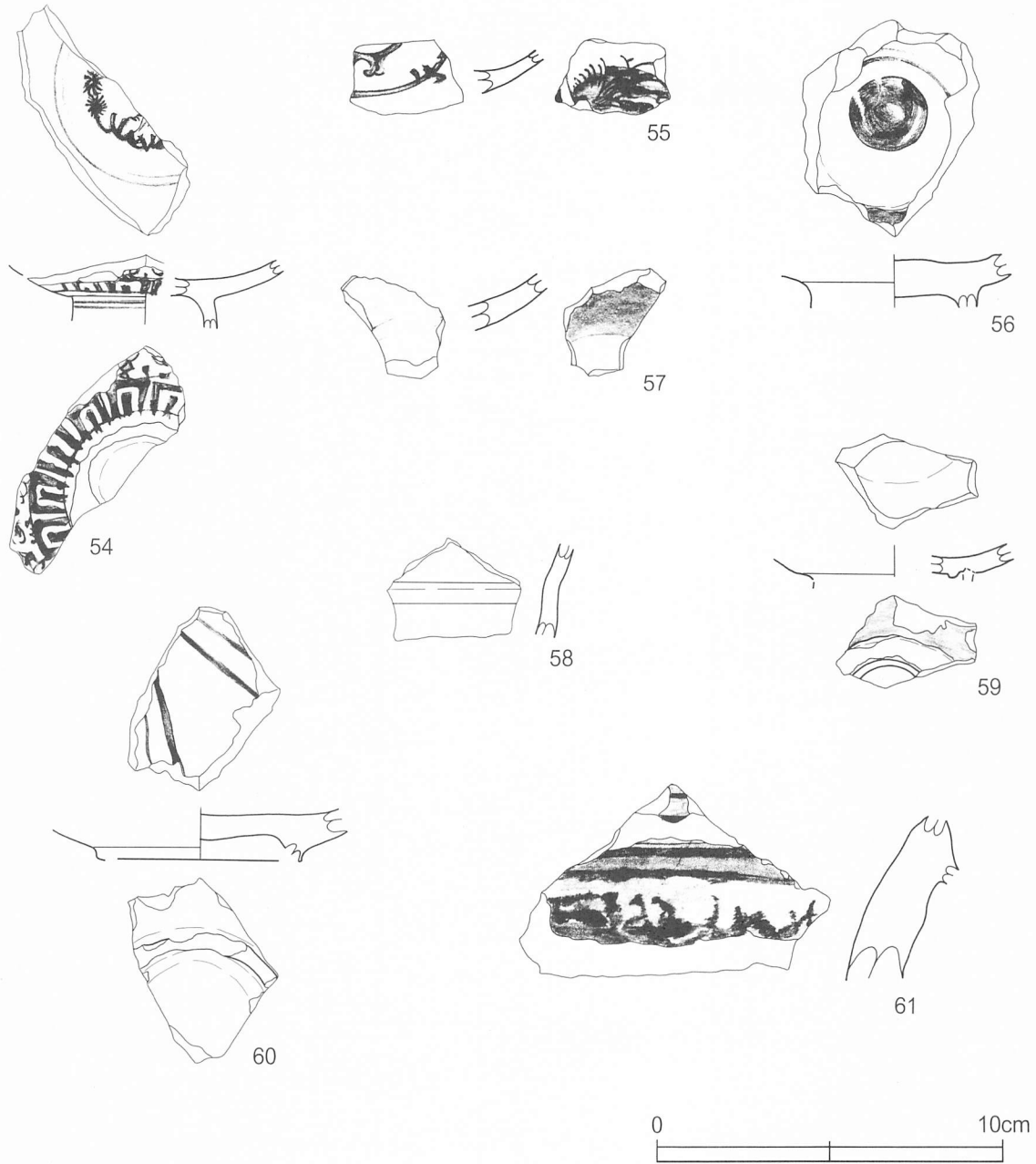


〈陶磁器〉

No	出土地点	層位	器種	口径cm	底径cm	高さcm	製作地	製作年代	備考
46	1号溝	埋土内	不明		(4.0)	(1.5)	中国産?	不明	遺構内・埋土上位から出土した。
47	12号溝	検出面	土瓶		(6.4)	(3.8)	産地不明	19世紀中葉	遺構内・埋土中位から出土した。
48	I B 6 h	埋土内	皿	(9.6)	4.2	3.1	肥前産	18世紀Ⅳ期	底部に「太明年製」の銘がある。
49	調査区中央	埋土内	碗			(3.2)	肥前産	18世紀Ⅳ期	
50	"	埋土内	播鉢			(3.5)	瀬戸?	17世紀	錆釉が施されている。
51	"	埋土内	徳利			(4.0)	在地産?	近世か?	
52	南端試掘部	上位	片口	(16.8)		(7.4)	美濃産	18世紀中葉	鉛釉が施されている。
53	"	上位	碗			(2.4)	肥前産	18世紀Ⅳ期	

第23図 溝跡・遺構外出土遺物（陶磁器①）





No	出土地点	層位	器種	口径cm	底径cm	高さcm	製作地	製作年代	備考
54	南端試掘部	上位	皿		(4.2)	(2.0)	肥前産	18世紀Ⅳ期	
55	"	中位	皿			(2.1)	肥前産	18世紀Ⅳ期	
56	"	中位	皿		(4.8)	(1.5)	肥前産	18世紀Ⅳ期	
57	"	中位	皿			(3.1)	肥前産	18世紀Ⅳ期	
58	北端試掘部	上位	鉢			(3.0)	信楽産?	近世か?	灰釉が施されている。
59	"	上位	碗		(4.8)	(0.9)	大塚相馬産	19世紀	
60	"	下位	不明		(6.0)	(1.5)	本郷?	近代	染付磁器である。
61	調査区東端	表探	壺?甕?			(5.6)	渥美?	12世紀?	須臾器の可能性も考えられる。突帯のような部分がある。

第24図 遺構外出土遺物(陶磁器②)

## VI. 分析・鑑定結果

### 栗林遺跡

### 出土鉄関連遺物の金属考古学的調査結果

岩手県立博物館 赤沼英男  
咲山まどか

## 栗林遺跡出土鉄関連遺物の金属考古学的調査結果

岩手県水沢市真城地区に立地する栗林遺跡では、1999年に行われた圃場整備に伴う緊急発掘調査によって、休耕田の下30 cmのところに不整形な土坑が確認され、その底部から土師器の杯や須恵器片とともにふいご羽口と鉄滓が出土した<sup>1)</sup>。以下ではそれらの金属考古学的調査結果について報告する。

### 1 調査資料

金属考古学的調査に供した資料は、土坑底部から出土した羽口と鉄滓である。それらの外観上の特徴は表1に示すとおりであるが、特に注目すべき点として以下の2点を挙げることができる。

- 1) 著しく部分溶解した羽口先端部分の外径は約7cm、内径は約3cmで、もう一方の端部に向かうに従い気道はそのまま、肉厚となる。
- 2) 鉄滓は黒褐色を呈しほぼ全体がガラス化しており、ところどころに赤錆が固着している。

金属考古学的調査は、図1および図2に示す位置から、ダイヤモンドカッターを用いて摘出した試料片を使って実施した。なお、鉄関連炉は未確認にあり、羽口と鉄滓はほぼ同一の遺構面から検出されたものの、1m程度離れた位置にあったという<sup>1)</sup>。金属考古学的調査結果の考察は、上述を考慮に入れ進めることとする。

### 2 調査方法

羽口ならびに鉄滓から摘出した試料片は2分し一方は組織観察に、もう一方は表面に付着する土砂を除去し、メノー乳鉢を使って粉碎した後、化学成分分析に供した。さらに羽口については化学成分分析用試料片の一部を使って、示差熱・熱重量同時分析も行った。化学成分分析は表2、表3に示す15成分について実施し、FeOは鉄鉱石-酸可溶性鉄(Ⅱ)滴定法、M.Feは鉄鉱石-金属鉄定量法、他は誘導結合プラズマ発光分光分析法(ICP-AES法)によった。

### 3 調査結果

#### 3-1 摘出した試料片の組織観察結果

図1はNo.1羽口の組織観察結果である。羽口先端部分(Sm1部)から摘出した試料片はその全域がガラス化しており、ところどころに暗灰色の結晶Qと鉄粒が観察された(図1b)。マクロ組織の枠で囲んだ内部のEPMAによる分析によって、結晶Qは石英で、基質は少量の酸化鉄を含む $Al_2O_3$ - $SiO_2$ 系のガラス質けい酸塩(S)であることがわかった(図1c)。図1dは先端部に比べそれほど熱の影響を受けていないと判断されるSm2部から摘出した試料片の示差熱・熱重量変化曲線である。1000℃にはじまり1400℃に終わる非常にブロードな吸熱のピークと、1450℃にはじまり1650℃におわる鋭い吸熱のピークがみられる。この分析結果

から、羽口の溶融開始温度は1000℃以上にあったと推定された。

鉄滓(図2a)から抽出した試料片のマクロ組織にはいたるところに気孔が観察された(図2b)。枠で囲んだ内部のミクロ組織には灰色粒状物質と暗灰色柱状結晶Fが、微細な結晶を内包するガラス質けい酸塩によって取り囲まれている様子がみられる。EPMAによる分析によって、結晶FはFeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物〔マグネシウムを固溶した鉄かんらん石; 2 (Fe,Mg) SiO<sub>2</sub>と推定される〕であり、灰色粒状物質は鉄錆であることが判明した。

### 3-2 抽出した試料片の化学組成

表2、表3に羽口ならびに鉄滓の化学成分分析結果を示す。羽口先端部(Sm<sub>1</sub>)のT.Feは3.80%、Si、Alはそれぞれ30.6%、10.7%にある。これに対し基部部分(Sm<sub>2</sub>部)から抽出した試料片のT.Feは2.77%とSm<sub>1</sub>に比べやや低レベルにある(表2)。先端部分が反応サイトに近接する状態で使用された可能性がある。

鉄滓からは41.55%のT.Fe、39.4%のFeOが検出された。M.Feは0.1%未満である(表3)。操作の過程で相当量の酸化鉄を含むスラグが生成したものと推定される。Siは13.7%、Alは4.31%含有されているが、Tiはわずかに0.270%含まれるにすぎない。前述の組織観察において鉄チタン酸化物は未検出にあったが、化学成分分析結果ともよく整合する。

## 4 考察

### 4-1 古代・中世における鋼製造法

鉄滓の成因と羽口の操作内容について考察する前に、古代・中世における鋼製造法について述べてみたい。古代・中世の鋼製造法については文献資料が乏しいこともあり不明な部分が多く、幾つかの方法が提案されている。異なった操作方法が提示される要因の一つに、製錬産物である鉄、とりわけその主生成物に関する見解の相違がある。

製錬による主生成物は、鋼を主成分とするが銹鉄も混在した炭素量が不均一な鉄で、相当量の不純物(鉄滓)をも含んでいる。そのような組成の鉄から極力鋼部分を抽出した後、それを加熱・鍛打して不純物を取り除くとともに、炭素量の調節を行って目的とする鋼を製造するという方法(精錬鍛冶法)が行われていたとする見方がある<sup>2)</sup>。この方法は近世たたら吹製鉄における鉤押法<sup>3)</sup>に位置づけることができる。

古代・中世においては鋼を溶融できるほどに(溶融温度は炭素含有量によって異なるが、炭素含有量0.2~0.3%程度の亜共析鋼を溶融するためには少なくとも炉内温度を概ね1600℃以上に保つ必要がある)炉内温度を維持することは難しく、主として亜共析鋼からなる鉄から鉄滓を分離・除去し純化する際の基本操作は加熱・鍛打にあったと判断される。この場合、少なくとも固体鉄を加熱するための火窪炉が必要であり、道具としては金鋏、金敷、それに熱源である木炭と木炭を燃焼させるための鞴、羽口などが使用される。また、操作の初期には主として鍛打の際に小塊状滓が破碎され飛散し、鉄の純化が進んだ段階では鍛造剥片

が排出されたと推定される。それらが炉内に入り込み炉材粘土と反応しながら溶融もしくは部分溶融し、炉内温度の低下とともに炉床部で固化した際には碗形滓が生成したと思われる。

一方、おびただしい数の鉄鍋、鉄釜をはじめとする鑄造鉄器の出土が示すように、遅くとも中世初頭には安定的に銑鉄を生産する技術が確立されていたと考えられる。製錬産物である銑鉄を溶解し鑄型に注ぎ込むことによって鑄造鉄器が製作されるわけであるが、銑鉄中の炭素を脱炭し鋼を製造することもできる。この方法は近世たたら吹製鉄における銑押法に位置づけられる<sup>3)</sup>。

このように、古代ならびに中世における鋼製造法には幾つかの方法が提案されていることがわかる。鉄関連遺構における生産活動の考察にあたっては、上述を考慮に入れて慎重に検討を進める必要があるといえよう。

#### 4-2 鉄滓・羽口の外観と組成からみた成因ならびに使用形態

金属考古学的調査を行った鉄滓は黒褐色を呈しそのほとんどがガラス化していた。摘出した試料片には41.55%のT.Fe、39.4%のFeOが含有されており、鏽とFeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物の残存が確認された。局所的にはあるにせよ相当の酸化鉄を含むスラグと鉄とが接触し生成した鉄滓であることは確実である。

4-1に従えば、鉄鉱石（厳密には鉄鉱石またはそれが風化して砂状化し二次堆積したTi鉱物をほとんど含まないもの）を製錬した際に排出された鉄滓、またはそのような組成の鉄鉱石を始発原料として製錬された鉄塊（主として鋼からなるが炭素量が不均一で相当量の鉄滓を含むもの）を加熱・鍛打によって純化し炭素量の調整を行う精錬鍛冶操作の過程で排出された鉄滓のいずれかがまず想定される。既述のとおり、遺跡内では鉄関連炉はもとより操作に使用された鉄塊も未確認にある。従って、考古学の発掘調査結果と出土遺物の形状・組成に基づくこれ以上の検討は困難である。遺跡内もしくはその近傍で製錬が実施され、それに伴って排出された鉄滓であることを主張するためには、少なくとも鉄鉱石資源が存在することと、還元不可欠な木炭資源の確保の可能性について吟味する必要がある。

もう一つの成因としては、銑鉄を脱炭し鋼を製造する精錬が考えられる。銑鉄の脱炭法としては近世たたら吹製鉄における大鍛冶がよく知られている。この方法は銑鉄を羽口前にアーチ状に積み重ね、さらに小炭で覆い底部に点火し、空気酸化によって脱炭するというものである。空気送風によって、積み重ねられた銑鉄は内部にあるものから溶融し滴下する。この時、羽口付近の酸化性火焰にふれ、酸化されて鋼（左下鉄）となる。ここまでの操作は「左下」と呼ばれる。左下鉄は再度同じ火床炉にアーチ状に積まれ、上述と同様にして脱炭が計られる<sup>4)</sup>。この方法は固体状態にある銑鉄を部分溶融させながら、脱炭を進めるという点に特徴がある。さらに検討しなければならない脱炭方法として、溶銑を造り、つぎに造滓材を使用し空気を送り込みながら脱炭を進めるという方法もある。いずれの場合であっても、空気酸化に伴い酸化鉄に富んだスラグが生成するはずである。そして後者のように、操作にあたって造滓材が使用され鉄浴表面にスラグが生成していた場合には、酸化鉄がスラグと反応し固化することになる。発掘調査によって検出された鉄滓が

この操作によって生成したと解釈することもできる。内径が3cmで、外径に比べ細く、もう一方の端部に向かって肉厚となる形状をもち、先端が著しく部分溶融し少量の酸化鉄が固着した可能性のある No.2 羽口と鉄滓とを結びつけると、筆者は空気酸化によって銑鉄を脱炭する精錬操作の実施について追求する必要があると考える。この問題の解明には考古学と自然科学の学際的研究の進展の中で明らかにしていきたい。

#### 註

- 1) 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 半澤武彦氏からのご教授による。
- 2) 大澤正巳「古墳共献鉄滓から見た製鉄の開始」季刊考古学、8、1984年、p.36-46。
- 3) 河瀬正利「中国地方におけるたたら製鉄の展開」『たたらから近代製鉄へ』平凡社、1990、p.11。
- 4) 村上英之助「中沢・村上の往復書簡」たたら研究、36・37、1996年、p.78-88。

表1 栗林遺跡出土資料の概要

No.	資料名	検出遺構	外 観 上 の 特 徴
1	羽口	3号土坑底部	先端は黒褐色を呈し、部分熔融している。先端部内径3cm、外形7cmを呈し、もう一方の端部に向い気道はそのままの形状で、外形のみ徐々に広がる。
2	鉄滓	3号土坑底部	黒褐色を呈する流状滓。表面に錆が付着している。

注) 資料名と検出遺構は財団法人岩手県埋蔵文化センター 半澤武彦氏に、外観上の特徴は分析者による。

表2 羽口の化学組成

	化 学 成 分 (mass%)													
	T.Fe	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V	K	Igloss
羽口先端(Sm1)	3.80	<0.001	0.071	0.065	0.004	0.004	0.530	30.6	1.31	10.7	0.726	0.016	—	—
羽口基部(Sm2)	2.77	<0.001	0.037	0.110	0.005	0.003	0.440	29.6	0.731	10.8	0.454	0.016	1.14	6.22

注) 化学分析はICP-AES法による。

表3 鉄滓の分析結果

	化 学 成 分 (mass%)														鉱物組成	
	T.Fe	FeO	M.Fe	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V		K
	41.55	39.4	<0.1	<0.001	0.091	0.233	0.004	0.004	0.270	13.7	1.03	4.31	0.500	0.013	2.25	F,M

注) FeOは鉄鉱石-酸可溶性鉄(Ⅱ)法、M.Feは鉄鉱石-金属鉄定量法、他はICP-AES法による。

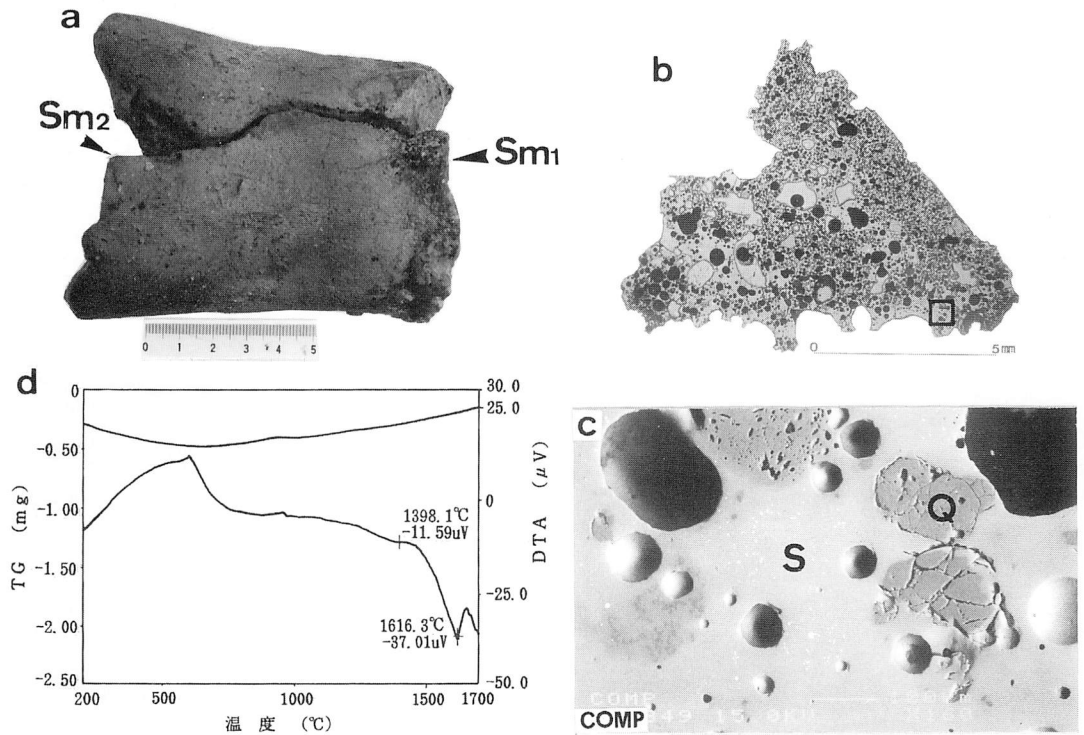


図1 No.1羽口の外観と組織観察結果ならびに示差熱・熱重量変化曲線  
 a ; 外観、矢印は試料片摘出位置。 b ; 摘出した試料片の組織観察結果  
 c ; bの枠で囲んだ内部のEPMAによる組成像 (COMP) と定性分析結果。  
 Q ; 石英、S ; ガラス質けい酸塩。  
 d ; 示差熱・熱重量変化曲線。測定はアルゴン雰囲気下で実施。

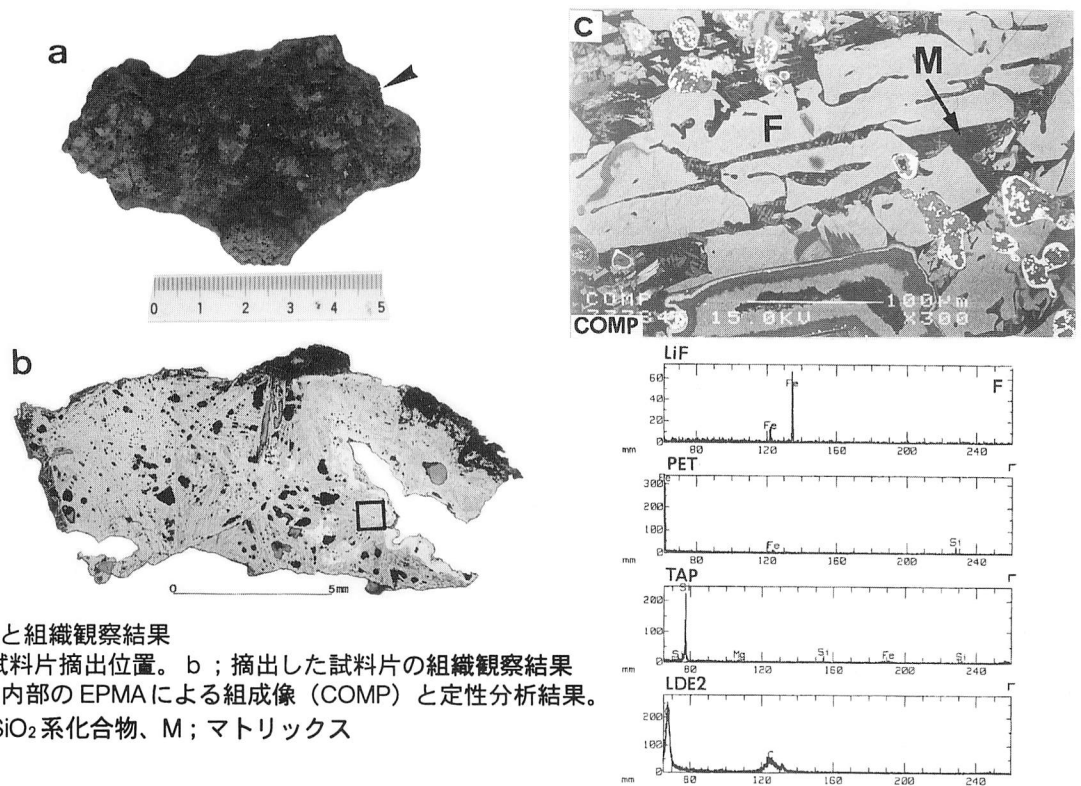
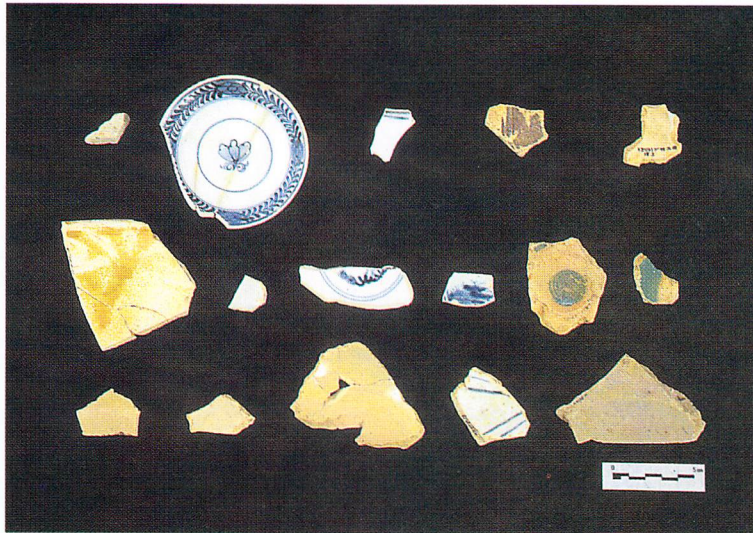


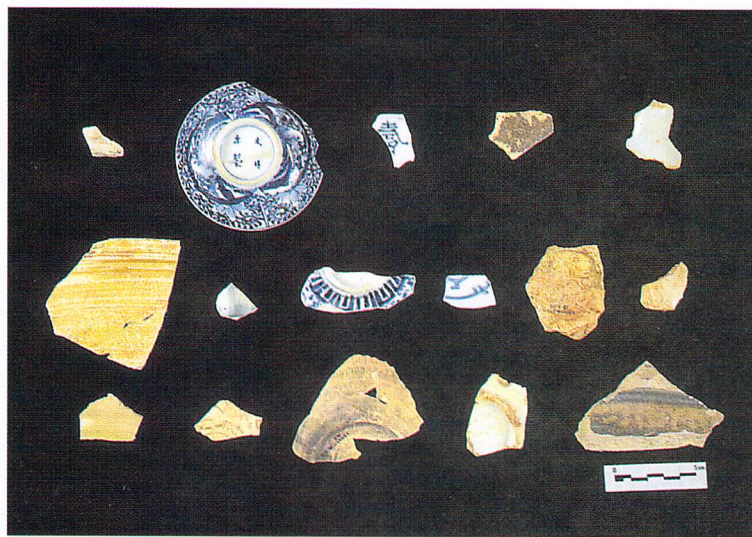
図2 No.2鉄滓の外観と組織観察結果  
 a ; 外観、矢印は試料片摘出位置。 b ; 摘出した試料片の組織観察結果  
 c ; bの枠で囲んだ内部のEPMAによる組成像 (COMP) と定性分析結果。  
 F ; FeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物、M ; マトリックス



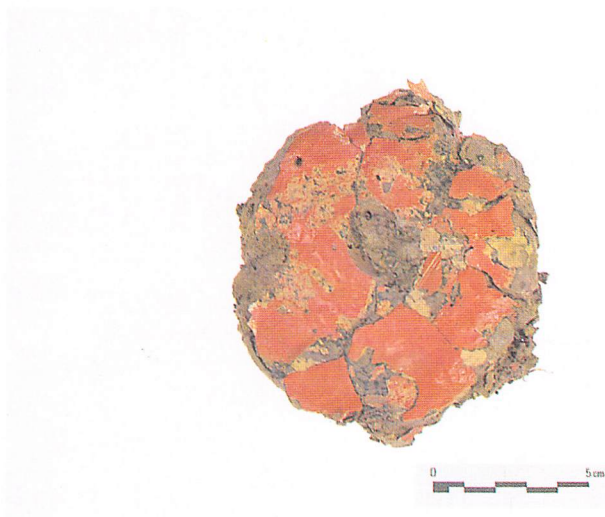
# 写 真 图 版



陶磁器（内面）



陶磁器（外面）



漆器碗（井戸跡から出土）

写真図版1 栗林遺跡出土遺物（陶磁器・漆器碗）



遺跡遠景（西方向）

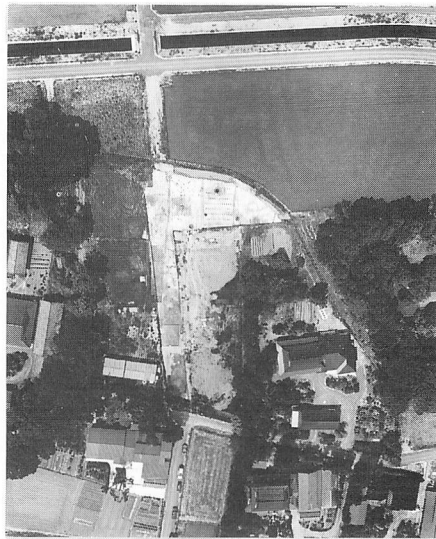


遺跡上空（上が北）

写真図版2 栗林遺跡全景



昭和20年代初頭の遺跡周辺  
(この写真は、米軍が地形測量のために撮影していたものである)



現在の様子 (上の写真とほぼ同縮尺である)

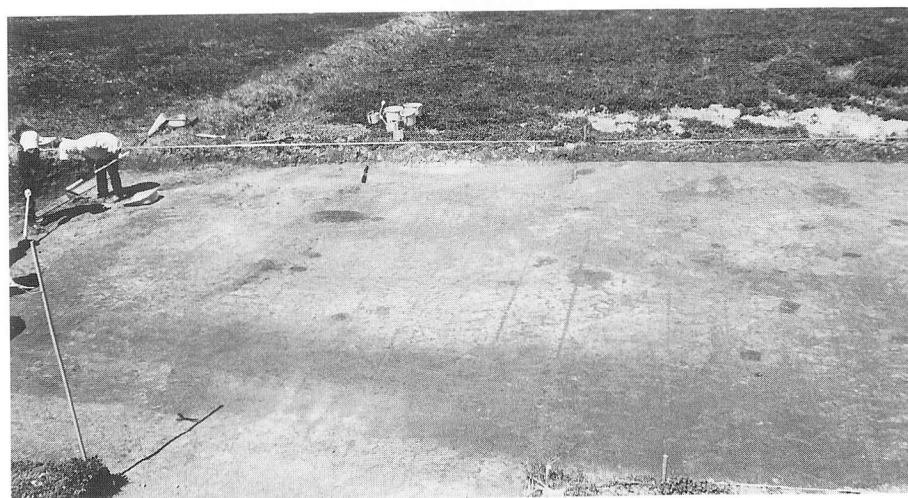
写真図版3 遺跡周辺における変化の様子



南端部調査前風景（北方向）



中央部調査前風景（北方向）



攪乱の状況（ごく浅い表土の下にある検出面には、キャタピラ痕が残っていた）

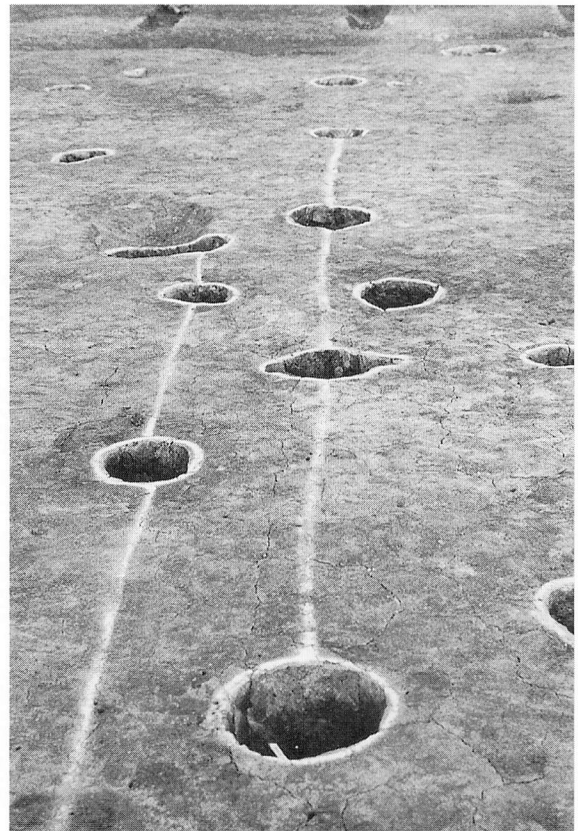
写真図版4 調査前風景・攪乱の状況（中央～北側）



1号掘立柱建物跡全景（東方向）

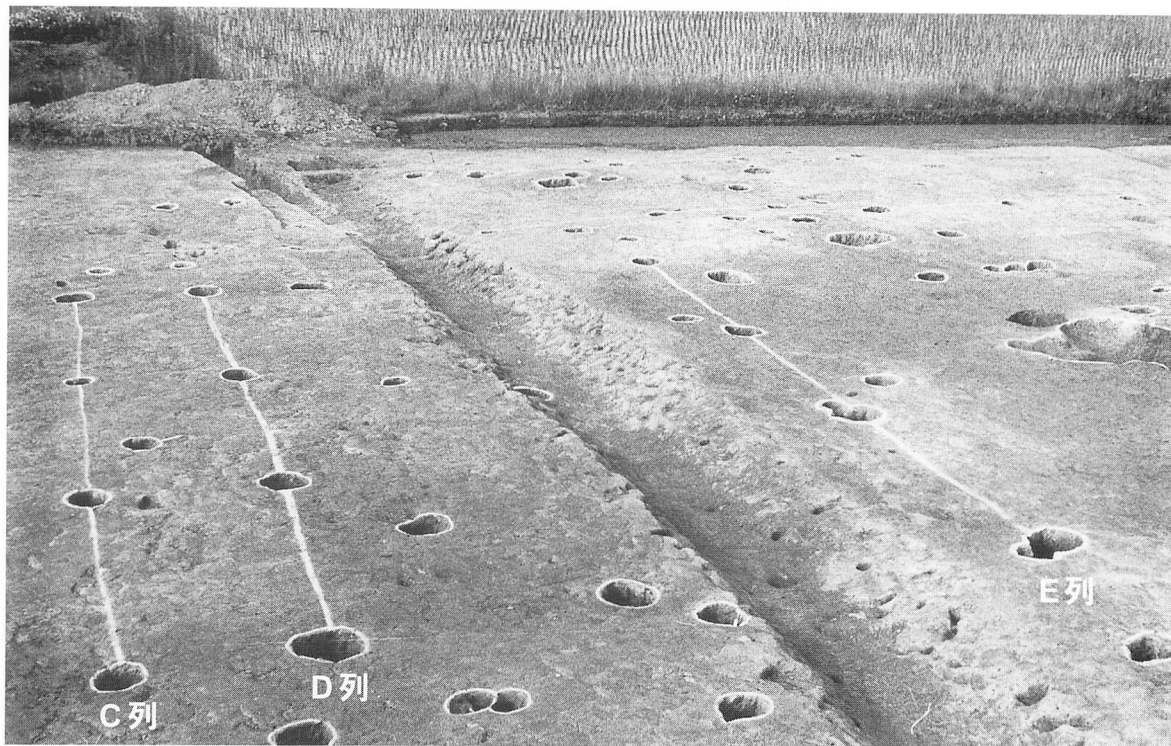


A列全景（東方向）

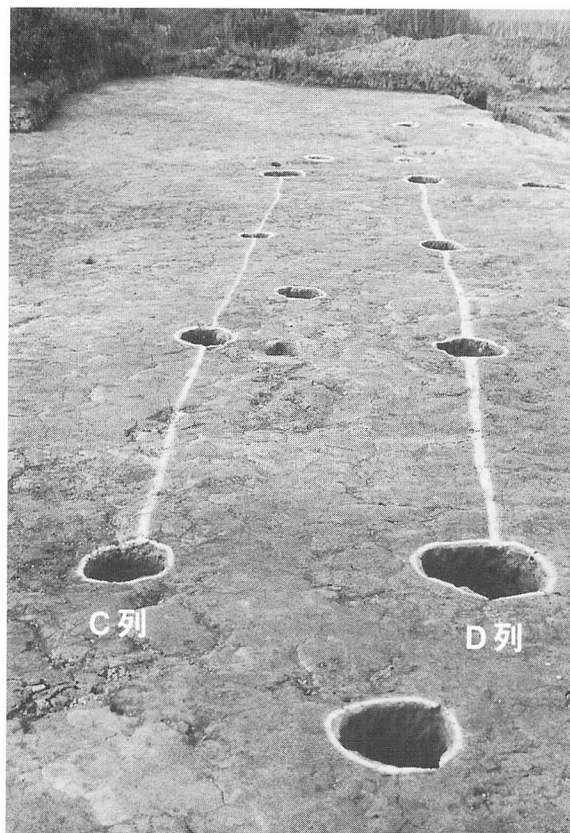


B列全景（東方向）

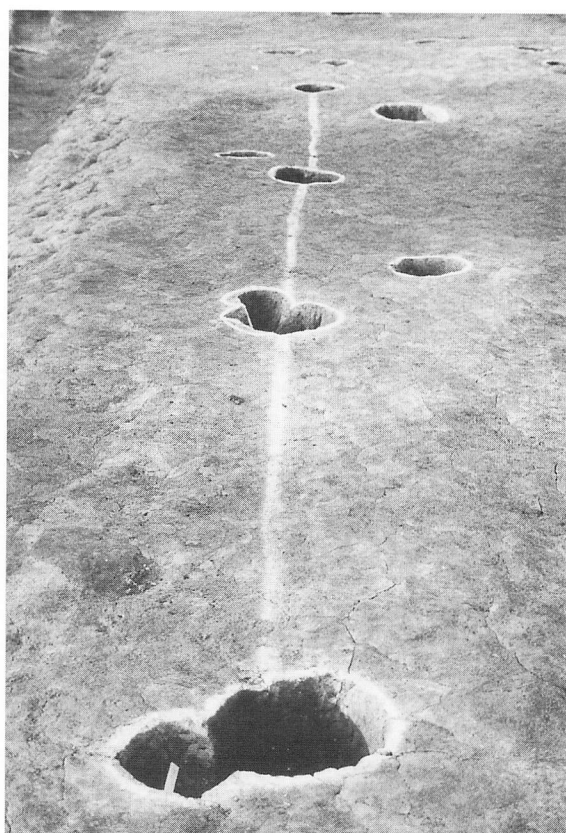
写真図版5 1号掘立柱建物跡



2号掘立柱建物跡全景（北方向）



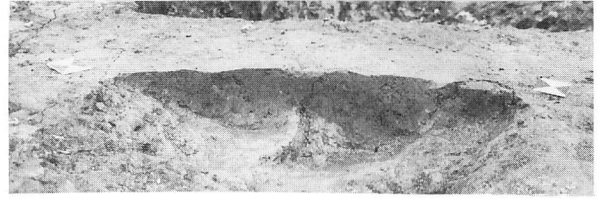
C・D列全景（北方向）



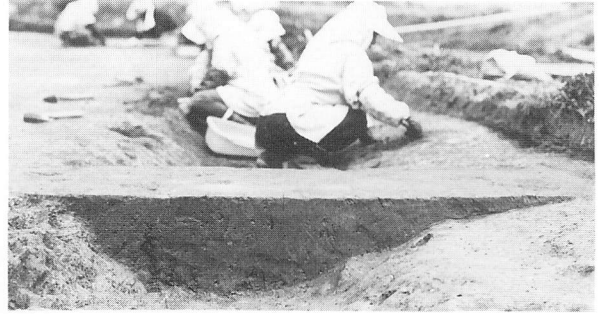
E列全景（北方向）



10号溝↑ ↑1号溝  
1号溝・10号溝 全景（北方向）



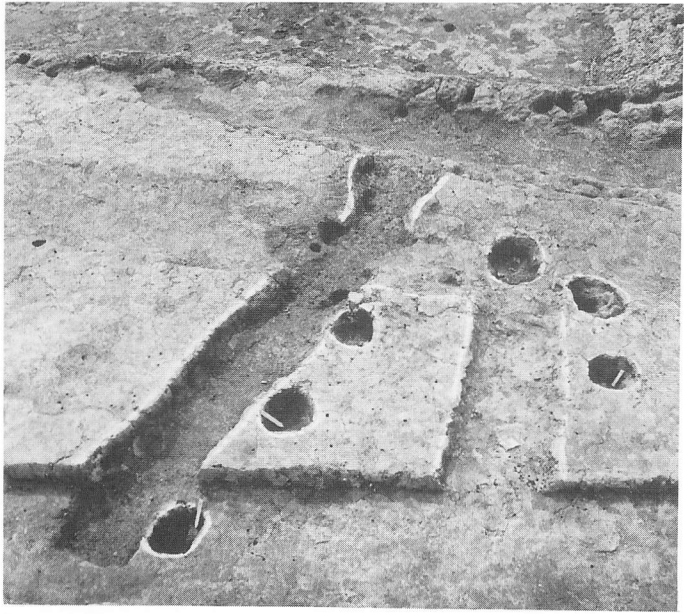
10号溝（北ベルト・北断面）



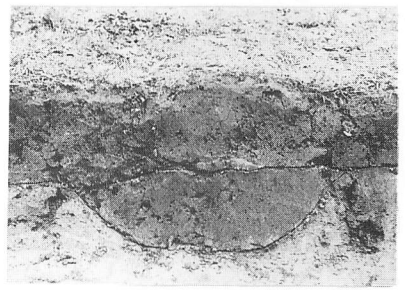
1号溝・10号溝（中央ベルト・北断面）



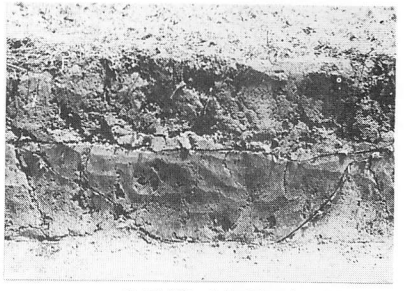
↑10号溝 ↑1号溝  
1号溝・10号溝（南ベルト・北断面）



3号溝 2号溝  
2号溝・3号溝 全景（西方向）



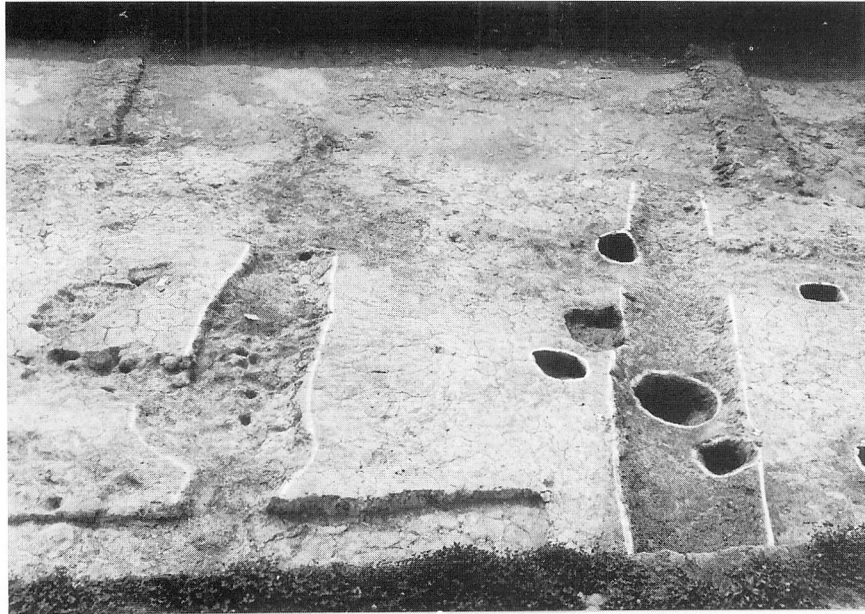
2号溝（東断面）



3号溝（東断面）

写真図版7 1・10号溝 2・3号溝（全景及び断面）





← 1号溝

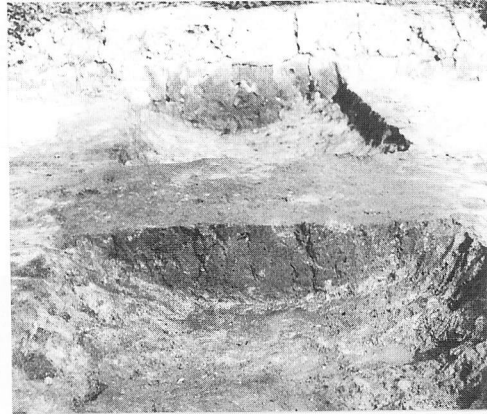
5号溝

4号溝

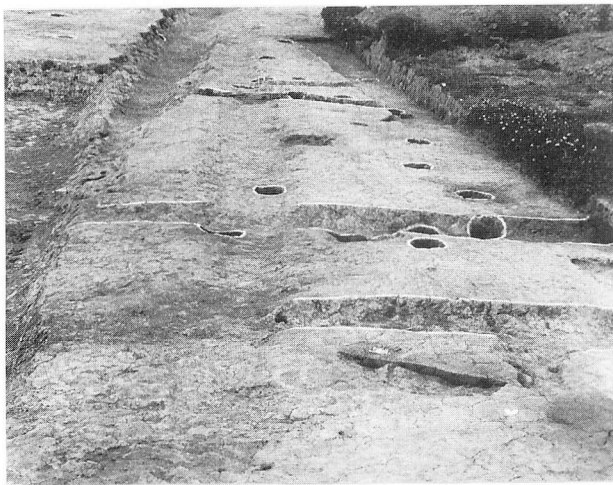
4号溝・5号溝 全景 (西方向)



5号溝 (東断面)



4号溝 (東断面)



4号溝 (奥)・5号溝 (手前) 完掘状況 (北方向)

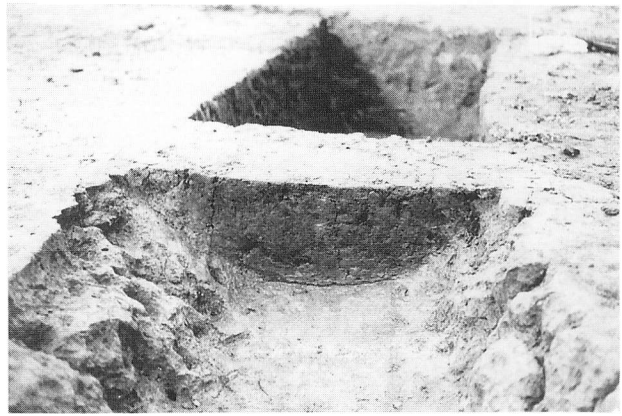


1~5・10号溝 完掘全景 (北方向)

写真図版 8 4・5号溝 (全景及び断面) 1~5・10号溝 (完掘全景)



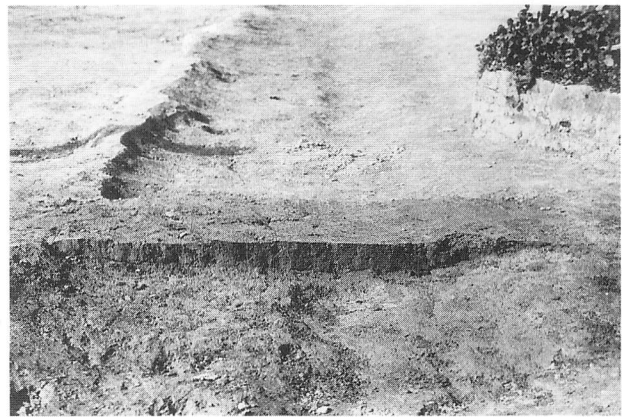
6号溝全景  
(北方向)



6号溝 (北断面)



8号溝全景  
(北方向)



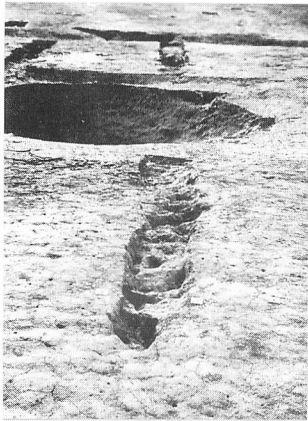
8号溝 (北断面)



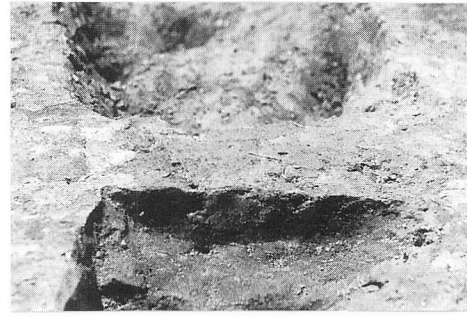
7・9号溝全景  
(北方向)



7号溝 (北断面)



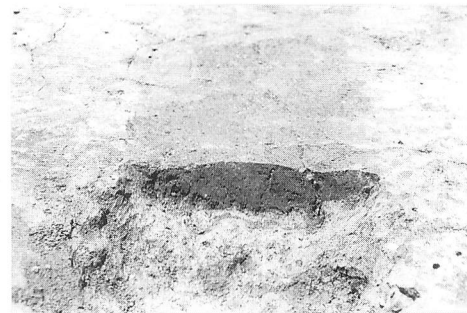
11号溝全景  
(西方向)



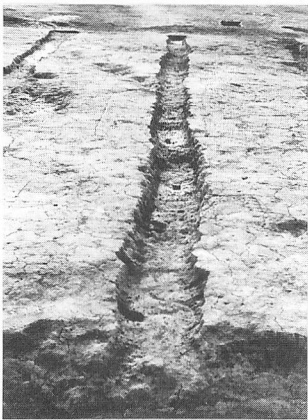
11号溝 (西断面)



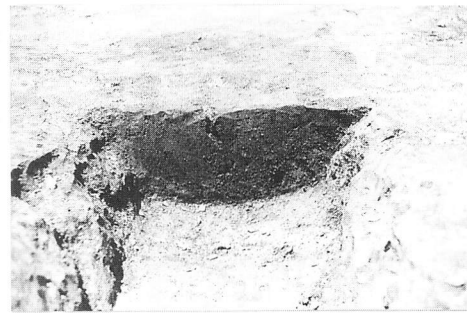
12号溝全景  
(西方向)



12号溝 (西断面)



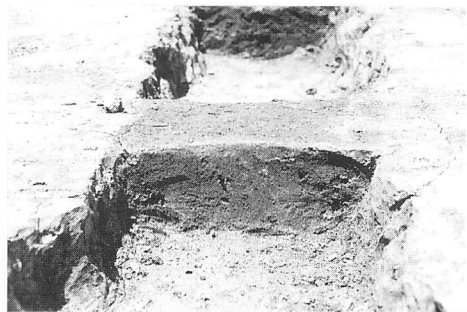
13号溝全景  
(西方向)



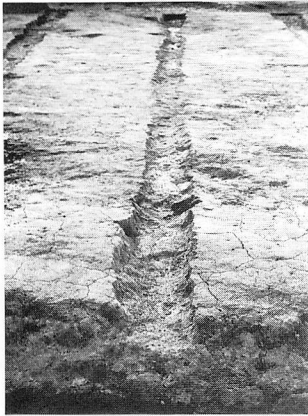
13号溝 (西断面)



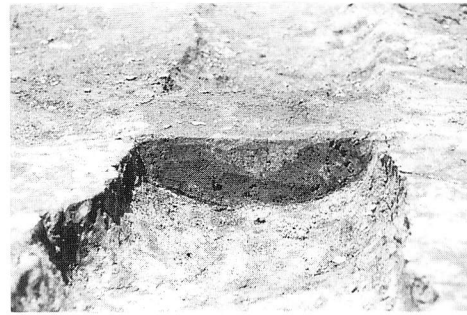
14号溝全景  
(西方向)



14号溝 (西断面)



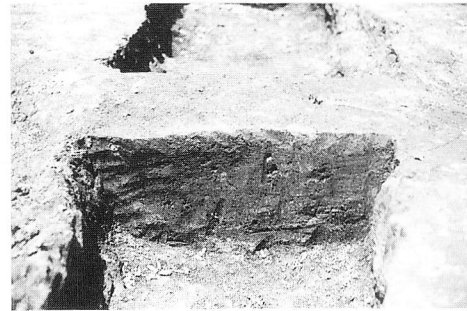
15号溝全景  
(西方向)



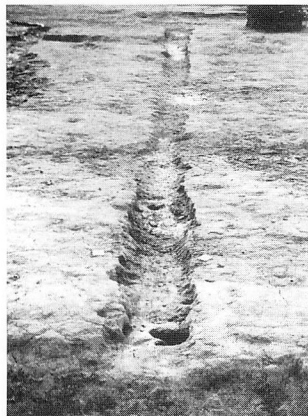
15号溝 (西断面)



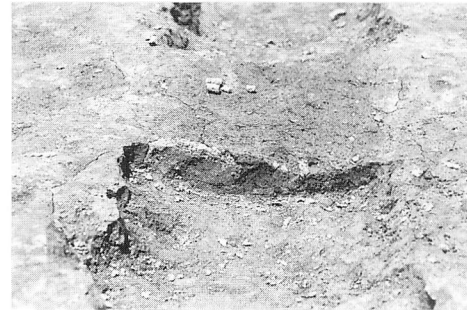
16号溝全景  
(西方向)



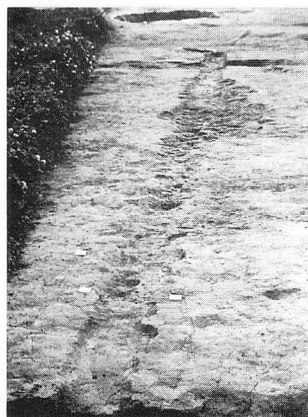
16号溝 (西断面)



17号溝全景  
(西方向)



17号溝 (西断面)



18号溝全景  
(西方向)



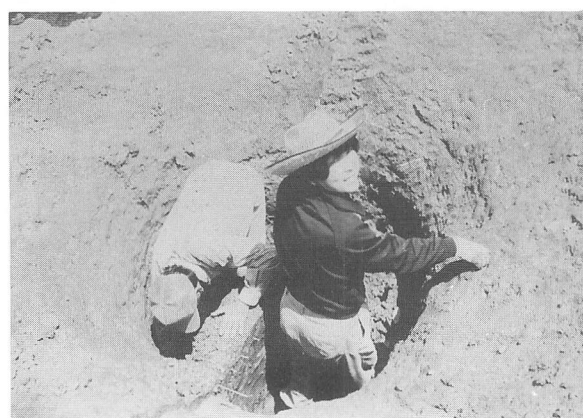
18号溝 (西断面)



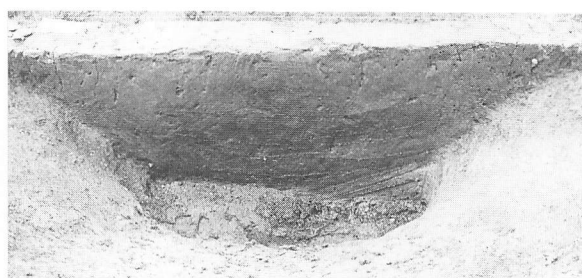
北端部溝跡群（7～9号溝・11～18号溝）  
完掘全景（北西方向）



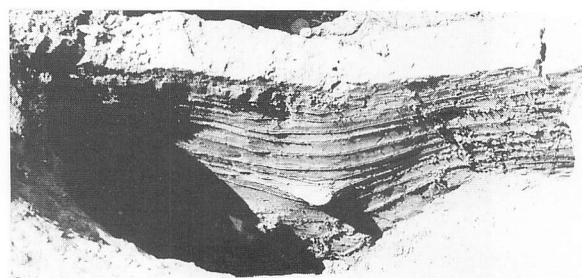
7号溝実測風景



井戸跡（底部）作業風景



井戸跡上層（北西断面）



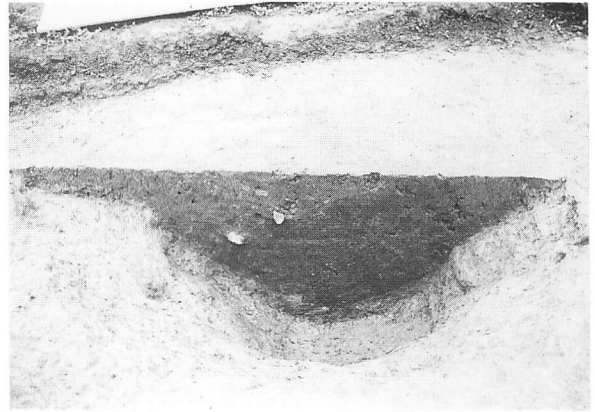
井戸跡下層（北西断面）



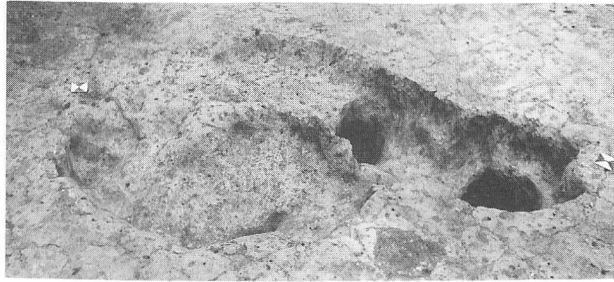
←井戸跡完掘（東方向）



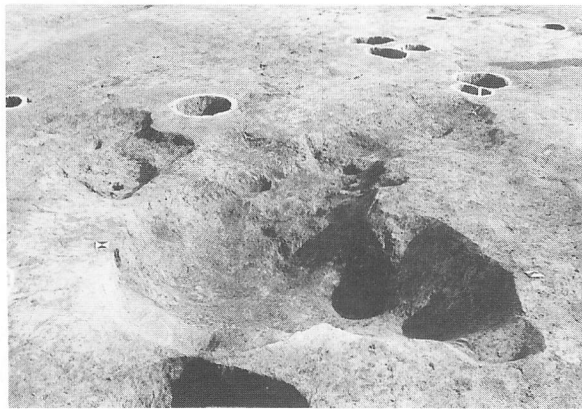
1号土坑完掘（南西方向）



1号土坑（南断面）



2号土坑完掘（西方向）



3号土坑完掘（南方向）



3号土坑（南断面）



3号土坑（遺物出土状態）



羽口（遺物 No.42）



土師器・坏（遺物 No.4）

写真図版 13 1～3号土坑（全景及び断面・遺物出土状態）



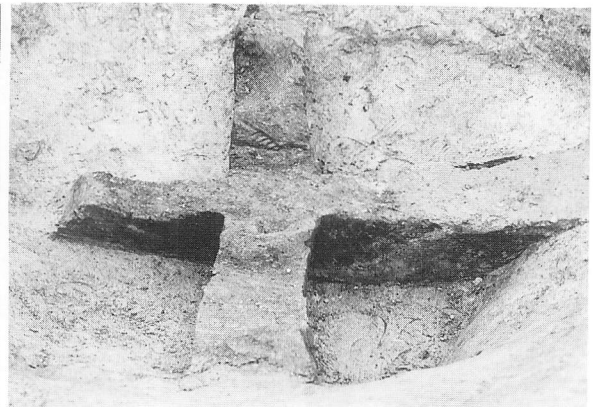
検出時の状況（上面を9号溝が通っている）



作業風景



南断面

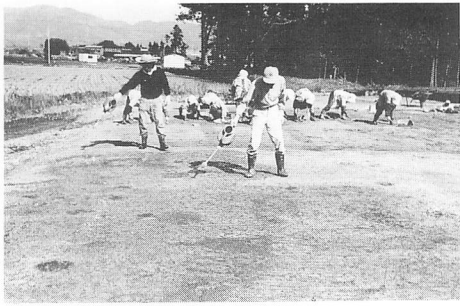


南断面（底部）

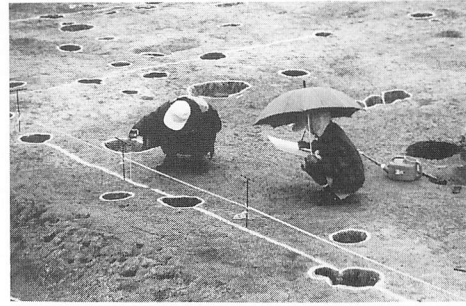


完掘（北方向）

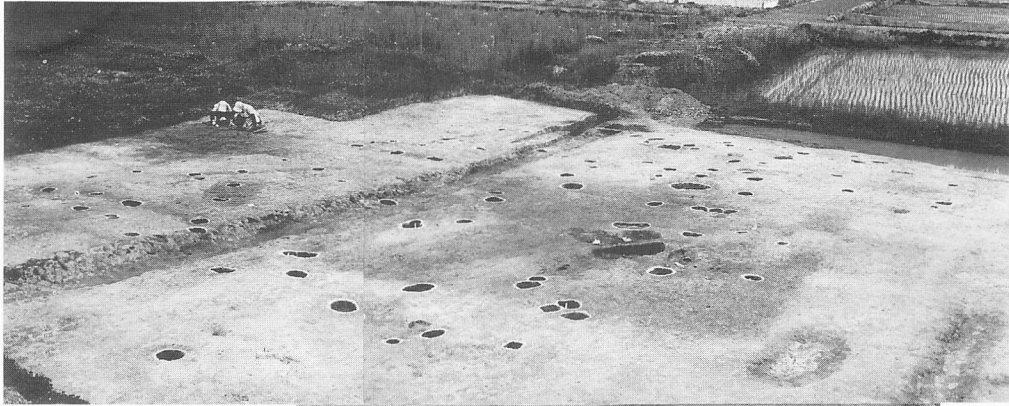
写真図版 14 4号土坑（全景及び断面）



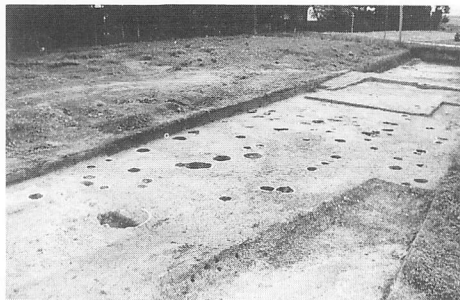
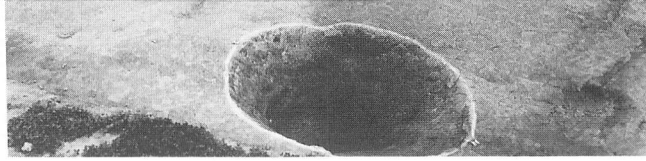
検出作業風景（水まき）



実測風景（2号掘立柱建物跡）



調査区北側 柱穴状土坑群  
分布状況（北方向）



調査区中央 柱穴状土坑群分布状況（南方向）



検出状況（北側～北東部）

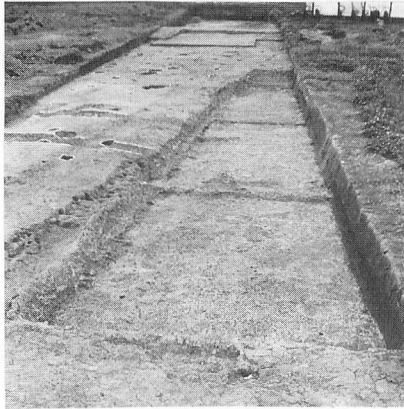


完掘全景（中央～南側）



完掘全景（北側～北東部）





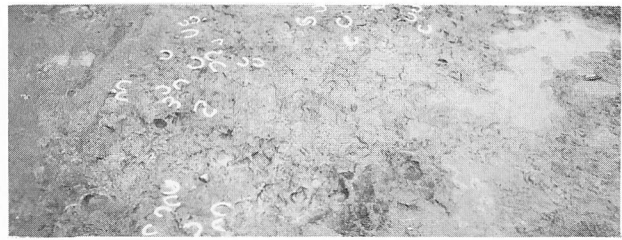
中央部水田跡全景（南方向）



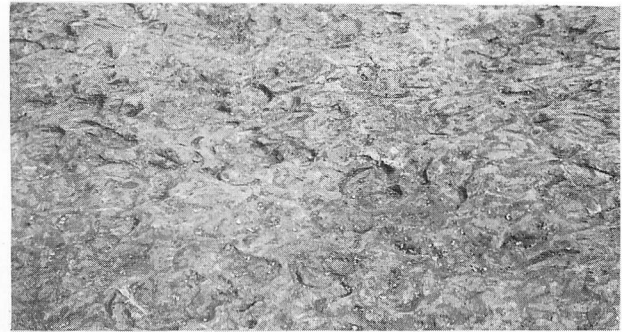
検出作業風景



南端部水田跡全景（北方向）



下部グライ化層下から蹄跡が検出された

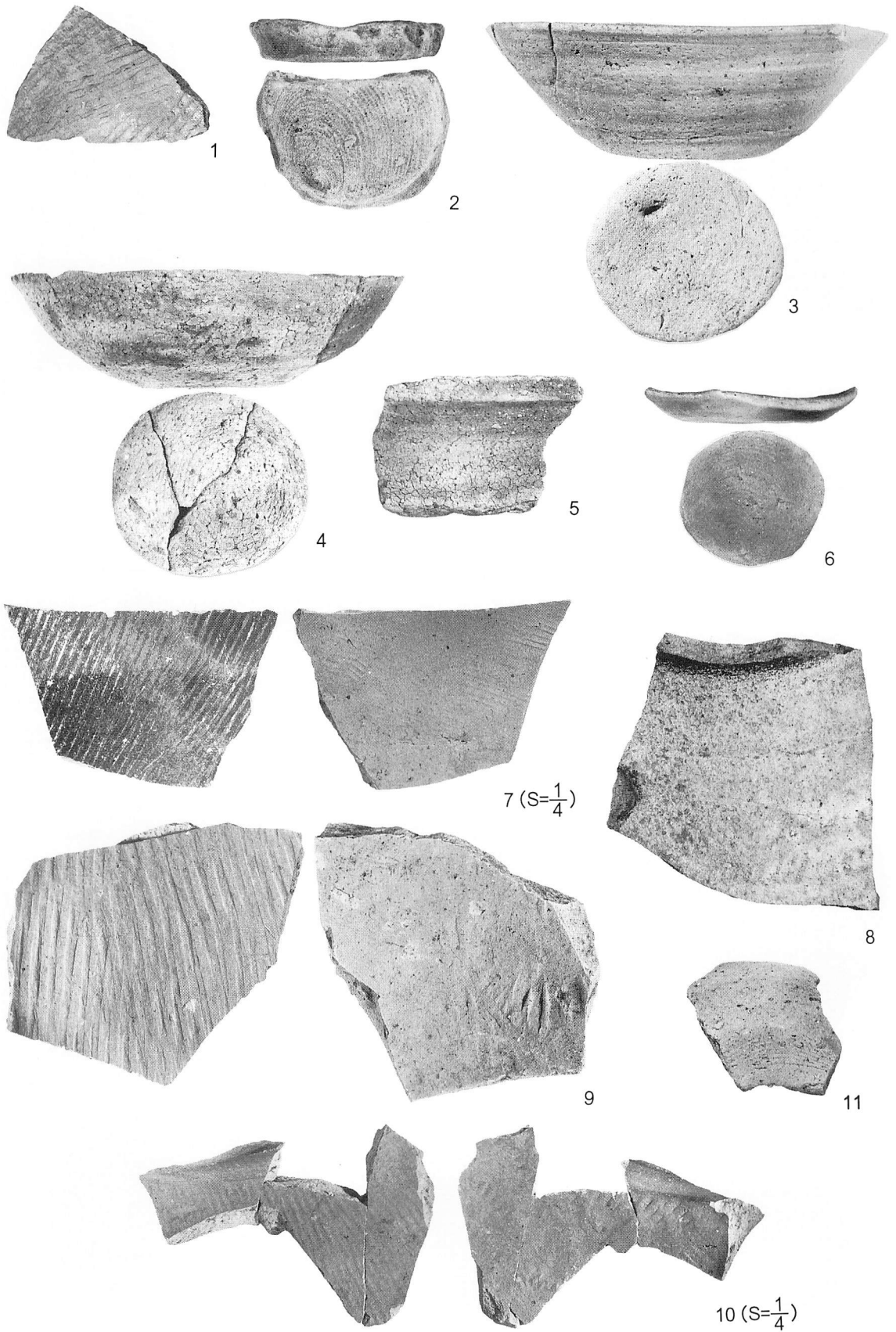


蹄跡 残存状況



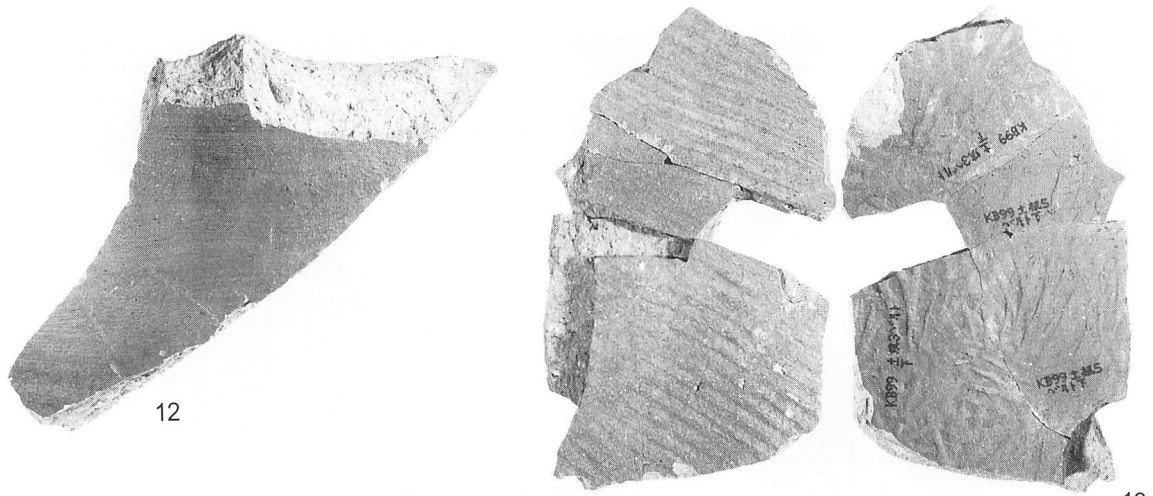
←蹄跡拡大写真

写真図版 16 中央・南端部水田跡（近代）



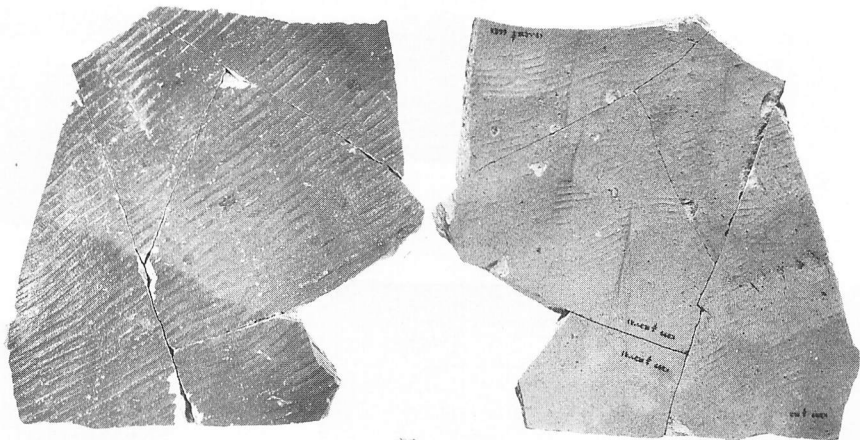
〈S= $\frac{1}{2}$ 〉

写真図版 17 遺構内出土遺物 (1)

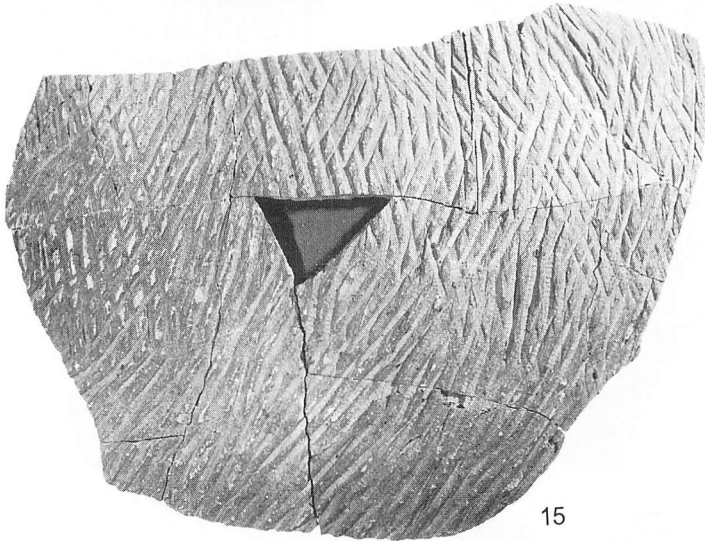


12

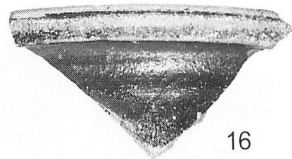
13



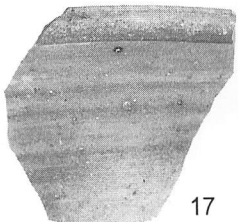
14 (S=1/4)



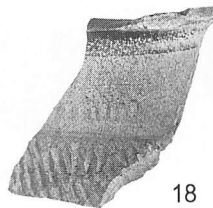
15



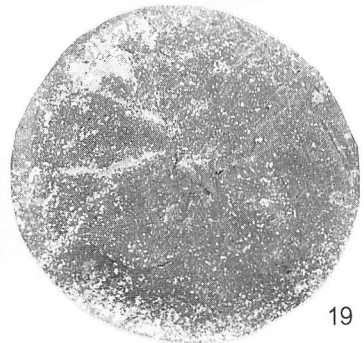
16



17



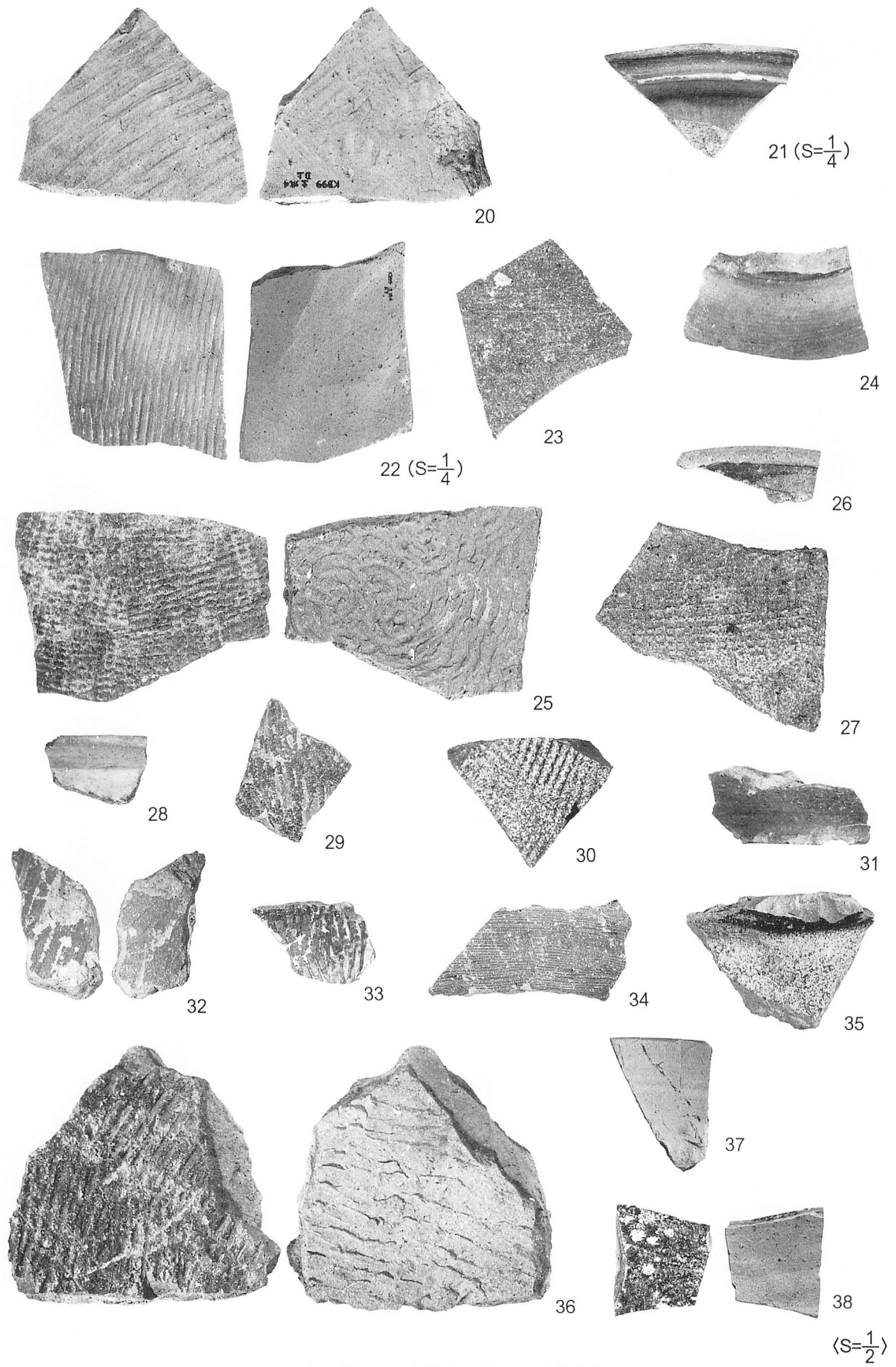
18



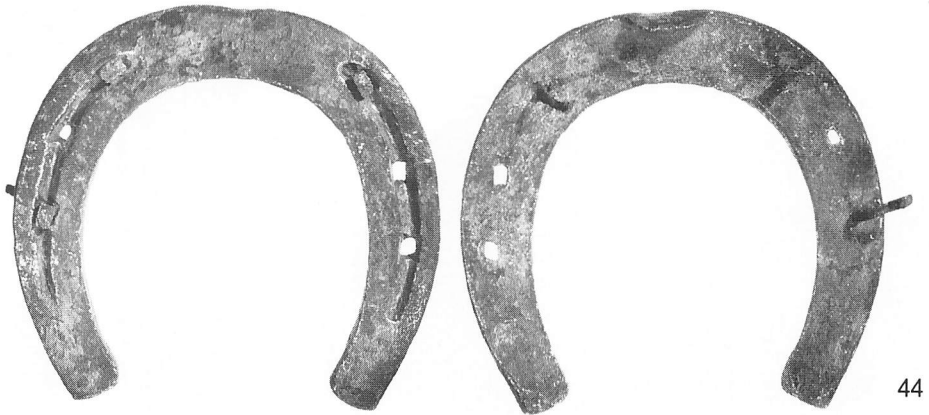
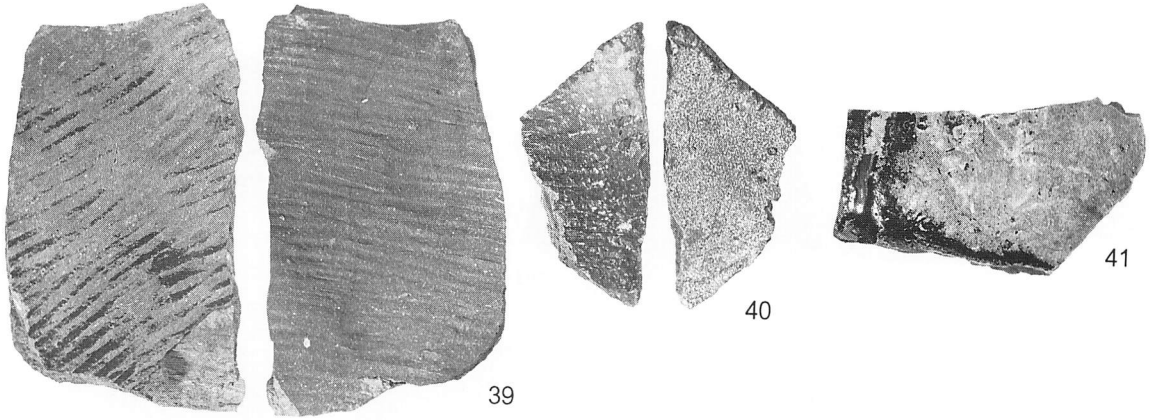
19

(S=1/2)

写真図版 18 遺構内出土遺物(2)

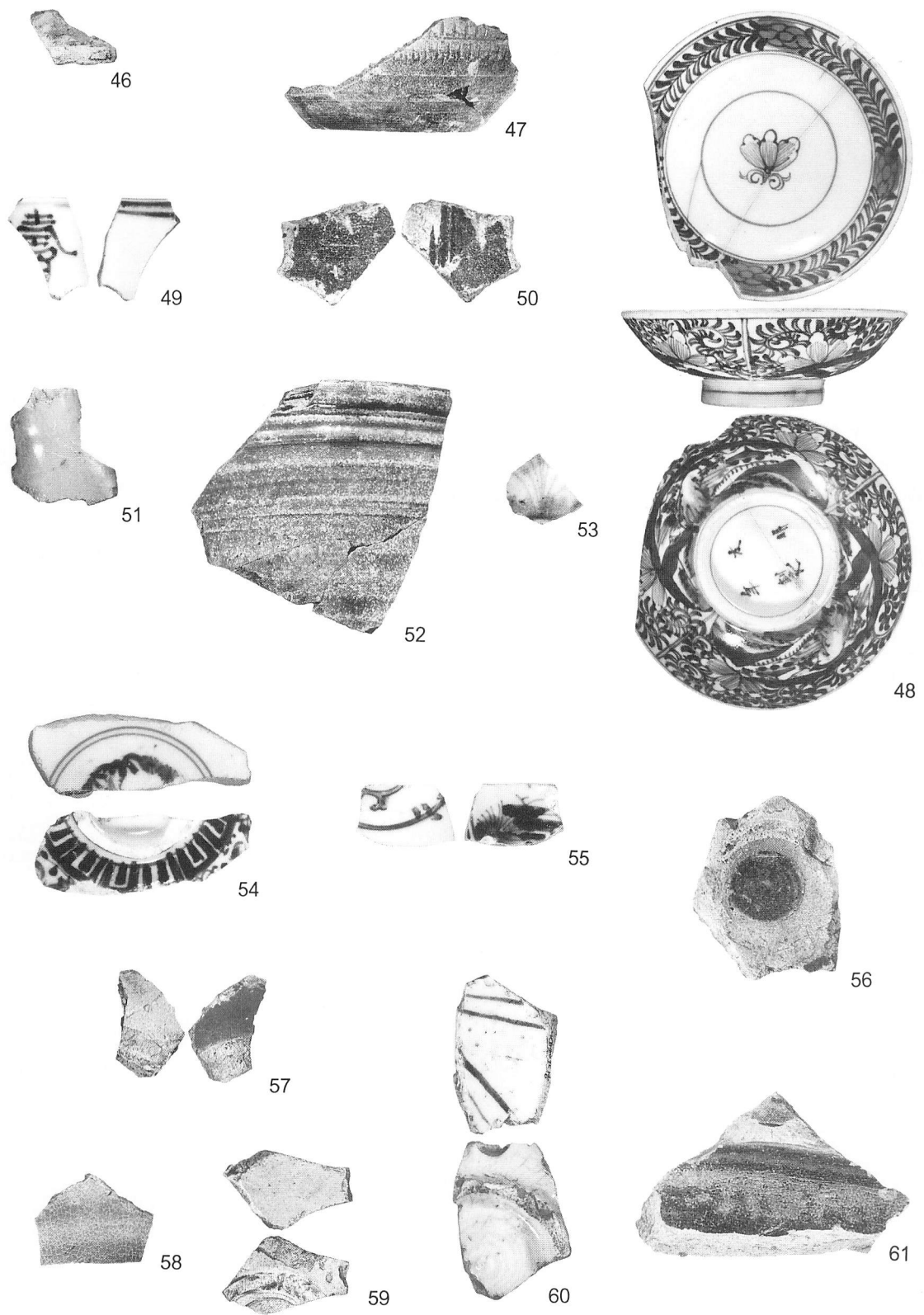


写真図版 19 遺構内・外出土遺物 (3)



〈S=1/2〉

写真図版 20 遺構内・外出土遺物(4)



〈S=1/2〉

写真図版 21 遺構内・外出土遺物(5)-陶磁器-

# 報告書抄録

ふりがな	くりばやしいせき はくつちようさ ほうこくしょ							
書名	栗林遺跡発掘調査報告書							
副書名	担い手育成基盤整備事業（真城地区）関連遺跡発掘調査							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第363集							
編著者名	半澤武彦・菅原靖男							
編集機関	財団法人 岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001・9002							
発行年月日	西暦2001年 1 月 25 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くりばやしいせき 栗林遺跡	いわてけんみずきわし 岩手県水沢市 しんじょうあざはつたんまち 真城字八反町  39ほか	03204	NE36- 2315	39度 05分 16秒	141度 09分 10秒	1999.4.8 ～6.7	1,600m <sup>2</sup>	担い手育成基盤整備事業真城地区開発に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
栗林遺跡	集落跡等	平安時代 近世	掘立柱建物跡 2棟 柱穴列 2列 柱穴・柱穴状土坑 213基 溝跡 18条 土坑 4基 井戸跡 1基 水田跡(近代) 2箇所		須恵器 (坏・甕) 土師器 (坏・甕) 陶磁器 漆 椀 羽口片 蹄 鉄			

## 平成 12 年度 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

### 【職員】

所 長	伊 藤 民 也	副 所 長	櫻 田 次 男
〔管理課〕			
管 理 課 長	川 浪 清 徳	嘱 託	千 葉 芳 夫
管理課長補佐	山 崎 善 光	〃	藤 島 恵 子
主 査	立 花 多加志	〃	新 田 卜 ヨ
主 事	日 影 睦 夫	〃	佐々木 光 重
〔調査第一課〕		〔調査第二課〕	
調査第一課長	佐々木 勝	調査第二課長	高橋 與右衛門
調査第一課長補佐	佐々木 清 文	調査第二課長補佐	中 川 重 紀
主任文化財専門調査員	小山内 透	主任文化財専門調査員	高 橋 義 介
文化財専門調査員	赤 石 登	〃	金 子 佐知子
〃	吉 田 充	文化財専門調査員	中 田 迪
〃	小 原 眞 一	〃	工 藤 道 孝
〃	小笠原 健一郎	〃	古 館 貞 身
〃	金 野 進	〃	阿 部 眞 澄
〃	鳥 居 達 人	〃	松 尾 芳 幸
〃	金 子 昭 彦	〃	工 藤 徹
〃	東海林 淳 美	〃	前 田 稔
〃	阿 部 勝 則	〃	岩 渕 計
〃	羽 柴 直 人	〃	早 坂 悟
〃	小野寺 正 之	〃	濱 田 宏
〃	菅 原 靖 男	〃	安 藤 由紀夫
〃	長 村 克 稔	〃	高 木 晃
〃	溜 浩 二 郎	〃	千 葉 正 彦
〃	菊 池 貴 広	〃	佐 藤 淳 一
〃	村 上 拓	〃	半 澤 武 彦
〃	本 多 準一郎	〃	杉 沢 昭太郎
〃	北 村 忠 昭	〃	中 村 直 美
〃	丸 山 浩 治	〃	星 雅 之
〃	村 木 敬	期限付専門職員	鈴 木 聡 (12月退職)
期限付専門職員	小 林 弘 卓	〃	吉 川 徹
〃	江 藤 敦	〃	北 田 勲
〃	藤 原 賢 徳 (6月退職)	〃	吉 田 里 和
〃	菊 池 賢	〃	原 美津子
〃	井 上 信 介	〃	齋 藤 麻紀子
〃	川 又 晋	〃	島 原 弘 征
〃	吉 田 真由美		
〃	北 田 博 義 (11月退職)		



---

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第363集

**栗林遺跡発掘調査報告書**

印刷 平成13年1月20日

発行 平成13年1月25日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185

TEL (019) 638-9001・9002

FAX (019) 638-8563

印刷 (株)阿部 膳写堂

〒020-0015 盛岡市本町通2丁目8-37

TEL (019) 623-2361